

三重県斎宮跡調査事務所年報1986

史 跡 斎 宮 跡

発掘調査概報

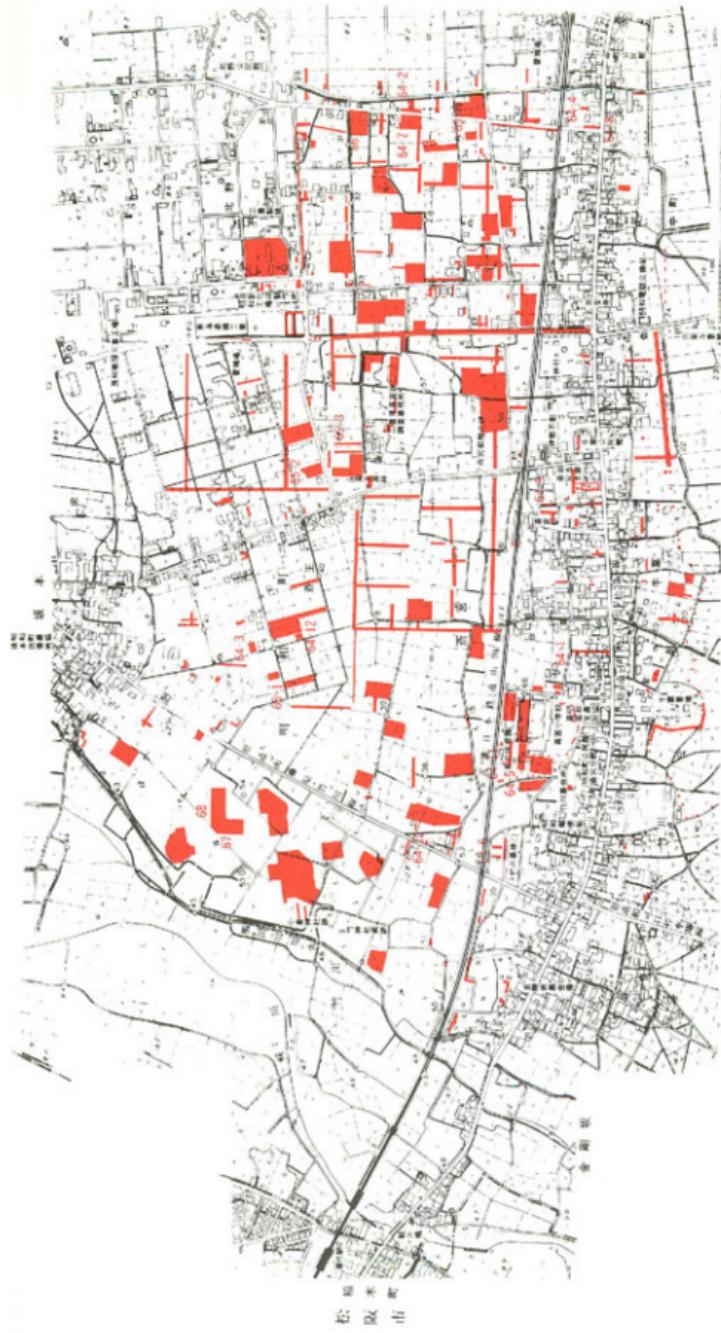
昭和62年3月

三重県教育委員会
三重県斎宮跡調査事務所



史跡環境整備事業 (東から)

昭和61年度発掘調査地区



はじめに

史跡斎宮跡の発掘調査や諸事業を年報という形式で報告するのは今年度で8年目になりました。

今年の発掘調査に関しましては、ここ数年来、次回の保存管理計画の見直し地域である、通称中町裏を重点的に調査してきましたが、これに加え今年から斎宮歴史博物館（仮称）建設予定地の調査を実施することになり、第67次・68次の2回にわけて実施しました。

このほか、史跡整備に先行する調査も、合わせて行っております。このような調査の積み重ねで、今年度末で調査面積は約13haになりましたが、調査率は8.3%にすぎず、史跡の全容解明には今後多くの努力と時間を要することになります。

史跡環境整備については、昭和57年度に実施し大方の好評を得ています『斎王の森』史跡公園をさらに拡張して、芝生広場と駐車場を広くとりました。

以上の諸事業のほか、史跡斎宮跡にとって今年度は、博物館建設にむけて多くの調査や協議が積み重ねられ、いよいよ本格的に動き始めた年であります。史跡を保存するに留まらず、それを積極的に活用することに力点を置き、あえて史跡内に建設地を求めたわけであります

が、遺構の保存に細心の注意を払いながら、慎重に進めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、ご指導を賜った斎宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文化庁、明和町の関係機関、さらに調査と保存にご協力いただいた地元関係機関各位に対し心から感謝申し上げる次第です。

昭和62年3月

三重県斎宮跡調査事務所

所長 横山洋平

目 次

I 調査の経過.....	1
II 第65次調査.....	4
IV 第66次調査.....	16
III 第67次調査.....	30
V 第68次調査.....	42
VI 第69次調査.....	57
VII 第64次調査（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）.....	69
VIII 史跡環境整備事業.....	79
IX 調査事務所要覧.....	83

例 言

1. 本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和61年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。
2. 第Ⅶ章は、明和町斎宮跡保存対策室が国庫補助金を受け調査主体となって行った現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は斎宮跡調査事務所が担当した。報告書については、別に明和町が発行している。
3. 遺構実測図作製にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の標示は座標北を用いた。
4. 遺構の時期区分については、「斎宮跡の土師器（1984年、年報）」による。
5. 遺構標示記号は次の通りである。
SB;建物 SK;土括 SD;溝 SE;井戸 SA;塀 SF;道路 SX;その他
6. 斎宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、相山女学園大学名誉教授久徳高文氏、国文化財保護審議会専門委員坪井清足氏、京都府立大学学長門脇禎二氏、名古屋大学教授檜崎彰一氏、名古屋大学教授早川庄八氏、皇學館大学助教授渡辺寛氏、三重大学助教授北原理雄氏の指導を得た。
7. 本概報の執筆・編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、横山洋平、山沢義貴、田阪仁、杉谷政樹、泉雄二があたり、服部芳人、刀根やよい、坂真弓美、若林真登、松田早苗がこれに協力した。

I 調査の経過

本年度の計画調査は次の3つの目標によって実施した。

第1は主に史跡環境整備事業に伴う第65次調査、第2は通称中町裏の第2種保存地区の昭和64年度見直しに対応するための第66次・第69次調査、第3は斎宮歴史博物館（仮称）建設に伴う第67次・第68次調査である。

第65次調査は3ヶ所に分散して5月から7月にかけて実施した。第65-1次調査は比較的調査密度の低い塚山地区北部の状況把握を目的とし、調査面積は少ないが、奈良時代の円形周溝・掘立柱建物・竪穴住居などのほか中世墓と考えられる土塚を検出した。第65-2次調査は、史跡公園拡張に伴う調査で、北部の砂利広場部分では、奈良時代では円形周溝・掘立柱建物・竪穴住居などが、平安時代後期と末期では掘立柱建物・井戸・溝、他に鎌倉時代の溝がみつかった。第65-3次調査は、芝生広場予定の東部水田部分である。検出遺構は、東西道路側溝と井戸（平安時代末期～鎌倉時代）以外は粘土取りで削平されていた。このように第65次調査では、特に奈良時代円形周溝の分布、性格などを検討する新たな資料を得ることができた。

第66次調査は、中町裏のなかでも東北部にあたる字東加座の通称役場道西となりて7月から10月にかけて実施した。前沖溝に平行して走る区画溝とともに奈良時代の掘立柱建物・竪穴住居・井戸、平安時代では初期・前期の掘立柱建物が主体で、平安時代後期・鎌倉時代の遺構が若干みとめられるにとどまる。この調査では、宮城東部で増加している奈良時代の掘立柱建物群を新たに加えたことのほか、全時期を通じて比較的規模の小さな建物のまとまる地域であることが明らかになった。

第67次調査と第68次調査は古里北部の博物館建設予定地で9月から翌年2月まで2次にわたりて実施した。隣接して設定したこの2回の調査では、弥生時代方形周溝・削平された古墳時代後期円墳・飛鳥時代竪穴住居も検出されたが、主体は奈良時代全時期にわたる竪穴住居・掘立柱建物・溝であった。また、これまでの古里地区数次の調査と同様に平安時代の遺構はほとんど見られず、鎌倉時代の建物・井戸およびそれを大きく囲うと思われる溝が多く検出された。このなかで特に注目されるのは、奈良時代前期の幅の広い溝で、北東から南西に直線的に掘られており、以前の調査と合わせてみると、古里地区奈良時代の地割方向に強い規制をもつものと考えられる。また、いわゆる「溝もち」と呼称される掘立柱倉庫も2棟検出した。

第69次調査は、通称役場道の近鉄線に近い東側で宮城東端部の状況把握を目的に12月から翌年2月にかけて実施した。平安時代中期・後期の建物も若干あったが、主体は奈良時代後期から平安時代前期のもので、宮城東端の区画内の建物配置をより明らかにするとともに、この地

域における奈良時代にさかのほる掘立柱建物群を新たに加えることになった。

現状変更に伴う緊急調査は、小規模住宅開発で1件、斎宮小学校校庭整備で1件、町道側溝に関して1件の合計3件については原因者負担の調査であり、他の9件は個人住宅などに伴うもので、調査面積は総計1,845m²である。このうち第64次の2次と7次では、宮城東部の東西方向の区画溝と奈良時代竪穴住居と掘立柱建物、平安時代初期から後期にわたる多数の掘立柱建物を検出した。

史跡環境整備事業は年度当初の発掘調査をもとに、既設の『斎王の森』地区史跡公園を年度後半に拡張整備した。主な事業内容は、芝生広場と砂利広場の拡張である。

一方、博物館建設については、これを担当する博物館建設班が年度当初に県教育委員会文化課の中に設置され、建築、および展示とも、いわゆるプロポーザル方式によって基本設計担当事務所が選定され、新たに設置された博物館建設指導委員会と、斎宮跡調査指導委員会の指導をうけてその骨格がかためられた。

また、学校の夏休みの時期にあたる第66次調査では、斎宮跡保存啓発事業の一環として、今年度は大淀小学校6年生41名による体験発掘をおこなった。恒例の秋の講演会には、学習院女子短期大学講師吉野裕子氏に「伊勢神宮の祭祀と斎宮」と題して、ご講演をいただいた。

昭和61年度発掘調査地区一覧表

調査次数	調査地区	調査面積 (m ²)	調査期間	地番・地籍	所有者	備考
64-1	6 A C O - H	143	61.5.7～ 61.5.20	明和町斎宮字牛葉 3395-1他	㈱トーカイ	個人住宅 第4種保存地区
64-2	6 A G L - F	200	61.5.23～ 61.6.13	明和町斎宮字東加座 2435-1	大和谷 正	盛土及び事務所 第2種保存地区
64-3	6 A D D - A	140	61.6.16～ 61.7.4	明和町斎宮字篠林 3136-1	山路 定義	農業用倉庫 第3種保存地区
64-4	6 A G R - N	16	61.7.8～ 61.7.12	明和町斎宮字笛川 2340	丸山 定一	個人住宅 第4種保存地区
64-5	6 A C M - R ・Q・O	150	61.7.11～ 61.7.15	明和町竹川字東裏 3385-2	明和町	校庭整備 第4種保存地区
64-6	6 A C K	76	61.10.20～ 61.10.22	明和町竹川字東裏 361-2	竹川自治会	竹川自治会広場 第3種保存地区
64-7	6 A G I - G	820	61.11.18～ 61.12.17	明和町斎宮字東加座 2435-2	大和谷 正	テニスコート等 第2種保存地区

調査次数	調査地区	調査面積 (m ²)	調査期間	地番・地籍	所有者	備考
64-8	6 A G R - J	57	61.11.26～ 61.12. 1	明和町斎宮字笛川 2341-6 他	山下 勇平	個人住宅 第3種保存地区
64-9	6 A D Q - M	45	62. 1.26～ 62. 1.29	明和町斎宮字牛堀地内	明和町	町道側溝 第4種保存地区
64-10	6 A C F - A	40	62. 2.16～ 62. 2.17	明和町竹川字東裏 365-1	樋口 泰弘	農業用倉庫 第3種保存地区
64-11	6 A C M - O	54	62. 2.23～ 62. 2.28	明和町竹川字東裏 3385-2	斎小建設委 員会	飼育舎・観察池 第4種保存地区
64-12	6 A D E - B	104	62. 3. 9～ 62. 3.28	明和町斎宮字藤林 3162-3	江崎 均	個人住宅 第3種保存地区
65-1	6 A C C - M	424	61. 5. 7～ 61. 6.13	明和町斎宮字塚山 3331-1	池村 光雄	計画的面調査 第3種保存地区
65-2	6 A E G - S	510	61. 5.16～ 61. 7.11	明和町斎宮字楽殿 2908-2 他	明和町	計画的面調査 第1種保存地区
65-3	6 A E I - L · M	400	61. 5.16～ 61. 7.11	明和町斎宮字楽殿 2917-4 他	明和町	計画的面調査 第1種保存地区
66	6 A G G - C	1,748	61. 7.15～ 61.10. 15	明和町斎宮字東加座 2437-1 他	吉田 和弘	計画的面調査 第2種保存地区
67	6 A B F	1,350	61. 9.29～ 61.11. 13	明和町竹川字古里 523 他	明和町	計画的面調査 第3種保存地区
68	6 A B F	1,485	61.11.18～ 62. 2.27	明和町竹川字古里 502 他	明和町	計画的面調査 第3種保存地区
69	6 A G M - E ~ H	1,400	61. 12. 11～ 62. 3. 8	明和町斎宮字東加座 2373 他	山路 隆行 他	計画的面調査 第2種保存地区

II 第65次調査

本年度第1回目の計画調査として実施した第65次調査は、塚山地区で1ヶ所、楽殿地区で2ヶ所の計3ヶ所で、各々400~500m²の調査区を設定して調査を行った。なお、塚山地区的ものは第65-1次調査、楽殿地区的ものは第65-2・3次調査とし、以下地区別に記述する。

第65-1次調査 6ACC-M (塚山地区)

塚山地区の西の字界には県道南藤原竹川線が走っており、この道路沿いの東側には、20m以内の古墳が17基（円墳15基、方墳2基）確認されていて塚山古墳群と呼ばれている。今回の調査地は、この塚山古墳群の東約80mの位置にある。これまで塚山地区の計画調査は、塚山地区と南にあたる東裏・広頭地区の字界に想定されている古道部分に面した位置で第32次・第36次調査が実施されているだけで、他は今回の調査地の南50mで第8-6次調査、西30mの第41次の範囲確認調査（トレーンチ調査）や現状変更に伴う小規模調査がいくつか行われているのみである。その結果、遺構の密度は他の地域より比較的薄いものの、奈良時代の斎宮を考える上で重要な地域であることが判明している。しかし、塚山地区的面的調査が少なく、南に偏っているため、調査のあまり実施されていない北部の様子をさぐることを主な目的とした。

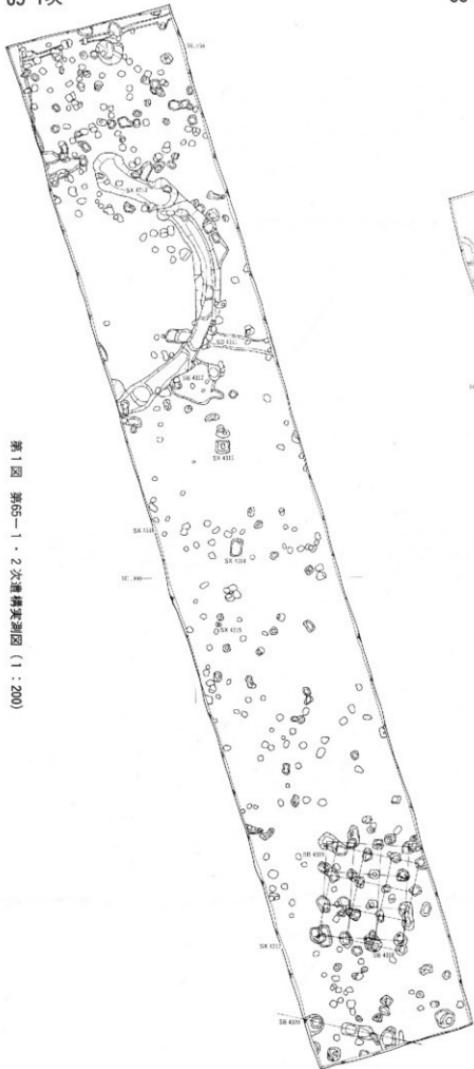
調査区は、南北に細長く幅8m、長さ54mである。層位は上より耕土、床土、黒褐色土の包含層で、遺構面までの深さは地表から北で0.7m、南で0.5mである。検出した遺構は、周辺の調査同様少なく、奈良時代前半の掘立柱建物3、円形周溝1、東西溝1、奈良時代後半の竪穴住居1、鎌倉時代以降の墓と考えられる土塙5がある。

(I) 奈良時代前半の遺構

奈良時代前半の遺構には掘立柱建物3、円形周溝1、東西溝1がある。

掘立柱建物は調査区南部にあり、規模の明らかなものは、ほぼ同じ位置で建て替えられたSB4318・4319がある。これらは3間×3間の総柱建物で側柱の柱掘形は径50cm、深さ40~50cmあるのに対し、東柱は径40cmとやや小型である。建物の方位はSB4319が北で東に4°振れるのに対し、SB4318は北で東に13°と振れが大きい。また、切り合い関係からSB4318の方が新しいことが判明しているが、あまり大きな時期差はないものと考えられる。SB4320は調査区南西隅で2間分検出した。柱間は1.9mであるが、規模は不明である。柱掘形から出土した遺物は少なく時期は決め難いが、北5mのSB4318とほぼ方位が同じことから同時期のものとした。

65-1次



65-2次



第1図 第65-1・2次遺構実測図（1：200）

円形周溝SX4310は調査区北にあり、東半分を検出した。溝の内々の径は約11mで北側に陸橋部を持つ。周溝の幅は1.2m前後で底部は平坦だが深さは一様ではなく、最深0.75m、最浅0.2mである。出土した遺物は少ないので、胴部内面に特殊なタキメの残る須恵器壺や、他に周溝底部に近い埋土中より須恵器長頸壺が出土している。

東西溝SD4311は幅0.7m、深さ0.2mで調査区西端から5mにわたり検出した。円形周溝と重複するが、その切り合い関係は明確にできなかった。また、遺物は出土していないが、溝の方向は南の建物群とはほぼ同じであるため、この時期のものとした。

(II) 奈良時代後半の遺構

この時期の遺構は竪穴住居SB4312だけである。

竪穴住居SB4312は円形周溝SX4310と一部重複し、一辺2m、深さ0.15mの隅丸方形を呈するやや小型の住居である。東辺部中央に火を受けた石が立っており、石の東側の壁は住居外へ0.6mほどつき出ていて煙道と考えられる。また、石の周囲から土師器の瓶・壺・杯などがまとまって出土した。

(III) その他の遺構

円形周溝SX4310と掘立柱建物群の間では、遺物を伴わない土塙が5基検出されている。これらは方形を呈するものと、その他のものに分かれる。

方形を呈するもののうち、SX4313は一辺0.7m、深さ0.1mで埋土には炭化物が認められた。また、SX4314は南北0.9m、東西0.5m、深さ0.3mの長方形で土塙壁面は火を受けたためか焼土化していた。

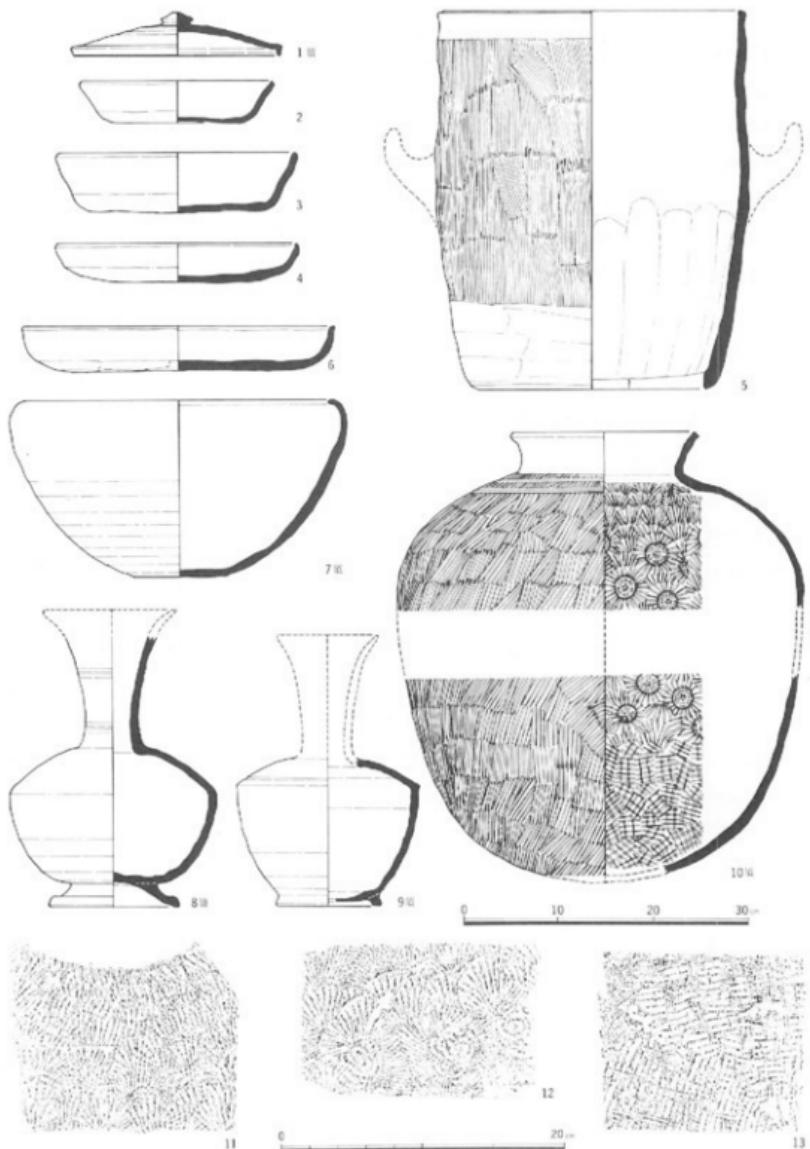
SX4315は石の周辺に人骨と炭化物を伴うもので、遺構検出面からの深さが非常に浅いため規模については不明である。また、調査区西壁の断面精査の結果、包含層上面から切り込む長さ1m前後、深さは0.2mで遺構検出面まで達しない、炭化物・人骨・石を含む土塙SX4316・4317を2基確認した。時期は不明であるが、SX4315と同様中世墓と思われる。

SX4313・4314については問題が残るが、当調査区周辺には斎宮の廃れていく鎌倉時代以降のある時期、墓の営まれる地域であることが想定できる。

(IV) 遺物

出土した遺物は整理箱で12箱と少ない。比較的良好な資料としては円形周溝SX4310と竪穴住居SB4312のものがある。綠釉陶器は2点出土しているだけである。

奈良時代前期のSX4310から出土したものには、土師器皿・壺・須恵器鉢・長頸壺・壺がある。土師器皿6は、口径21.9cm、器高3.1cmで、底部はヘラケズリをした後、ヘラミガキを施す。須恵器長頸壺は、2点溝底に近い埋土から出土している。このうち8は、奈良時代前期より古く7世紀に入るるものと考えられる。須恵器壺10は、口径19cm、胴部最大径43cm、器高47cmほど



第2図 第65—1次出土遺物 S B4312 ; 1~5、S X4310 ; 6~13 (10のみ1:6)

に復元できる。胴部外面は、平行タタキで、内面のタタキは三段に分けて使われている。胴部下半は格子状のもの（13）、胴部最大径付近はいわゆる車輪文を有するもの（12）、胴部上半は車輪文と同じ原体を使用していると思われるが、原体の周辺部が残るもの（11）、に分けられる。車輪文を有するタタキは斎宮跡でもこれまでいくつか出土しているが、全体の調整の判明したものは、昨年度の第59次調査のSD3890出土の須恵器甕について2例目である。

奈良時代後半のSB4312から出土したものには、土師器杯・皿・鉢・甕、須恵器杯蓋がある。土師器杯は4点出土しているが、2は口径13.4cm、器高2.8cmと小さく底部外面に手法と他の杯に比べ新しい要素をもっている。

（V）まとめ

今回検出した遺構は少なかったが、調査区南側で検出した奈良時代の掘立柱建物は周辺で行われた現状変更に伴う調査（第64-3次調査は当調査区の北東60mにあり、奈良時代の総柱建物が3棟検出されている。また、同じく第64-12次調査は東50mにあり、規模は不明であるが奈良時代の掘立柱建物が2棟検出されている。）や、南100mで実施した第32次調査でも総柱建物SB1700が検出されており、当地域周辺に奈良時代の斎宮を構成する倉庫群などの施設があったことが推察できる。調査面積が狭く倉庫群の性格・範囲などについては不明な点が多いが、今後周辺の調査の進展によって明らかにされていくだろう。

第65-2・3次調査 6 A E G-S・6 A E I-L・M（楽殿地区）

史跡公園「斎王の森」では整備に先立って第42次調査が実施され、検出された遺構が部分的に復元されている。今回この「斎王の森」の北（第65-2次）と東（第65-3次）の2ヶ所で史跡環境整備事業に伴う調査として発掘調査を実施した。周辺の調査としては「斎王の森」での第42次調査のほか、東40mでは第45次の計画調査などの、小規模調査が数例ある。これまでの調査から当地域は、宮城中・東部に存在する方形地割の北側にあたることが判明しており、この方形地割の北端を画する区画溝が第42次調査の南で検出されている。これらの調査では、検出されている遺構の時期としては奈良時代と平安時代末期～鎌倉時代にかけてのものが中心で、区画溝の南で検出されている平安時代初期～中期にかけての遺構があまり見られないなど様相の異なることが指摘されている。なお、第65-3次調査は「斎王の森」の第42次調査で東半分は粘土の土取りによって遺構が壊されていることが判明しているため幅4m、長さ50mの南北トレンチを2本入れて様子を探ることにした。

調査の結果、第65-2次調査の層位は、耕土、黒褐色土の包含層が各20cmあり、遺構検出面までは約40cmである。検出した主な遺構（第1図）には奈良時代のものとしては掘立柱建物1、

堅穴住居 2、円形周溝 2、東西溝 2、土塙 5 がある。平安時代としては後期～末期にかけての掘立柱建物 2、東西溝 1、鎌倉時代のものとしては溝 3 がある。

一方、第65-3次調査（第3図）は遺構面まで0.3mと浅く、全面に瓦の土取りがおよび特に中央部は深く掘削されており、わずかに調査区南端で平安時代末期～鎌倉時代の区画溝、北端で平安時代末期の井戸が1基検出されたのみである。

（Ⅰ）奈良時代前半の遺構

出土した遺物は少ないが、円形周溝SX4330・4335がこの時期の遺構と考えられる。

SX4330は調査区北東にあり、調査区を一部拡張して規模を確認した。溝の内々の径は12.6m、周溝の幅1.2m、深さ0.25～0.5mで周溝断面は台形を呈する。陸橋部については不明である。SX4335はSX4330の南西にあり、溝の内々の径は9.2mで東北部に陸橋部をもつ。溝幅1.1mで深さは南側は浅く0.2m、徐々に深くなり北側0.45mである。いずれも周溝に囲まれた部分は平坦で、他の遺構はほとんど見られない。

（Ⅱ）奈良時代後半の遺構

掘立柱建物 1、堅穴住居 2、土塙 6、東西溝 2 がある。

掘立柱建物SB4336は、調査区中央東にあり、焼土を含む柱穴を3個検出した。西妻柱列は近代の南北溝によって壊されているが、南北2間の東西棟になると思われる。

堅穴住居 2 棟は調査区南東部で検出した。SB4342は南北3.3m、東西4.2m、深さ0.3mで東壁にカマドを伴う。カマド内には逆に置かれた甕があり、支柱として使用されたと考えられる。SB4341はSB4342の西にあり、南を走る鎌倉時代の東西溝や攪乱によって壊されており、東西2.4m、南北2m以上、深さ0.3mの小型の堅穴住居である。いずれも、出土した遺物は少ない。

東西溝SD4329は円形周溝SX4335の北と一部重複するもので、幅1m、深さは西端で0.2mで東に向かって浅くなり、途中で一旦とぎれる。東西溝SD4331は同時期の東西溝SD4329、土塙SK4332より古い。幅0.5m、深さ0.15mで方向の振れは大きく西で南に24°である。遺物は出土していない。

土塙は調査区の南半で検出された。SK4337～4339は重複するもので、SK4337・4338は一辺2～3mの方形であるが、SK4339は径1mの円形を呈する。深さ各0.2m。SK4343は堅穴住居SB4342より新しいもので、南北1.6mの方形で東半は調査区外に延びる。SK4332は南北3.2m、東西1mの梢円形を呈し、深さ0.2m、出土した遺物は少ない。

（Ⅲ）平安時代後期の遺構

この時期の遺構は少なく掘立柱建物 2、東西溝 1 がある。

掘立柱建物は調査区中央南にあり、3間×2間の東西棟で、柱間はSB4333が2.1m、SB4334は2.3m等間である。建物の方位はSB4344が西で北に8°振れるのに対し、SB4333は13°と振れ

がやや大きい。

東西溝SD4327は掘立柱建物の北14mの位置にあり、幅0.6m、深さ0.3mで、方位は西で北に12°と掘立柱建物SB4333の方位とはほぼ同じである。

(IV) 平安時代末期～鎌倉時代の遺構

この時期の遺構は少なく、東西溝3、南北溝1と第65-3次調査で検出された東西溝1、井戸1がある。

東西溝SD4325は幅1.7m、深さ0.5mの比較的規模の大きいものである。北側にはより浅いSD4326がある。重複関係からSD4325のほうが新しい。南北溝SD4328は東西溝SD4325・4326に北から取り付くもので、幅0.5m、深さ0.2mの小さな溝である。東西溝の南では検出されていない。調査区南で検出したSD4340は、幅2m、深さ0.5mの比較的規模の大きいもので、遺物は少量出土した。

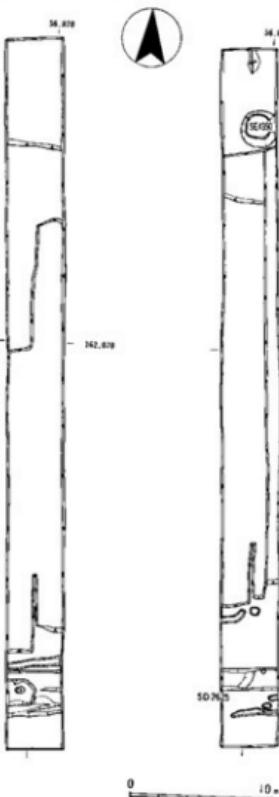
第65-3次調査で検出された井戸SE4350は、東トレンチの北端にある。径2.5mの円形で、深さは約1mまで下げたが、完掘はしていない。井戸埋土から多量の土師器とともに藤沢編年第II-4段階の山茶碗を出土している。

東西溝SD2625は、両トレンチの南端で検出した。第42次調査区から続くもので、西のトレンチでは幅3.2m、深さ0.3mと第42次調査地のものとはほぼ同じであるが、東のトレンチ東端では幅1.5m、深さ0.1mと徐々に浅くなっている。出土した遺物は少ないが、平安時代末期～鎌倉時代の遺物が混在していた。

(V) 遺物

出土した遺物は少なく整理箱で第65-2次調査は19箱、第65-3次調査は10箱である。特殊なものには、第65-2次調査から綠釉陶器6点、墨書土器1点、第65-3次調査から綠釉陶器10点、円面鏡1点、墨書土器1点がある。

奈良時代の遺物がまとまって出土した遺構は少ない。奈良時代の後期の土塙SK4344から出土したものには、土師器杯・高杯・甕がある。このうち高杯15は口径26.1cm、高さ9.1cm、杯部は浅く口縁端部は矧く外方に屈曲する。杯底部内面には螺旋状暗文が2条、外面はヘ

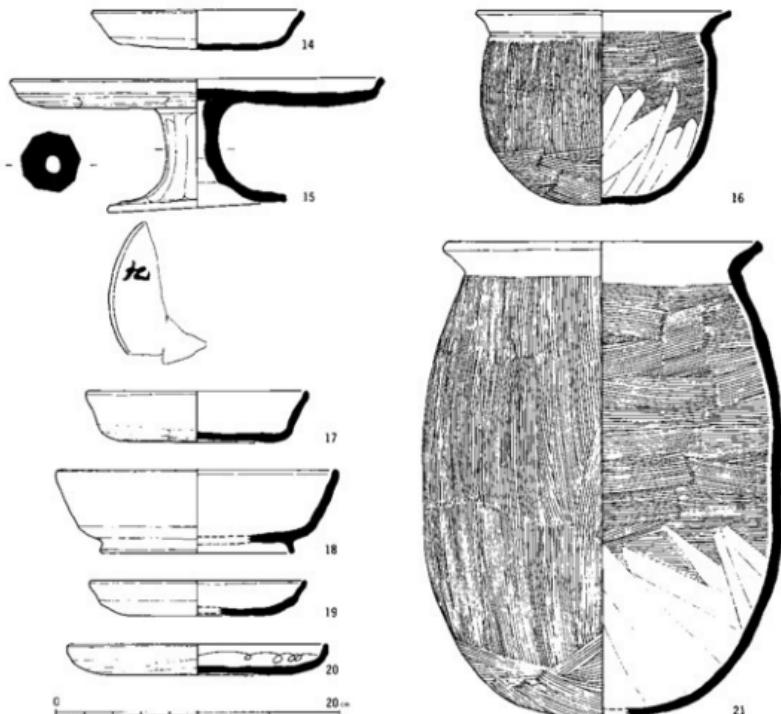


第3図 第65-3次調査実測図
(1:400)

ラケズリの後ヘラミガキが施される。脚内面には「九」とおもわれる墨書が残る。

(M) まとめ

調査の結果、周辺の調査同様に平安時代初期～中期にかけての遺構は検出されず、奈良時代と平安時代後期～鎌倉時代の遺構のみで、宮城北方の様子を更に明らかにすることができた。特に、平安時代末期～鎌倉時代の東西溝SD4325は東40mの第45次調査のSD2754・2755につながり、西10mの第6～1次のトレンチ調査でも検出されている。また、調査区南端で検出した東西溝SD4340は第6～1次のトレンチ調査で検出されている。更にこの溝の延長上西100mの位置に第33次調査のトレンチが24m離れて2本入っており、東のトレンチ部分でSD1837が検出されている。規模、形状から調査区南で検出したSD4340と同じ溝と考えられるが、西のトレンチではこの溝ではなく、途中で曲るものとおもわれる。なお、東西溝SD4325はこの第33次調査では検出されていない。部分的な調査ではあるが、SD4340・4325はかなりの距離にわたり存在し、宮城北方の主要な排水路であることが窺える。



第4図 第65-2次出土遺物 S K 4344; 14~16、S K 4343; 17~21

円形周溝・方形周溝について

斎宮跡でも台地西端部に近い古里地区や中垣内地区では、弥生時代の竪穴住居、土塙などの遺構がいくつか検出されている。その南にある金剛坂遺跡でも、弥生時代前期の遺構や縄文時代に遡る遺構が検出されている。特に、弥生時代前期・中期を中心とする遺構の中には前期の方形周溝5基、中期の方形周溝3基が検出され、台地西端部には早くから人々の生活が営まれていたことが判明している。また、南2kmの寺垣内遺跡では昭和60・61年に県営圃場整備事業に伴う調査が実施され、弥生時代末期～古墳時代前期にかけての方形周溝が11基検出されている。斎宮周辺でこのように弥生時代～古墳時代前期の方形周溝が検出されている。

斎宮跡でもこれまで33基の円形・方形周溝が検出されているが、いずれも削平を受けたためか周溝の内側には主体部らしきものは確認されていない（SX1810の周溝の内側中央部に土塙が検出されているが、円形周溝に伴うかどうかは不明である）。周溝から出土する遺物は少なく、時期決定の困難なものもあるが、大きく弥生時代と、5～6世紀初頭の遺物を伴うものと、奈良時代の遺物を伴うものの三者に分れる。このうち、弥生時代と考えられるものは古里地区の第38次調査で1基、第67次調査で2基検出されているだけである。

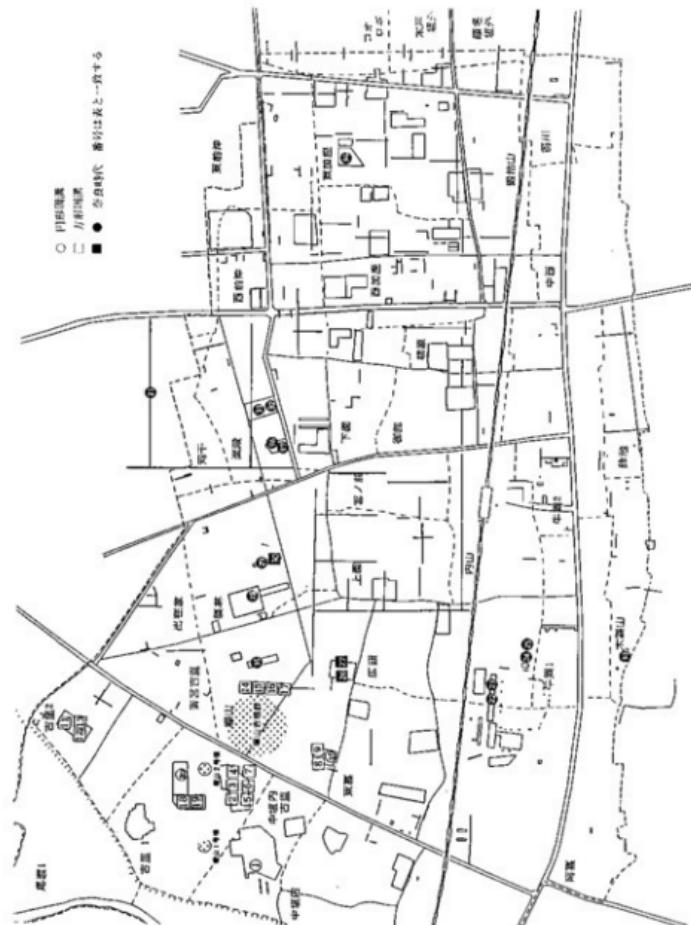
古墳時代のものと考えられるものは、古里地区、塚山地区で円形周溝2基、方形周溝14基と方形のものが多く、その規模も7～8m前後と10m以上のものとに分かれ、SX69のように径25mと比較的大きなものもある。SX69の周溝からは、埴輪が多量に出土しており、これは古墳の削平をうけたものと考えられる。他のものについては古墳の可能性の高いものもあるが、断定できない。現状では古里地区、塚山地区にその分布は限られ、現存する塚山古墳群の周辺に存在するが、塚山古墳群の調査が行われておらず、古墳の造営年代について不明な点が多いことや、後述する奈良時代のものとの関連などの問題があるため、一概に塚山古墳群と関連させて考えることはできない。

なお、今年度の第68次調査では塚山2号墳の北に接する位置で円形周溝が1基検出されているが、出土する遺物から7世紀中頃と考えられる。

奈良時代の遺物を出土するものは、第65次調査を含め17基がある。このうち円形は14基あり、円形が圧倒的に多い。規模は10m前後のものが多いが、最大のものは18.5mに復元できSX715で、最少はSX3830の7mである。周溝の断面は台形を呈し、底は平坦だが深さは一様でなく凹凸がある。陸橋部は全体を検出した6基中、円形4基に見られ、陸橋部の伴わないのは方形の1基のみであり、円形周溝に陸橋部が伴うことが考えられる。また、周溝から出土する遺物は須恵器長頸壺を出土する例が4例あり、これは偶然とは考え難く何らかの祭祀に伴う遺物の可能性も大きい。

奈良時代の円形・方形周溝は塚山地区を接点として、東の篠林地区、楽殿地区、南の広頭地

区に分布している状況が見られ、古里地区では確認されていない。宮城中部では現在までに検出されていないが、これは調査例が少ないためともおもわれ、この分布を見て速断をくだすことはできない。いずれにしても、奈良時代の円形・方形周溝についての性格・分布・厳密な時期差の検討はなお今後の課題とせねばならない。



第5図 円形・方形周溝分布図

円形周溝・方形周溝一覧表

次数	調査地区	遺構名	形状	内径 (m)	溝幅 (m)	深さ (cm)	陸橋	時期	備考
1 3	古里 B		円形	10.4	0.8~1.4		—	不明	
2 4	古里 C	S X 6	方形	11×—	2.5~3.0	30~50	—	5 c 末	
3 *	*	S X 10	*	6.6×8	1.0	20	—	6 c 初	須恵器杯・杯蓋
4 *	*	S X 42	*	13×13	2~3	25~35	—	5末~6初	須恵器杯
5 *	*	S X 58	*	8.5~7.7	1.0	20~30	—	*	
6 *	*	S X 62	*	一辺8.6	1.0~1.3	25	—	*	
7 *	*	S X 69	*	25×—	7	80~90	—	5 c 末	埴輪
8 38	6ACD-S	S X 2160	*	12	2.5	50	—	*	
9 *	*	S X 2210	*	12以上	1.2	50	—	*	
10 *	*	S X 2217	円形	14	2.5	50	—	不明	
11 39	6ABD-R-ST	S X 2230	方形	8以上	1.8	25~40	—	古墳時代	
12 *	*	S X 2231	*	6.6	0.8	25~30	—	弥生時代	
13 *	*	S X 2232	*	4.8~5.2	0.7	10~30	—	古墳時代	
14 41	6ACB-PQR	S X 2330	*	8m以上	1.6~2.0	20~35	—	*	
15 *	*	S X 2331	*	5m以上	1.2	20~35	—	不明	
16 *	*	S X 2333	*	5m以上	0.4~1.0	10~20	—	*	
17 *	*	S X 2334	*	9m以上	1.4	15~25	—	*	
18 67	古里	S X 4438	*	7以上	0.9~1.2	25~35	有	弥生時代	
19 *	*	S X 4456	*	8.2	1.2	10~30	有	弥生時代	
20 68	*	S X 4562	円形	14.5	1.9~2.4	15~40	—	不明	7 c 前半に埋まり始め。 全長約14.5m
21 6-2	Bトレンチ	SD21・22	*	(10)	2	65	—	奈良時代	
22 15	6ACM-M	S X 705	*	14	1.5	20~40	—	奈良前期	須恵器長頭壺
23 *	*	S X 715	*	(18.5)	1.8	0.8	有	*	須恵器長頭壺
24 25-9	6ACN-C	S D 1590	*	(14)	1~1.6	40~60	—	不明	
25 *	*	S D 1591	*	—	0.6	20~40	—	奈良前期	須恵器長頭壺
26 32	6ACE-DEF	S X 1685	方形	—	0.6	10~20	—	奈良時代	S X 1699より大型
27 *	*	S X 1699	*	一辺8	1.0	20~42	無	*	
28 33	6ADE-D	S X 1810	円形	9.4	1.0~1.8	5~22	有	*	中央部に土塁
29 *	6ADE-L	S X 1834	*	—	1.3	51~63	—	*	
30 *	*	S X 1835	方形	12以上	1.2	50~80	—	*	
31 45	6AEG-P-Q	S X 2735	円形	13	1.4~2.2	35~52	無	奈良初	
32 *	*	S X 2760	*	—	1.0	20~40	—	*	
33 53-9	6ACS-O	S X 3830	*	7	0.5	10~30	有	*	
34 57	6AGF-H-I	S D 3687	*	9	0.5~0.7	10	—	奈良後期	
35 65-1	6ACC-M	S X 4310	*	11	1.2	20~75	有	奈良初	須恵器長頭壺
36 65-2	6AEG-S	S X 4330	*	9.2	0.6~1.1	20~45	有	奈良前期	
37 *	*	S X 4335	*	12.6	0.35~1.3	25~50	—	*	

III 第 66 次 調 査

6 A G G-C (東加座地区)

当該調査区は東加座地区の北東隅にあたり、町道中町・役場・馬之上線に西接し、かつ東前沖地区との字界に南接する位置にある。

調査面積は昭和50年度に実施した第9-4次Tトレンチ調査の一部分を含む1,748m²で、現況は畠地である。

過去の調査結果から、史跡の中央・東部には道路や区画溝による地割のあることが推定され、なかんづく史跡東部の鍛冶山地区～東加座・西加座地区（通称中町裏）は、120～130mの間隔で、少なくとも東西方向に5条、南北方向に4条の区画溝によって都合12のブロック（南北4ブロック×東西3ブロック）に地割されていることが判明してきている。

更にこの地域一円からは官衙の存在を印象づける墨書き土器も出土している。即ち昭和55年度に西加座地区で実施した第34次調査で240点に及ぶ綠釉陶器片や「寮口」の墨書き土器、昭和57年度の鍛冶山地区における第46次調査では円面鏡、および「膳」と判読できる墨書き土器、また今次の調査区から南西へ僅か100m離れたところで昭和59年度に実施した第57次調査では、円面鏡の他に「殿司」と書かれた墨書き土器、更には西加座地区に北接する西前沖地区で昭和56年度に実施した第37-4次調査では「水司鴨口」とヘラ書きされた土器がそれぞれ出土している。

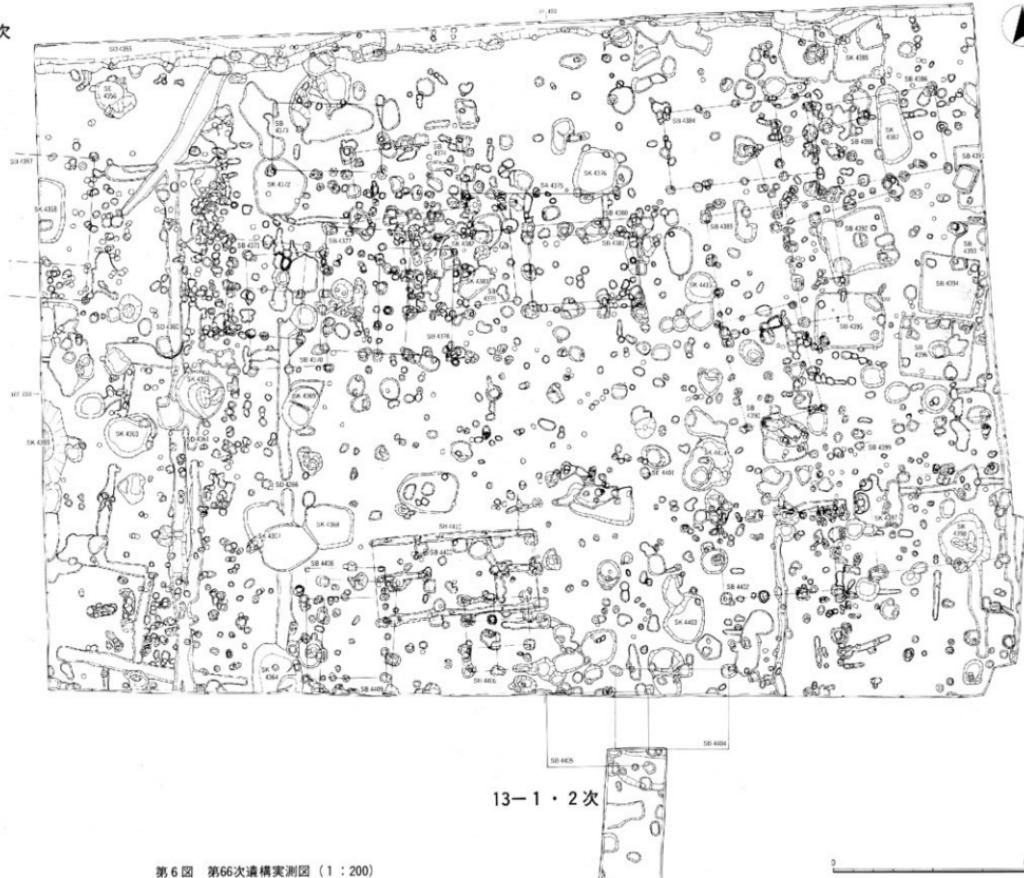
これらの文字は、文献資料（『延喜式』）から知られる斎宮寮13司の役所名に該当しうるものと考えられ、総じてこの地域一帯は斎宮跡の解明にとって極めて重要な一郭であることはすでに指摘されてきたところである。

当該調査は、このような地域の中にあって、未だ面的調査のなされていない東加座地区北東端の、第9-4次調査すでに明らかになっている東西区画溝南側の状況をさぐる目的で設定されたものである。

当該発掘区の基本的な層序は、第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：橙茶褐色土、第Ⅲ層：暗茶褐色土、第Ⅳ層が黄褐色の地山である。第Ⅰ層の耕作土上面から地山までの深さは平均して約40cmである。

検出された遺構には、奈良時代後期の堅穴住居6・掘立柱建物6・井戸1・土塙7・溝2、平安時代初期の掘立柱建物7・土塙5、平安時代前Ⅰ期の掘立柱建物5・土塙4、平安時代前Ⅱ期の掘立柱建物4・土塙1・溝1、平安時代後Ⅰ期の掘立柱建物1、鎌倉時代前半の井戸1・土塙1などがある他、調査区北端を東西に走る溝は前述した北限の区画溝で、奈良時代後期から鎌倉時代前半までの遺物を含んでいる。

66次



第6図 第66次構造実測図（1:200）

(I) 奈良時代後期の遺構

この時期の堅穴住居はSB4391～4396の6棟がある。この6棟は互いに近接し合い、またSB4393とSB4394のように切り合いから新旧関係の確認できるものもある。調査区東壁外の様子は不詳だが、これら6棟はある一定の範囲の中で何度か建て継がれたものと考えられる。調査区外に延びる2棟以外の4棟には概際に焼土もしくはカマドの跡が確認できた。

今まで斎宮跡で検出された堅穴住居のうち9割以上は奈良時代のものであり、その平均規模は3.9m×3.3mで、そのうちカマドが取り付けられているものは6割を占める。そしてカマドの位置も9割以上が北壁ないし東壁である。

ところで上記4棟のうち、SB4395のカマドは北東隅にある。住居内コーナーに設けられたカマドは他の時期のものを含めると斎宮跡では4例目にあたる。また、このカマドとSB4396のカマド内中央には土師器甕が反転して伏せられており、かつその外面は相当強く火を受けている。両者(46・57)は支脚として使用された可能性がある。

掘立柱建物にはSB4370・4388・4390・4399・4400・4410がある。従来中町裏で検出される当該時期の掘立柱建物の場合、南北棟、東西棟そのいずれについても柱通りの方位は北に対し3～4°西、東に対して3～4°北という偏りが普通であった。その点では、SB4370以外の4棟には大きなバラツキが見られ、東側の3棟、SB4388・4390・4399が前述の堅穴住居のある場所もしくはあった場所を意識して、それらを取り囲むような配置になってはいるものの、6棟全体としては規格性をもった配置とは言い難い。

SB4399は柱間が2mを超える3間×2間の東西棟で、北面に廂を持つが、この廂部分は建て替えにより北へ約60cm広げられたものである。

SB4400は一見、シンメトリカルな溝状掘形をもつSB4410と重複する3間×2間の東西棟である。しかし、SB4410の溝状掘形がSB4400の柱穴を切っていることを4ヶ所で確認しており、またその柱通りの方位は、SB4410はE 5°N、SB4400はE 8°Nを示していく合わない。従って両者が同時存在したわけではない。SB4400の柱掘形は一辺60～80cmの方形を示し、当調査区内では比較的しっかりした建物といふことができる。

SB4410は長短4条の溝状柱掘形をもっている。長い方の柱掘形は、長さ8.4～8.7m、幅30～40cm、深さ35～50cm、短い方の柱掘形は、長さ2.7m、幅30～40cm、深さ30～40cmである。いずれもほぼ一定の幅を保って垂直に掘り下げられており、底は半坦な仕上りだが、2～3ヶ所に若干の段差も見られる。長い2条の柱掘形相互の間隔は約4m、その間にはさまれた短い掘形との間隔は約2m前後、また短い2条の柱掘形相互の間隔は3mである。調査区西側を南北に走るSD4360・4361も同じく奈良時代後期の溝だが、問題の長短4条のシンメトリカルな溝状掘形は、この南北溝から東へ9m離れて全く独立しており、4条はそれ自体で一つの完結

性をもっている。いまここにある種の建物を想定することができる。即ち、長い2条の溝状掘形に各々5本の柱を等間隔にたて、短い2条の溝状掘形にも各々左右両端に1本ずつたてるとすると、ここに4間×2間の東西棟が建つ可能性がある。柱掘形の形状から柱と柱の間はあるいは板壁であったかも知れない。土間であったか、板間であったか、またどこを出入口としたかは不明であるが、斎宮跡では特殊な建物と考えられる。また、短い方の溝状掘形の外側1mのところに各々一つずつ柱穴が見られ、注意すべき柱穴であろう。因みに、西側のその柱穴にはSB4409の北側梁行中央の柱穴が重複していることを付記しておく。

SD4360・4361は、幅60~80cm、深さ10~30cmを測る。この溝を境として調査区西壁までのわずか6mの範囲であるが、奈良時代後期の遺構は見られない。従って上記2条の南北溝は、この時期において一つのエリアを区切る役割をもっていたかも知れない。

SE4401は、検出面で長径1.56m、短径1.14mの楕円形掘形をもつ素掘りの井戸である。検出面から3.3m掘り下げたところで砂地となり、水量は今も豊富であった。ここから当該時期の良好な遺物を得ている。

土塙にはSK4364・4367・4382・4385・4398・4403・4414がある。SD4366に切られるSK4364は調査区外へ延びるため正確な規模は不明だが、長径2.4m以上、短径2.4m、深さ50cm、土師器の杯や甕などが出土している。SK4382は長径3.2m、短径2.2m、深さ20cm。土師器杯の出土が目立った。

(II) 平安時代初期の遺構

掘立柱建物として、SB4371・4386・4389・4402・4406・4408・4409がある。これら7棟も、やはり全体としての規格性には乏しい。

SB4408とSB4409は新旧関係は不明だが、建て替えによる重複かも知れない。なお、SB4408の北面廻の柱通りがやや不揃いであることから、それは廂ではなく屏と見るべきかも知れない。このSB4408は、2間×2間の身舎の南側（調査区外）にもう1間分廂が延びる可能性も考えられる。

SB4406は調査区外へ延びる2棟の建物の重複とも考えたが、そうすると柱通りに若干の無理を生じるので、3間×2間の総柱建物とした。この建物で興味を引くのは、2つの柱穴が溝状にセットとして掘られたところが2ヶ所あることである。第64-3次調査（SB4675）で初めて検出されたこの種の掘形は、その後の第68次調査（SB4560・4561）でも検出されている。いずれも奈良時代に属し、第64-3次、第68次の場合では3間×3間の総柱であることから、基本的には倉庫であると考えられている。

SB4386・4389・4402の3棟は、奈良時代後期のSB4388・4390・4399と重複あるいは近接して検出された。これら6棟は時期的にも連続し、建物の規模、配置も似ている（3間×2間の

東西棟2、南北棟1、うち1棟は廂付き)ので、時代的に建て繼がれた、同じ機能、性格を持った建物群とも考えられる。

掘立柱建物SB4371は2間×2間の総柱建物である。2間×2間の建物は奈宮跡では奈良時代後半から平安時代末期に至るまで見られるものだが、数は少ない。中町裏では今までに9棟検出されており、時期的には奈良時代末期から平安時代前期までにわたっている。9棟のうち形態的にSB4371と同様の総柱建物と言えるのは第51次調査(西加座地区)のSB3132・3191と第61次調査(西加座地区)のSB3132の3棟しかない。これら3棟はいずれも奈良時代末期～平安時代初頭のもので、柱通りの方位は北に対して1～4°西へ偏っている。今回のSB4371は柱間が上記3棟よりやや広く、柱通りの方位も北に対して5°東へ偏るという点で異なっている。

土塙にはSK4363・4368・4369・4387・4397がある。これらの土塙からは須恵器の長頸瓶、土師器の甕・長胴甕・杯・台付杯・皿・カマド、砥石などが出土している。SK4363は長径2.6m、短径2.1m、深さ32cm。SK4368の長径は2.5m、短径は2.3m、深さ50cmである。北東隅にあるSK4387は長径4m、短径1.5m、深さ40cmの長楕円形を示す土塙で、出土遺物は少ない。

(Ⅲ) 平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物SB4374・4377・4378・4380・4381と土塙SK4358・4372・4376・4383がある。

5棟の掘立柱建物は、調査区中央部北寄りの一郭に集中している。この時期の掘立柱建物は、中町裏では例えば第57次・第60次・第62次・第63次でも18棟検出されている。

SB4377とSB4378はともに3間×2間の南北棟だが、後者の方が占く、柱間も狭い。また、その東側にあるSB4380・4381も3間×2間の建物だが、こちらは東西棟である。2棟の重複は建て替えを示しており、SB4381の方が新しい。柱通りの方位は前者がE 4°N、後者はE 3°Nである。

SB4374も3間×2間の東西棟だが、柱通りの方位は東に対して8°北へ偏っている。この建物の柱据形は一辺が60～80cmで、当調査区内にあっては前述のSB4400(奈良時代後期)、SB4402(平安時代初期)などと同様に大きい方である。

SK4358は西半分が調査区外へ延びるため、正確な規模はわからないが、長径3.2m、短径1.2m以上、深さ50cmを測る。SK4372は長径2.8m、短径2.6m、深さ約20cmである。これらの土塙からは土師器の甕・杯・皿の他、カマド、土錐などが出土している。

(Ⅳ) 平安時代前Ⅱ期の遺構

掘立柱建物SB4373・4384・4404・4405と南北溝SD4366及び土塙SK4415がある。

4棟の建物のうちSB4373とSB4384は調査区北端のSD4355から南にわずか2～4m離れた所に建つ東西棟である。一方、SB4404・4405の2棟は調査区南壁際に桁行3間分をのぞかせる

重複した東西棟である。北側のSB4384と南側のSB4404の間隔は約24mある。

SB4404とSB4405は第13-1・2次トレンチ調査（当調査区南接）で検出された柱穴と合わせて考えると、ともに3間×2間の規模となる。SB4405とSB4373の2棟は柱通りの方位を同じくし、E 1°Nを示している。

SD4366は奈良時代後期のSD4360・4361から東へ4mの所で検出された。平面図上は、より古い時期のSK4364・4367・4369に切られたようになっているが、それはこの溝がこれらの土壙より浅かったことによる。

SB4384の南5mの所で検出されたSK4415は径1.5m、深さ約20cmのはば円形を示す土壙である。ここからは土師器の杯・皿・鉢などの他、綠釉陶器の三足盤（74）が出土している。

（V）平安時代後I期の遺構

掘立柱建物SB4379は柱通りの方位がE 7°Nを示す3間×2間の東西棟である。同時期の建物は他には見られない。中町裏では第63次調査（西加座地区）でこの時期の掘立柱建物が6棟検出されているが、概してまだその数は少ないと言える。

（VI）鎌倉時代前半の遺構

井戸SE4356と土壙SK4362がある。

SE4356は長径2m、短径1.7mであるが、検出面から約2.4mの所まで掘り下げて、調査を断念したため、正確な深さは不明である。山茶椀の底部や土師器鍋の破片などが出土している。

奈良時代後期の溝SD4360・4361を切る土壙SK4362は径約2.4mの円形で、深さは10~50cmのすり鉢状になっている。出土遺物は少ない。

（VII）その他の遺構

調査区北端を東西に走るSD4355は、冒頭に触れた東西に走る5条の区画溝のうち北限の区画溝にあたる。従ってこの溝は、第35次調査（東加座Aトレンチ）のSD1916から第10次調査（広域圈道路）及び第51次調査（西加座地区）のSD291へと西方に続き、東は第9-5次Uトレンチ調査（木戸垣内地区）などで確認された宮城東端エンマ川沿いを走る南北の区画溝へとつながるものである。この溝からは奈良時代後期～鎌倉時代前半の遺物が出土しており、長期間にわたって存在したことを物語っている。因みにこの溝の全幅は1.5~2m前後と推定され、深さは0.9~1mである。

調査区西北壁際で検出した掘立柱建物SB4357及びその南側の壁際で検出したSK4359、更に調査区中央部北側で東西にならぶ柵列SA4375は、いずれも出土遺物が少量の土器細片に限られるために、これを時期不明として判断を保留せざるを得ない。

SB4357は4間×2間の南北棟と推定され、少なくとも南側の1間分は廂である。また、SA4375は7間分、約12.5mの柵列である。この柵列の方位はE 0°Nである。柵列の南側にあ

ってこれとほは平行もしくは垂直の位置を保ち得る建物は、強いて言えば、SB4377・4378・4380・4381・4404～4406・4408・4409であるが、後5棟はあまりにもかけ離れすぎている。

(四) 遺物

先に奈良時代後期に位置付けた竪穴住居SB4392・4395、土塙SK4364から多量の遺物が出土した。大半は土師器の杯・皿・壺である。実測可能な土師器杯26点について見てみると、口径13～14cmと15～17cmのグループにわけることが出来る。底部外面はヘラケズリをするb手法を主流とし、なでつけただけのe手法のものが混じる。後者グループのうちの2点(33・62)には内面に暗文が見られる。土師器皿は口径16.8cm、器高2.45cmというのが平均的な法量で、底部外面はe手法が主で、中にはb手法も散見せられる。

土師器壺(46・57)はすでに述べたように各々SB4396とSB4395のカマド内中央に伏せられていたもので、前者は口径16.8cm、器高13.9cm、後者は口径17cm、器高15cm、いずれも支脚として使用された可能性がある。

SB4394からは鉄斧(88)も出土している。斎宮跡では珍しく、かつて第33次調査(篠林地区)で奈良時代の掘立柱建物SB1752から1点出土している。

他に今回まとまって出土した中で最もバラエティーに富むのは、SE4401出土のものである。須恵器の壺・大壺(平底)・把手付盤・長頸壺、土師器の杯・台付杯・高杯・皿・壺(薬壺)・蓋・壺などがある。土師器杯は口径13～17cmで、底部外面は基本的にb手法であるが、e手法も混じる。この井戸から出土した土師器壺の外面調整法は、体部に縱位ハケメ、底部に横位もしくは乱方向にハケメを施すものばかりで、体部下半から底部をヘラケズリするという調整法のものは1点もない。

長頸壺(16)は奈良時代中期以前まで遡るものだが、17は長岡京期の壺G(B群)にあたるものである。

SK4363・4397出土の土師器壺は、体部に縱方向のハケメを施し、体部下半～底部をヘラケズリするものがほとんどである。例外はSK4363の83である。口径16.2cm、器高14.9cmのこの壺の体部中位には外から内に向けて径4mmの穿孔がある。何の目的であけられたかは不明だが、外面はかなり火を受けており、全面にススの付着が見られる。

SK4363・4397出土の土師器杯・皿(67～70・84～87)について言えば、底部は全てe手法による調整である。

SK4397からは他に土師器の長壺が出土しているが、いわゆる長胴壺というには少し短すぎるものである。73は口径24.8cm、推定復元器高は26.8cm、72は口径26.6cmで推定復元器高は26cm前後である。SK4397からは同様の壺が他にも1点出土している。

SK4415からは縁釉三足盤(74)が出土した。今次の調査では縁釉陶器は破片ばかり40点で、

これは第34次調査（西加座地区）の240点、第54次調査（西前沖地区）の445点にはるかに及ばない。しかし今までには椀や皿が多かったのに対し、今回の三足盤は第42次調査（楽殿地区）について2例目であり、また陰刻された蝶の文様はこれが初例である。前回の三足盤は黒笠14号窯期のものであったが、今回のものは一時期新しく黒笠90号窯期のものである。

土鍤は斎宮跡では飛鳥時代（第36次調査・中垣内地地区・SK2120）から平安時代末期～鎌倉時代初期（第42次調査・楽殿地区・SK2612）まで、いわば普遍的に見られる遺物の一つである。30点（第59次調査・広頭地区）、51点（第27次調査・東裏地区）、あるいは550点（第8～3次調査・上園地区）とまとまって出土したこともある。今回出土した土鍤はSK4358、SD4355の他、包含層のものも含め17点である。漁網鍤と考えられ、それが投網であったか刺網であったかはともかくも、近くの川や大淀の浜で魚を獲ったことは間違いない。おそらくは斎宮寮で雜役に従事した人々の生活の一斑を物語る遺物として注目してよいと思う。因みに96と98・99は4g、94・95・100は5g、97は6g、101は9g、102は11gを量る。図にはないが、一番大きな物は50gあった。

墨書土器は4点あり、うち3点は判読し難い。解読可能な1点（93）は奈良時代後期に比定できる須恵器杯の体部外面に「木」の字が横書きされている。91は折戸53号窯期に併行すると思われる灰釉陶器椀の底部外面に墨書されたものだが、文字は判読しかねる。92は平安時代前Ⅱ期の綠釉陶器の稜椀で、内面底部の陰刻花文は過去斎宮跡出土のものとはやや異なるバリエーションを持っている。三叉トチ跡が確認できる。

ミニチュア土器には89と90がある。前者は灰釉陶器で口径2.35cm、器高3.65cm、濃緑色の釉がかかった高台付きの壺である。後者は口径3.65cm、器高3.3cmの須恵器の壺で、平底である。いずれも包含層出土のものである。

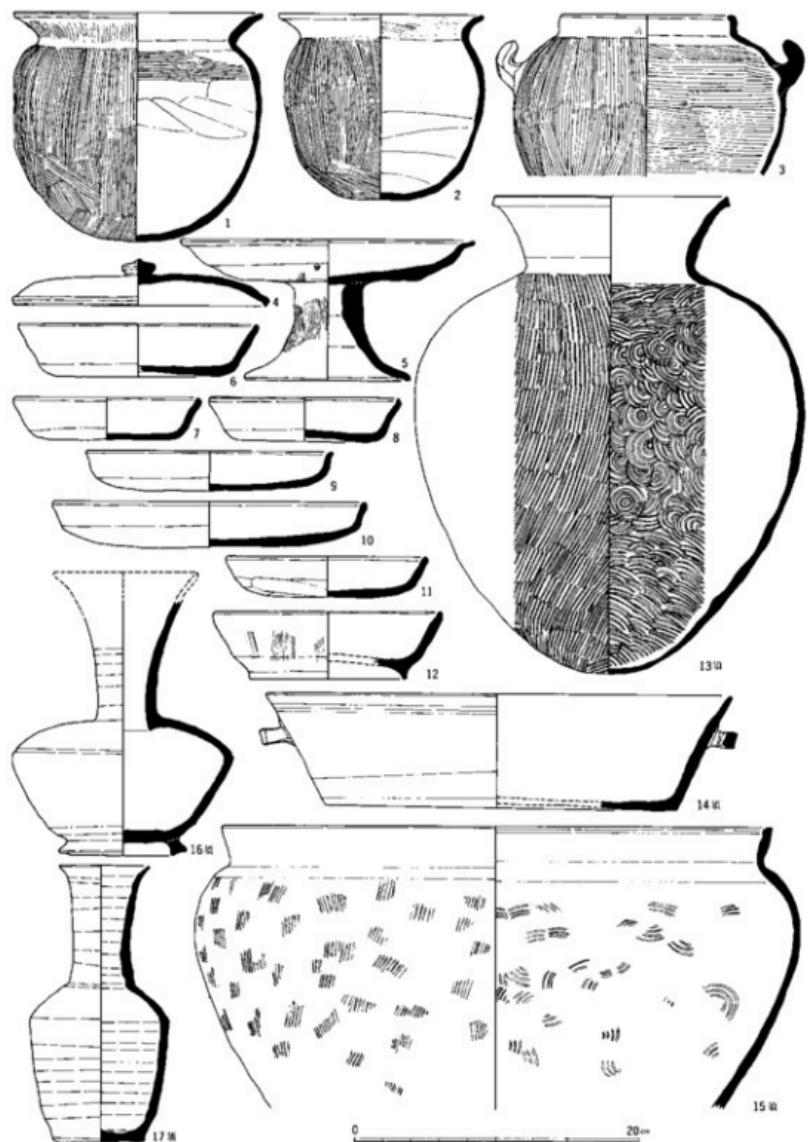
他の遺物の中には、白磁、丸瓦の破片、刀子、須恵器の杯蓋を利用した転用硯2点などがある。転用硯の出土は過去いざれも中町裏の西加座地区、東加座地区に多く見られ、この地域の建物群の性格とをあわせ考えると興味深い。

（IX）まとめ

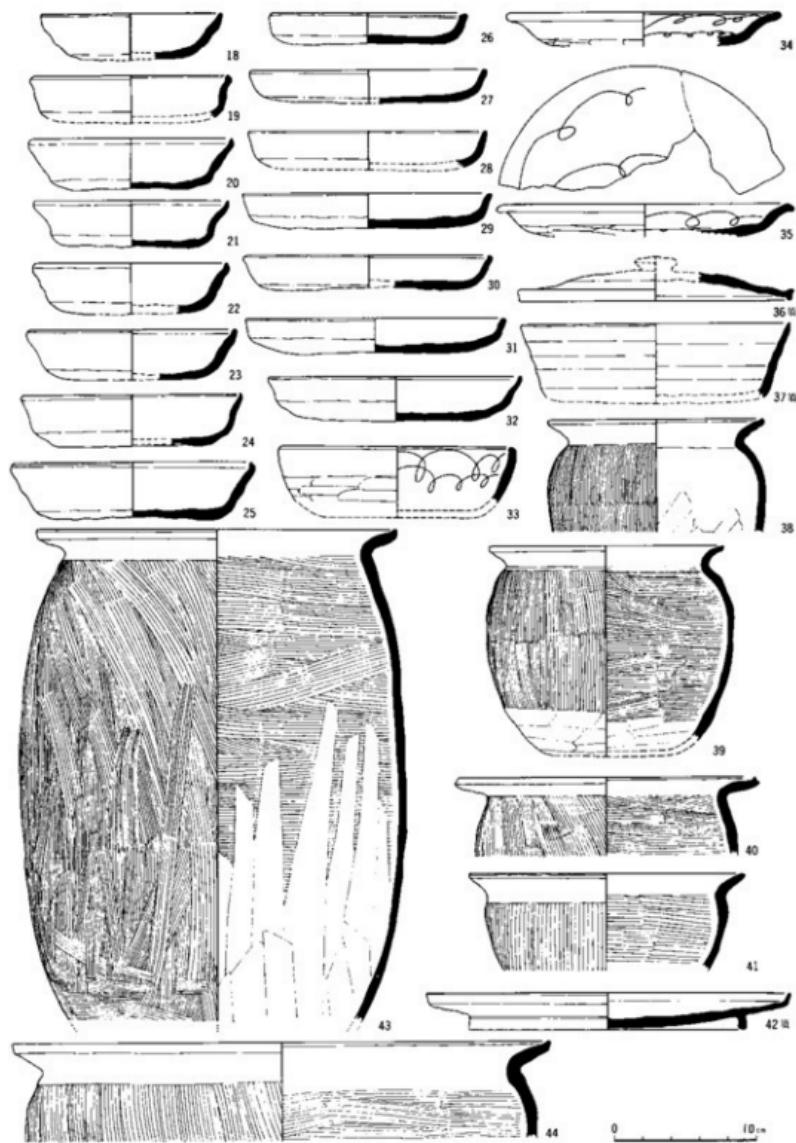
当該調査の目的が、既に明らかになっている中町裏北端の東西区画溝SD4355の南側の状況を東加座地区の北東隅においてさぐることにあったことは冒頭に述べたとおりである。西加座地区の北西部でこの同じ区画溝に南接して面的な調査がなされたのは第51次調査であった。おおざっぱに言えば、両調査区は中央のブロックをはさんでほぼシンメトリカルな位置にある。

この両調査の結果の比較を中心にして、気付いたことを以下に述べておきたい。

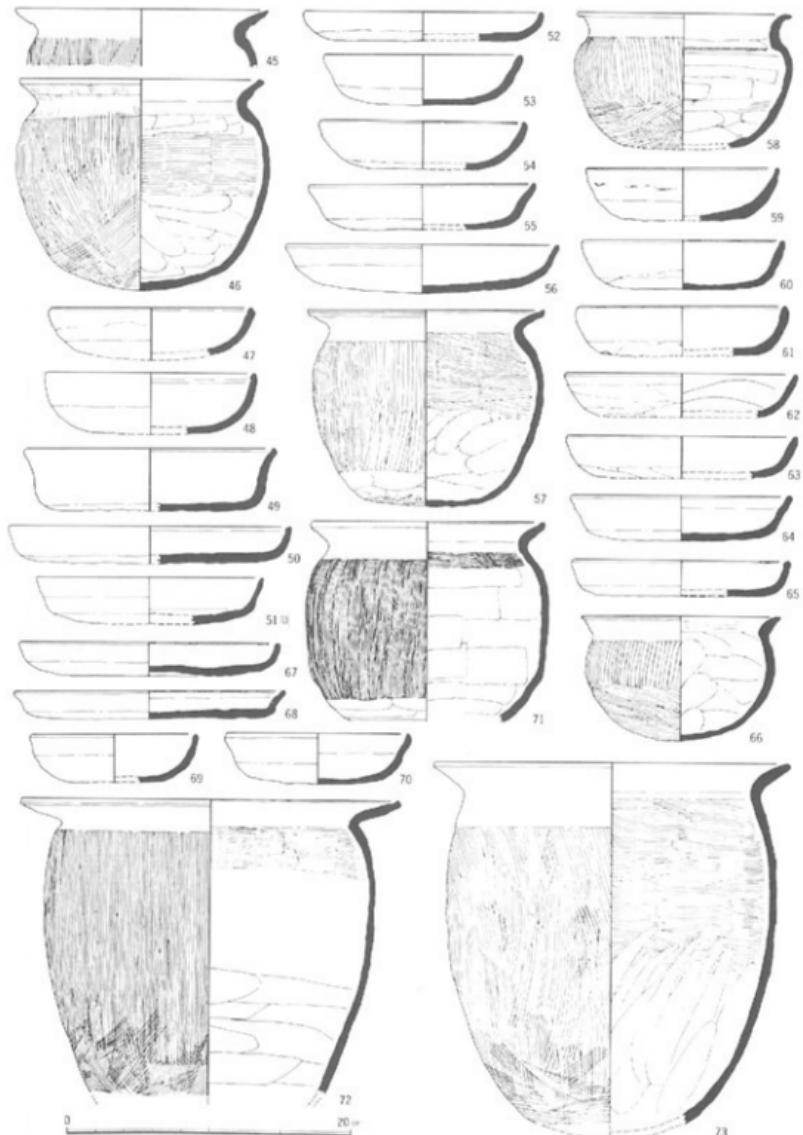
第51次調査では調査区北端の区画溝に南接する約10m幅の空閑地をおいてはじめて建物群が出現している。同様の傾向は、中町裏東端から西へ数えて2条目の南北区画溝に西接して実施



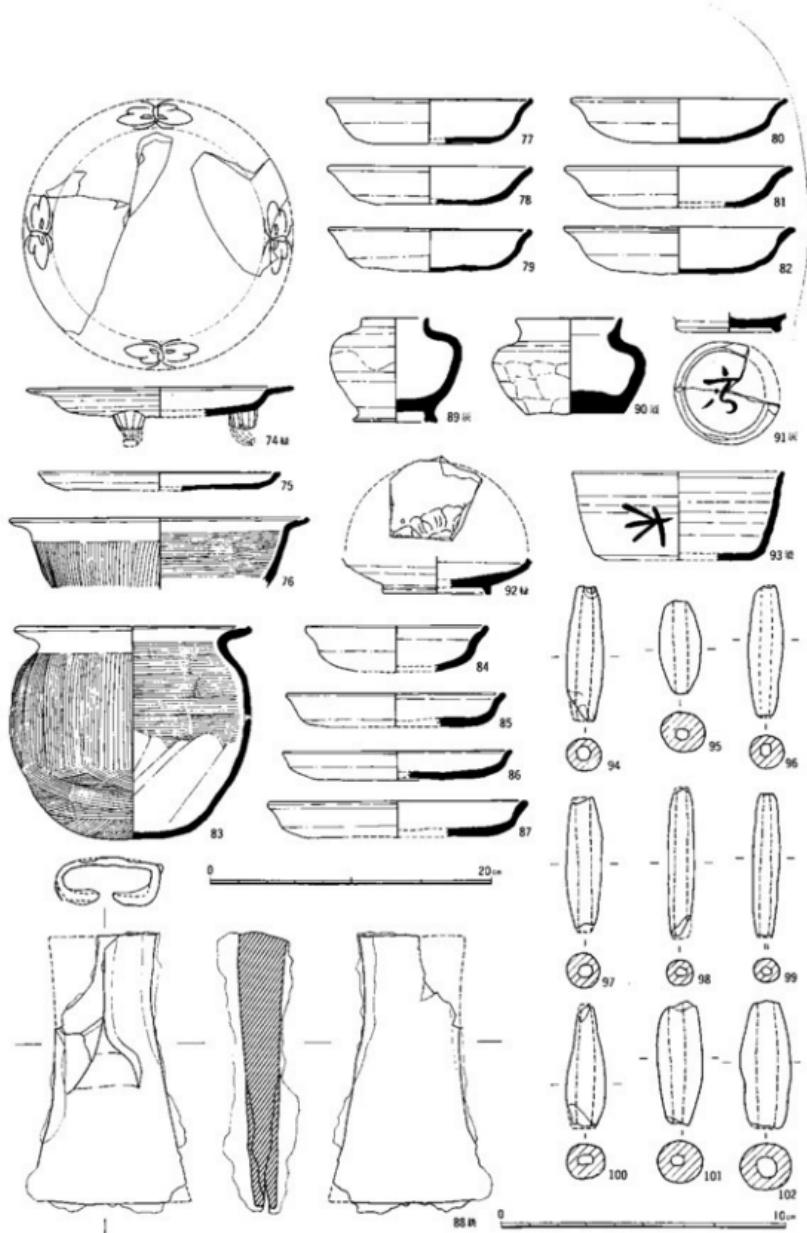
第7図 第66次出土遺物 SE 4401 ; 1~17 (13~15は1:6)



第8図 第66次出土遺物 S-B 4392 ; 18~44



第9図 第66次出土遺物 S B 4395 ; 45~51、S B 4396 ; 52~58
S K 4364 ; 59~66、S K 4397 ; 67~73



第10図 第66次出土遺物 S K 4415 ;74~82、S K 4363 ;83~87、S B 4394 ;88
包含層 ;89~96、S K 4358 ;97~100、S D 4355 ;101~102
(88~90、94~102は1:2)

された第40次・第57次調査においても見られた。ところが今次調査では上述の様な空閑地は見られず、区画溝の南2~4mの所から奈良時代後期~平安時代前Ⅱ期の建物が出現しはじめた。

掘立柱建物の規模を見ても第51次調査では時期的には奈良時代末期~平安時代末期まで様々だが、斎宮跡では大型の部類に入る5間×2間のものが11棟ある。そして、第51次調査とそれに南接する第61次調査では、奈良時代末期~平安時代初頭に属する5間×2間の掘立柱建物6棟が各々東西方向に2棟、南北方向に3棟、おおむね等間隔に整然と配置されることが明らかになっている。対して、今回の調査では、奈良時代後期及び平安時代初期とした掘立柱建物は全部で13棟あるが、建物配置に上述の様な整然とした規格性は見られない。しかも、建物の規模は2間×2間のSB4371、4間×2間のSB4410以外全て3間×2間である。桁行側に1間分の廊をもつSB4389・4399と溝状掘形をもつSB4410だけが比較的大きいと言えるだけである。

柱掘形についても、中町裏では例えば第44次・第51次・第61次・第62次調査などで一辺が1m前後の大型のものが見られるのに対して、当調査区ではせいぜい70cm前後のものにとどまる。例えばSB4374・4400・4402などである。これは斎宮跡では中型の柱掘形である。他は40cm前後の円形もしくは方形の柱掘形が多い。

次に竪穴住居は現在のところ、中町裏では第51次・第57次調査などで各々1棟ずつ検出されているが、今回のように同時期のものが6棟まとめて検出されたのは初例である。これは奈良時代後期における当該エリアの性格を特徴付けることかも知れず、杯・皿などの供膳用具と並んで、煮沸具、特に土師器甕の出土が多かったことにも反映されているように思う。

以上第66次調査区に関しては、各々の時期の建物規模とその配置形態から見て、少なくとも第51次・第61次調査で見たような整然とした官衙地帯とは言い難く、むしろその周辺にあった官人の住居の一郭であった可能性が強い。より大型の整然とした建物群はここから更に南又は西接する地域に予想される。ただSB4400とSB4410のある場所は特殊な建物があったかもしれません、今後の課題としておきたい。

IV 第67次調査

6 A B F (古里地区)

史跡西部の古里地区は、斎宮跡の発掘調査の端緒となったところで、現在約10haが公有地となっている。古里地区では、昭和45年以来、第2～5・7次（古里A～E地区）、第39次調査など、数次にわたる調査が実施されている。これら一連の調査では、奈良・鎌倉時代を主体とする多数の遺構・遺物が検出されている。

その内、奈良時代では、数十棟に及ぶ掘立柱建物が検出されているが、とりわけ第4次（古里C地区）調査で検出した棟を揃えて立ち並ぶ廂付建物・倉庫群、あるいは第3次（古里B地区）・5次（古里D地区）調査出土の蹄脚硯などは、古里地区を含む史跡西部に奈良時代斎宮の存在を示唆するものと考えられている。また、朱彩の残る大型飾土馬を含む土馬など、祭祀にかかわる遺物の出土も多く、古里地区を特徴付けている。

史跡東半部に整備された斎宮官衙群が展開する平安時代には、古里地区では遺構・遺物とともにその数が極端に少くなり、東半部と対照的な様相を示している。

しかし、鎌倉時代には、斎宮の北限に続く大溝（第3・4次調査）や、史跡中央部に至る古道（第3・6次調査）をはじめ建物群に伴うものと考えられる多くの溝、あるいは井戸などが掘られ、衰退期に入った斎宮との関係が注目されている。

このような状況の下で、今回の調査は、古里地区的遺構の状況をより明確化するとともに、斎宮歴史博物館（仮称）を含む史跡整備計画に際しての基礎資料の収集を主な目的として、古里地区のはば中央部に東西24m×南北56mの調査区を設定して実施した。調査面積は約1,350m²、現況は草生地である。

調査区の基礎層序は、第Ⅰ層：表土、第Ⅱ層：灰茶褐色粘質土、第Ⅲ層：暗茶褐色土、第Ⅳ層：黒褐色土、第Ⅴ層：黄褐色土（地山）で地山までの深さは0.7m前後であるが、北西部のみ、0.3m前後と浅くなっている。

遺構は主に第Ⅳ層上面から切り込んでいるが、平面的には第Ⅴ層（地山）上面で確認した。検出した主な遺構は、弥生時代の方形周溝2、古墳時代の土塁1、飛鳥時代の堅穴住居2、奈良時代の堅穴住居17、掘立柱建物9、鎌倉時代の掘立柱建物3、溝5などがあり、基本的にその方向は各時代を通じて北で大きく東に振れ、古里地区を含む史跡西部でこれまでに検出されている大方の遺構の方向に揃っている。

（I）弥生時代の遺構

方形周溝2を検出している。SX4438は、奈良時代の堅穴住居に重複しているため、完掘は

67次



第11図 第67次造構実測図 (1 : 200)

していないが、L字状に折れ曲る溝をもつもので一辺7～8mである。SX4456は、一辺約9m、四隅に陸橋部をもつもので、北・東・南の溝を検出した。いずれも出土土器は少なく、中期の壺・甕の小片が出土しているに過ぎないため時期の限定は難しい。

(II) 古墳時代の遺構

1.6m×1.2mの方形土塙SK4442を検出したのみである。TK47併行期の完形の須恵器蓋杯1セットが、蓋をあけて並べられた状態で出土した。土塙墓の可能性がある。

(III) 飛鳥時代後期の遺構

竪穴住居2がある。SB4432は4.8m×3.3mの長方形を呈するもので、周間に浅い周溝、北側長辺の中央にカマドを付設する。SB4466は一辺約5.7mの方形を呈する比較的規模の大きなもので、やはり北辺にカマドを付設する。

(IV) 奈良時代前期の遺構

この時期は、竪穴住居15、土塙6と遺構が最も多くみられる時期である。

竪穴住居は調査区北部のSB4426・4427、中央部のSB4433・4435・4443～4445・4447・4448・4451、南部のSB4458～4460・4462・4463とおおまかに3ヶ所に分れて存在し、各々でかなり重複しており、何度も建て替えられた様子が窺える。棟方向は北で東に12～44°振れる。すべて方形を呈し、その規模は床面積29.7m²のSB4427から8.8m²のSB4447まで、大小様々であるが、埋土の切り合いなどによる新旧関係と対応させると、規模の大きなものから小さなものへという縮小化傾向が窺える。

各竪穴住居の内部施設としては、白色粘質土をブロック状に混入する黒褐色粘質土を固く踏み締めた貼床をもつものがあり、この貼床をはずすと凹凸のある地山があらわれる。

主柱穴、周溝などは不明確なものばかりである。

つくり付けカマドは、その痕跡と思われる焼土を含めると、ほとんどの住居の北あるいは東壁に認められた。これらのカマドは、すべて粘土で構築されたもので、貼床上に設置され、壁の中央部に位置するものが多い。今回の調査では、土師器がカマドの一部に転用されている例が目立った。SB4426・4451では、長胴甕が煙道に使われており、とりわけ遺存状況の良好であったSB4426では、口縁部と底部を欠いた長胴甕が3個連結されていた。SB4435・4447更に後述の中后期のSB4461では、長胴甕胴部がカマドの袖部の先端に立てて据え置かれ、補強材として利用されている。またSB4433・4435・4445・4447では、小型の甕がカマド内部中央に反転して据えられ、支柱として使われたものと考えられる。いずれもかなり炎を受けたらしく、全体にわたり赤化している。

一方、各竪穴住居からは、土師器杯・皿類・甕、須恵器杯・皿類など、日用雑器が出土しており、中でもSB4435・4447からは比較的まとまった遺物が出土している。

土塙は、堅穴住居の周辺にSK4436・4437・4449・4464・4465・4457があり、やはり日用雑器が出土している。

(V) 奈良時代中期の遺構

堅穴住居2、土塙2がある。奈良時代前期および後期に比べて遺構数は少ないが、前期あるいは後期のものの中に中期的様相をもつものもあり、連続する一連の遺構としてとらえられ、決して断続するものではない。

堅穴住居は、調査区中央部にSB4452、南西部にSB4461があり、いずれも前期を通じて重複して存在した住居群中に位置している。両者ともに出土遺物も前期に近いもので、住居群中の最後の堅穴住居として位置付けられる。とりわけSB4461からは整理箱5箱分に及ぶ遺物が出土している。

土塙SK4428・4440は、調査区中央部に位置する。土師器、須恵器が少量出土している。

(VI) 奈良時代後期の遺構

掘立柱建物9、土塙14がある。この時期になると今回の調査区では堅穴住居がなくなり、替わって掘立柱建物が出現する。SB4421～4423・4429・4434・4453・4454・4467・4476である。その規模は桁行4間から2間までの小規模なもので、これらがほとんど重複することなく、空間をおいて分布している。また建物方向は、全体的傾向として北で大きく東に振れるもの、その振れ幅は22～45°で、統一的な方向を示すものではなく、建物相互間の規制はゆるやかであったと考えられる。この傾向は、これまで実施した古里地区の調査の結果と共通するものである。

わずかにSB4423・4476などやや規模の大きなものが中心的な役割をもつものであろうか。なお、SB4422は梁行中央の棟柱が、やや外にとび出るものである。また、SB4423は梁行3間であるが、このタイプのものは古里地区近辺でしばしば見られるものである。

土塙SK4468～4470・4477～4487はすべて調査区南側に見られる。SK4468～4470は円形土塙であるが、SK4477～4480とSK4481～4487は不整形な土塙が重複して一連の土塙群を形成している。おそらく時を経ずして掘られたものであろう。いずれも土師器、須恵器の杯・皿・甕など、日用雑器が出土している。

このように飛鳥時代後半の堅穴住居に始まり、奈良時代後期まで連綿と遺構は存在してきたわけであるが、この時期以後は、鎌倉時代になるまで遺構は断絶する。

(VII) 鎌倉時代前期の遺構

鎌倉時代になるとふたたび、遺構がみられるようになる。掘立柱建物5、塀1、井戸1、土塙1、溝6などがある。

掘立柱建物SB4420・4430・4473～4475は調査区壁際で検出しているため全体規模を窺い

知ることができるものはないが、いずれも柱掘形は円形の小さなもので、中には柱掘形内に扁平な川原石をもつものもある。これらのうち、SB4430は後述するように第68次調査区に延びる。またSB4473・4475は重複しており、SB4473は總柱建物である。

これらSB4473・4474の北側には方向を揃えた、塙SA4455がある。また、SK4472は一辺3.5mの隅丸方形の浅い土塁で、スラグが出土している。

井戸SE4450は、径1.5m円形の素掘りの井戸であるが、壁面がもろく安全のため完掘はしていない。

この時期を特徴付ける遺構として、調査区を縦・横に横切って延びる溝がある。これらの溝はこれまでに古里地区で実施した調査でも検出されており、集落内の区画施設と考えられてきたものである。今回検出したものには、SD4424・4425・4431・4446・4489・4490がある。

このうちSD4431・4446・4490は、幅1.3m前後のしっかりした溝である。SD4431は南側にテラスを有する。SD4424・4425とSD4446はほぼ直交している。SD4489・4490は、ほぼ平行しており、この間が幅2mの道路と考えられるかもしれない。その他各々の溝について検討を加えて、今後、周辺の調査を進める中で、これらの溝のあり方と各々の溝の位置付けを考えなくてはならないだろう。

(VII) 鎌倉時代後期～室町時代の遺構

この時代の遺構には、SX4441・4471があるに過ぎない。SX4441は幅0.5mの溝が径3mの円形に巡り、その上部に丸く川原石をつみあげたもので、中心部の残存状況はよくなかったが、常滑窯産の大甕の破片が遺存し、その中に人骨の一部が認められた。一応中世墓と考えて間違いないものと思われる。ただし甕の破片には、3種類のものがあり、埋葬主体部が複数であった可能性もある。

一方、SX4471は3m×1.5mの長方形の浅い土塁で、川原石が集められ、その間に山茶碗、土師器皿などが混入していた。性格は不明である。

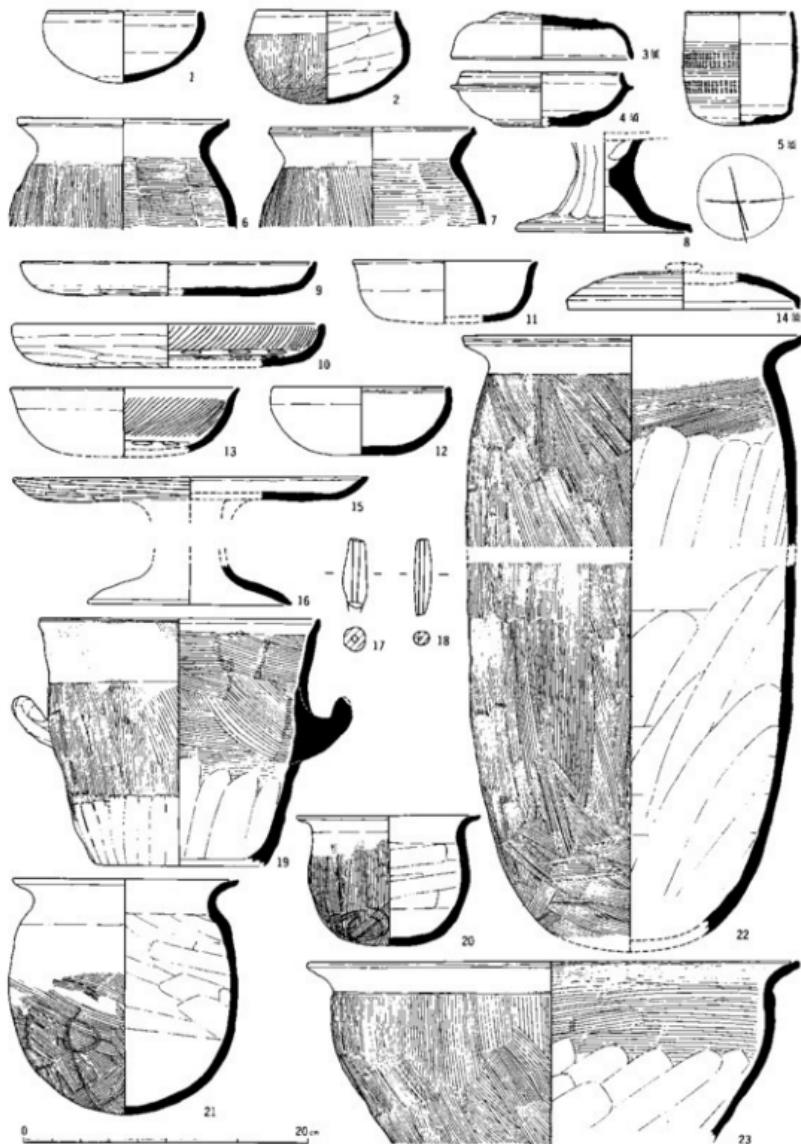
(IX) 遺物

出土遺物は、整理箱約90箱分出土している。

これらは、遺構の状況に対応するように奈良および鎌倉時代の日用雑器を中心で、平安時代のものは包含層を含めても極めて少なく、綠釉陶器は1点もない。また、包含層中にはまれに弥生土器片がみられた。

多数の遺構のうち重複して検出された竪穴住居群からは土師器、須恵器の雑器類が比較的まとまって出土し、奈良時代前期の土器を検討する良い資料となり得る。以下、主なものについて紹介する。

竪穴住居S B4466からは、7世紀後葉に位置付けられる土師器碗・高杯・甕、須恵器杯蓋・



第12図 第67次出土遺物 SB 4466 ; 1 ~ 8 、 SB 4435 ; 9 ~ 23

杯・椀などが出土している。粗製の土師器椀（1・2）は半球型を呈し、口縁部のみヨコナデされる。2は体部外面に同時期の土師器の小型甕の底部に見られるような、ハケメ調整が施される。あるいは製作途中で椀に変更されたものであろうか。甕（6・7）は、口縁部がそれ程外反せず、端部が上方につまみあげられるものが目立つ。肩の張りも弱く体部の外面は縱方向、内面は横方向のハケメ調整が施される。

須恵器蓋（3）、杯（4）は、全体的にやや丸みをおびる形状を呈し、天井、底部はヘラ切りのままである。岩崎17号窯期併行のものと考えられる。

5は口径に対し深い湯飲み状の須恵器椀である。全体に非常に薄くつくられ、体部外面には沈線による区画の中に櫛状工具の刺突による列点文が施される。底部は回転ヘラケズリされ、ヘラ書きが残る。斎宮では例をみない器形である。

竪穴住居SB4435出土遺物には、土師器杯・皿・椀・高杯・甕・瓶・土錘、須恵器杯蓋・杯などがある。

このうち、須恵器は量的にわずかで、それらは高藏寺2号窯期のものと考えられる。

土師器は甕類が主体であるが、奈良時代前期に位置付けられる一群と考えられる。

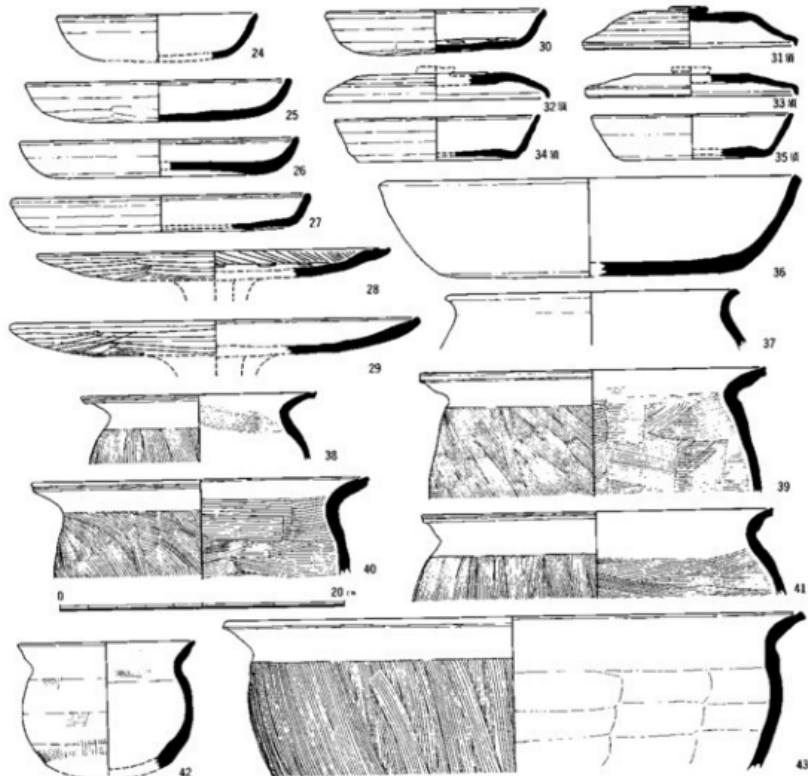
土師器皿は、口径20cmを越す大型で底部をヘラケズリするもの（9）に加え、ヘラケズリの範囲が口縁部下半にまで及ぶもの（10）もあり、内面には放射状及び螺旋状の暗文が施される。この傾向は、杯にもあてはまる。椀（11・12）は、底部が平坦化はじめ、口縁部が直立するものがあらわれる。

甕には、小型・中型のもの（20・21）、いわゆる長胴甕（22）、浅いもの（23）と種々の器種がみられる。いずれも口縁部は外反傾向が強く、端部がつまみ出されるものが目立つ。甕胴部は外面が縱方向、底部が不定方向のハケメ調整、内面上半が横方向のハケメ調整、下半がヘラケズリされる場合が多く、地域的特色として指摘されている。ただし、小型・中型の甕の場合、内面全体にヘラケズリが及んでいるもの（20・21）も見られる。なお、20・21にはヘラ書きが残る。

竪穴住居SB4459からは、土師器杯・皿・椀・高杯・壺・甕・瓶、須恵器杯蓋・杯・鉢・長頸瓶・壺・甕などが整理箱に約6箱分出土している。やはり大半が土師器であり、とりわけ甕類が主体的である。

土師器杯・皿は、口径に対し器高がやや減じるものが多く、また、皿は、大型のもの（25～27）に混じり口径が12～13cmの小型品も見られる。杯・皿とともにb手法で調整されるものに加えヘラケズリが口縁部下半に及ぶものも見られる。また、内面に暗文が残るものも散見される。

高杯は暗文の残る大型で浅い杯部（28・29）に面取りの施された低い脚部がつく。甕は各種のものがあるが、37はゆるく外反し短くおさまる口縁部をもつもので、あまり例をみないもの



第13図 第67次出土遺物 S.B.4459 ;24~43

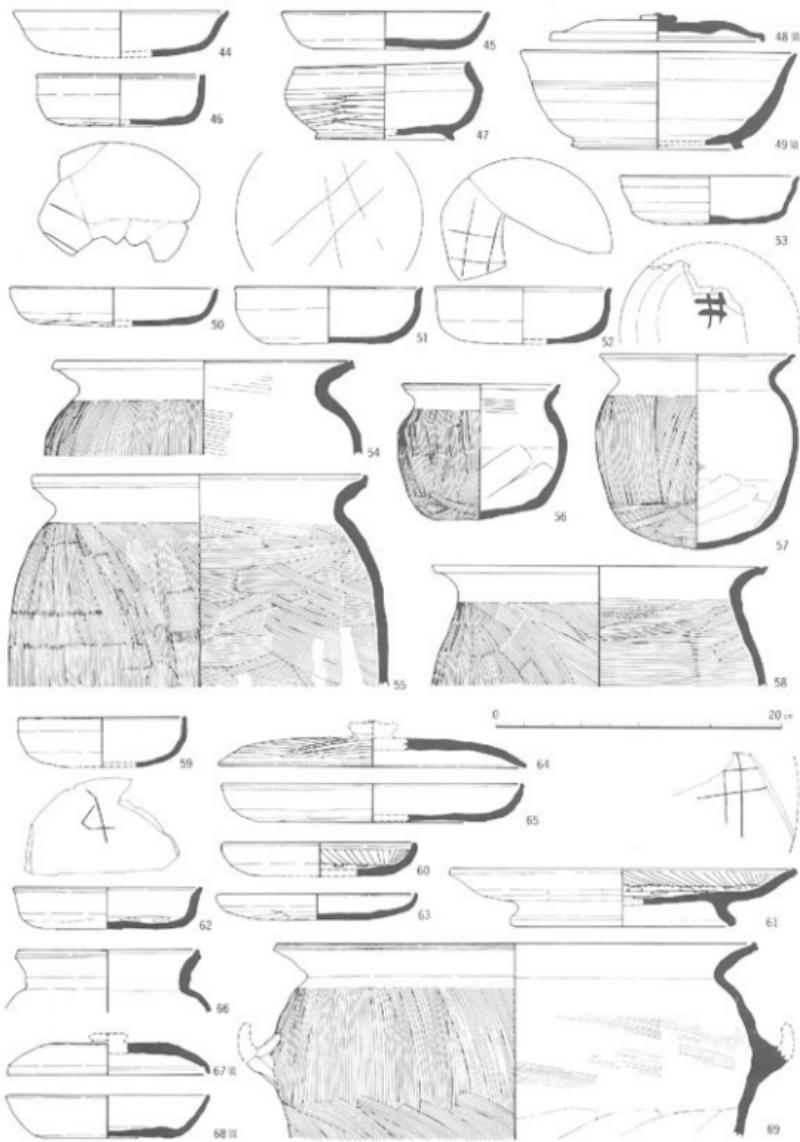
である。

須恵器は高藏寺2号窯期のもので、杯は未調整で平坦な底部から口縁部が直線的に外方に開くもの（34・35）が目立つ。

また杯蓋の中には、硯として転用された（32）と他の1点合わせて2点ある。

これらの諸点からこの一群の土器は、奈良時代前期でもやや後出の斎宮跡土器編年SK3000併行期に位置付けられる。また、SB4463出土土器は同時期あるいはやや新しいものと考えられる。なお土師器杯・皿には、「井」のヘラ書きのみられるものが10点以上ある。同様のヘラ書きは、後述のSB4461をはじめ調査区南西部の遺構に多くみられ、遺構間の関連が注目される。

堅穴住居SB4461からは、土師器杯・皿・碗・台付皿・高杯・蓋・鉢・甕・瓶、須恵器杯蓋



第14図 第67次出土遺物 S B4461 ;44~58、S B4463 ;59~69

杯・椀・長頸壺・甕などが整理箱6箱分出土している。やはり土師器が主体的で甕類が目立つ。

土師器杯・皿は、口径に対する器高が減じ、口縁部が外傾するもの（44・45）が多く、またb手法に加え口縁部外傾全面をヘラケズリするc手法により調整されるものがみられるなど新しい要素が認められる。

粗製の椀（51・52）も、底部が平坦で器高がやや低くなるが、口縁部は依然直立に近く古相を残す。47は明橙色の精度な胎土で、内弯する体部に高台のつく椀である。全体にヨコナデ調整され、体部下半はヘラミガキされる。

甕には各種のものがある。肩のやや張るものがみられるが、先行するSB4459のものと大差ない。

須恵器の出土量は少なく、小片ばかりであるが岩崎25号窯期のものと考えられる。

49は口径19.3cm、器高6.9cmの高台付きの椀である。やや腰が張る体部から伸びる口縁部は端部近くで若干外反する。口縁部外面に一条の沈線が巡り、それ以下は回転ヘラケズリされる。

これら一群は、奈良時代中期でも前期に近い時期のものと考えられる。

なお土師器には「井」のヘラ書きがあるものが少なからずみられ、SB4461上の包含層からは、「井」の墨書きの残る須恵器杯（53）が出土している。

(X)まとめ

当初の予想どおり、今回の調査区では奈良時代及び鎌倉時代の遺構が主体となることが確認された。これらはこれまで数次にわたる古里地区での調査結果と符合するものである。

弥生時代中期の方形周溝2基の存在は、第4・5次あるいは第58-4次調査などで断片的に検出している弥生時代の竪穴住居や土塙、溝の存在と相俟って、史跡西部の戦川段丘上に住居から葬地に及ぶ弥生時代の遺構が広汎に分布する可能性を示唆するもので、斎宮前史を考える上で貴重な資料の一つである。

また、この2基の方形周溝の方向は、戦川段丘を自然地形の制約から、北で東に振れるものであり、この方向性が飛鳥時代の竪穴住居を経て奈良時代以降の古里地区の遺構に受け継がれていくものと思われる。

さて、竪穴住居は飛鳥時代に出現し、奈良時代前期に数多くみられる。これら竪穴住居は重複する状況からすれば、数軒のものが場所をあまり移動させずに2~4回にわたり建て替えられたものと考えられる。これら斎宮成立期に該当する竪穴住居の住人がいかなる人々であったかは速断できないが、SB4459出土の須恵器杯蓋の転用硯2点の出土などは、識字層の存在を示唆する資料として興味深い。また調査区南半には「井」のヘラ書きの残る土器を出土する遺構が目立つ。この周辺では第7次調査の土塙出土土器に木葉脈状のヘラ書きの残る土器がみられ、帰属集団の違いを示すものであろうか。

また、今回の調査では竪穴住居に付設されるつくりつけカマドに、土師器甕の転用が目立った。これまで斎宮では、第56次調査のSB3605で煙道として、第66次調査で支柱としての転用例があるが、例数が少なく、特異なものと考えられてきた。今回の調査では土師器の転用は半数を占めた。さらに遺存しない素材の存在を想定すればカマド構築に際しては、粘土とあわせて何らかの素材が使われることが普遍的であった可能性が考えられる。

さて、これらの竪穴住居は、奈良時代中期を経て後期に至ると掘立柱建物へと変化していく。この動きは、史跡中央及び東部に奈良時代中・後期の竪穴住居が残存するのに対し、やや先行するものである。

しかし、古里地区の掘立柱建物は、第4次（古里C地区）調査の例を除き、その方向・規模の点において規格性にかけ、雑多な建物が点在している感があり、整備された官衙地区とは考え難い状況を示している。あるいは斎宮官人層の居住区とも考えられ、このような建物群が、從来蹄脚硯の出土などにより指摘されている奈良時代斎宮の存在とどうかかわり、その中でどういう位置を占めるのかは、今後の調査の課題である。

一方、斎宮衰退期の鎌倉時代の遺構としては、溝の存在が目立つ。

これらは、これまで古里地区の各所で検出され建物群の区画施設と考えられてきた。しかし、すべてが同一の方向性を示すのではなく、北側の第5次（古里D地区）調査と、南側の第3次（古里B地区）調査、第4次（古里C地区）調査ではその方向がやや異なっている。今回検出したものは、両者の中間的な方向を示すもので、連続はできないが、当時の遺構の方向性が北から南にかけて徐々に変化している可能性があり、今後周辺の調査により、これらの大系的な把握とその位置付けが期待されるところである。

V 第68次調査

6 A B F (古里地区)

第68次調査は、先述の第67次調査の東に接して東西55m×27mの調査区を設定して実施した。調査面積は1,485m²、現況は草生地である。

調査区の基礎層序は、第67次調査と同様であり、遺構は主に地山面上で検出した。地山は調査区中央部で、0.8m前後と深いが東に向かうほど漸次浅くなり、東端では0.2m前後とかなり起伏している様子が窺えた。

検出した遺構もやはり奈良・鎌倉時代のものが中心である。主な遺構としては、古墳の周溝と考えられるもの1、奈良時代の掘立柱建物7、竪穴住居10、鎌倉時代の掘立柱建物8などがある。

なお、検出した遺構のうち、墳墓と考えられるSX4527・4550について、土壤中のカルシウム、リンの含有量に関する分析を三重県農業技術センター環境研究室のご協力で実施した。

(I) 古墳時代の遺構

調査区南東部で検出したSX4562は、幅2m前後で深いU字型の断面を呈する周溝がおそらく円形に巡るもので、その北半を検出した。第65-1次など史跡西半部において検出されているいわゆる円形周溝とは、周溝の断面、出土遺物の様相が異なり、また周辺の塚山古墳群の分布状況などから、SX4562はおそらく円墳が削平された痕跡と推測される。その復元径は、約14.5mである。主体部が遺存していないため築造時期は限定できないが、周溝はその出土遺物から、7世紀前半に埋まりはじめ奈良時代前期には完没したものと推測される。あるいは古墳の削平時期を示唆するものであろうか。

(II) 奈良時代前期の遺構

この時期は先の第67次調査では、竪穴住居が盛行する時期として位置付けられたが、今回の調査区では竪穴住居に加えて新たに掘立柱建物が出現する。

検出した遺構は、竪穴住居10、掘立柱建物3、溝1、土塁4である。

竪穴住居SB4501～4510は、調査区中央部でかなり重複した状態で検出された。床面積は最大のSB4509でも15.2m²と小規模なものばかりである。

内部施設としては、SB4501に周溝が認められたほかは、主柱穴などは確認できなかった。

つくり付けのカマドは、SB4503・4507・4509・4510で検出され、やはり東あるいは北壁に構築されている。いずれの住居からも土師器、須恵器の杯・皿など日用雑器が出土している。

これらの竪穴住居は第67次調査の場合と同様にあまり場所をかえずに奈良時代前期の古い段



第15図 第68次造構実測図（1：200）

階から中期に近い段階まで、数次にわたり建て替えたものと考えられる。

掘立柱建物には、SB4517・4560・4561がある。SB4517は、調査区中央で検出した3間×2間の南北棟である。SB4560は、調査区東端で検出した3間×3間の総柱建物である。

SB4560の柱掘形は、まず、柱掘形2～3個分を布掘り状に掘り下げ、その上でさらに一辺0.8m前後の方形の柱掘形を個々に掘り下げる特殊なもので、いわゆる「溝もち」と呼称される掘立柱建物である。なお、柱掘形とこれらをつなぐ溝状の遺構の埋土には切り合いは認められず、おそらく同時に掘られ埋められたものと推測される。なお、建物方向は後述のSD4500にはば揃っている。

SB4560の北側で柱穴1個分だけ検出したSB4561も同様の掘形をもつため、掘立柱建物と推定した。斎宮跡ではこのタイプの建物は、籠林地区で実施した第64－3次調査の3間×3間の総柱建物1棟があるに過ぎず、県下においても類例はみられない。

土塙SK4518・4497は、竪穴住居群の西側と北側で検出した円形の土塙で、特にSK4518からは、土器師榦・杯・皿・台付皿・高杯・壺・瓶・須恵器杯・蓋・壺・短頸壺・平瓶などが出土している。土塙SK4553・4557は、先述のSX4562に重複するものである。

溝SD4500は、調査区を北東から南西に直線的に斜行する溝である。幅3.5m前後、深さ約0.1～0.2mと幅の割にはかなり浅く、底部は平坦である。扁平な形状のために流水のための溝かどうか判断しかねるが、ここでは一応溝として考えたい。この特異な形状は、南西約120m離れた第3次（古里B地区）で検出した奈良時代の大溝の北末端の状況に極めて近似しており、同一溝である可能性が高い。そうした場合、この溝は第3次調査区から北東に直線的に延び、その距離は約170m、そしてさらに続くものと考えられ、当時の地割方向に強い影響をもったものと推測される。

なお、SD4500を境として東側では地山が一段高くなってしまい、溝東側の安定した地盤の地区と西側の地山が低くやや不安定な地区との境をこのSD4500が通っている点、溝の性格を考える上で留意する必要があろう。溝埋土の遺物から、奈良時代前期から中期にかけて埋没したものと考えられる。

（三）奈良時代中期の遺構

竪穴住居がみられなくなり、先述のSD4500もほぼ埋没した時期である。主な遺構には、掘立柱建物2、土塙5、墳墓1がある。

掘立柱建物SB4496・4512は、調査区北辺近くで検出したものである。SB4496の規模は不明だが、SB4512は3間×2間の南北棟で、周辺でみられる方向の不揃いな小規模な建物群の一部に属するものであろう。

土塙SK4498・4499・4545・4546は、SB4496・4512の東側で検出したものである。SK4498・

4499からは、土師器杯・皿・高杯・台付碗・壺・カマド、須恵器杯・蓋・長頸壺・甕などが整理箱5箱分出土しており、時を経ずして掘られ、また埋められた土塙と考えられる。調査区南側のSK4536もこの時期のものである。

SX4550は、先述のSD4500の埋土を切ってつくられたもので、0.7m×0.6mの小さな土塙に土師器皿を蓋に転用して、口縁を密閉し、さらに底部に小さな穿孔のある土師器長胴壺が口縁部を南に向けて横たえられていた。壺は、土圧でややつぶれているものの、ほぼその形状を保ち、口縁部の一部が欠け、壺胴部中に転落しているところから、埋納時には壺内にかなりの隙間があったか腐敗しやすい有機質のものを内容物としていたものと考えられる。骨片などは確認できなかったが、壺の埋納状態、底部穿孔などを併せ考えれば、おそらく土師器壺を棺として利用した墳墓であると推測される。

なお、壺埋土中のカルシウム、リンの含有量を三重県農業技術センター環境研究室に依頼し分析してもらったところ、付近の土壤に比べ双方ともかなり高い値が得られ、SX4550が墳墓である可能性を裏付けている。

(IV) 奈良時代後期の遺構

前時期に比し遺構は相対的に少ない。主な遺構には、掘立柱建物2、土塙2、井戸1がある。掘立柱建物にはSB4423・4532がある。SB4532は、梁行2間の建物であるが、建物南半に鎌倉時代の溝が位置するため、桁行は不明である。やや歪むようであるが、北西の柱穴のみ柱穴底部に柱の根固め用の乳児頭大の石が数個配されている。

土塙SK4516・4556からは、土師器杯・壺の破片が若干出土した程度である。

井戸SE4549は、調査区中央部の鎌倉時代の溝が集中する部分で検出した径1.8mの円形素掘り井戸である。壁面が疊層を主体とした軟弱なものであったため、約1.8m掘り下げた段階で掘削を断念した。出土遺物は少ないが一応この時期のものと考えた。

(V) 鎌倉時代前期の遺構

第67次調査と同様に平安時代の遺構・遺物は、ほとんどみられない。

この長い遺構の空白時期のあと再び遺構・遺物がみられるのは、平安時代終末から鎌倉時代に入ってからである。とりわけ鎌倉時代前期は、多数の遺構が認められる時期で、先述の奈良時代とともにこの地区が活発に利用された時期である。

主な遺構として、掘立柱建物8、塹2、土塙8、井戸2、溝6などがある。なお、これまで古里地区で実施した数次の調査では、鎌倉時代の多数の溝、井戸などが確認され該期の建物群の存在が推測されてきたが、これまで建物遺構については、明確な検出例がほとんどなかった。今回第67次調査も含め建物遺構を明確に検出し得た点は大きな成果と言えよう。

掘立柱建物には、SB4430・4513・4514・4520・4521・4529・4547・4548が、塹には、

SA4515・4533がある。建物としてまとまらなかったが、柱穴と考えられる小穴が点在し、また、検出した柱穴内に配される川原石が、地山面直上に位置し、柱穴底がわずかに地山に達しているものが多いところから、地山に達しない柱穴も相当あったものとおもわれ、元来ほかにも建物が存在した可能性が高い。

掘立柱建物は、6棟が調査区西半で重複して検出した。

このうちSB4430は、6間×6間の東西棟という規模の大きなものである。柱間は梁行に対し桁行がやや長く、総柱であるところから全面に床をもつものと思われる。また、柱掘形内には扁平な川原石が配されるが、その高さは一定ではない。その規模から見ておそらく該期この地区での主要な建物であったと考えられる。

SB4521はいわゆる南東隅に方形土塀を伴う4間×4間の純柱建物である。南東隅の土塀SK4522は2間×2間分の方形で深さ0.2mの浅いもので、埋土から土師器皿・鍋、山茶椀、常滑壺、鉢、砥石、鉄など日用雑器の破片とミニチュア埴が出土している。なお、SB4430をはじめ重複するSB4520・4521は、棟方向が一致することから建て替えによる一連の建物とおもわれる。出土遺物からSB4521が13世紀中頃、他は13世紀前半のものと考えられる。

また周辺で検出した同時期の溝ともおおむね方向が揃い、とりわけ建物南側のSD4431とは、ほぼ平行である。建物は、これらの溝に囲まれた部分を屋敷地とすれば、ちょうどその中に納まるものと理解される。

土塀にはSK4522-4525・4531・4534・4535・4555がある。

SK4522は、先述のごとくSB4521に伴う方形土塀である。

その北側のSK4524は、4.2m×3.3m、深さ0.3mの底の平坦な土塀で、底部にはこぶし大以下の石が平坦に敷かれていた。土師器皿・鍋、山茶椀、常滑の壺、青磁碗など日用雑器が出土している。形状・出土遺物とともにSK4522に酷似するところから、明確にできなかったが、おそらく掘立柱建物に伴う方形土塀であったものと考えられる。

SK4523は、前述のSK4524に重複するやや不整形な土塀であるが、土師器小皿、山茶椀などの日用雑器に混じり、土塀底面に密着するような状況で開元通宝・元符通宝などの小銭が出土した。これらの小銭は遺存状況が極めて悪く、原形をとどめないものや文字の判読できないものがあり、その数は6枚を数えた。

なお、これら小銭は、SK4523と時期が異なる遺構（例えは胞衣埋納）に伴うものと考える見方もあるが、埋土の状況などに明確な差異は認められず、また出土土器との時期差もないことから、その蓋然性は低いものと思われる。ただし可能性は否定できない。

井戸はSE4519・4528の2基を検出した。いずれも井戸壁面が、疊層で不安定なため完掘できなかった。

SE4528は、掘立柱建物SB4430などの南側に位置する径 0.8mの小規模な円形素掘り井戸で、13世紀前半に廃絶したものと考えられる。SE4519は、SB4430などの東側に位置する円形素掘り井戸で、浅い土壌状の上部の中央から長径1.2mの梢円形の掘形が、掘り込まれている。同じく13世紀前半でも、SE4528より新しい時期に廃絶したものと考えられる。

これらの井戸は、おそらく調査区西半に重複する掘立柱建物SB4430などに付随するものと考えられるが、明確な対応関係まで把握できなかった。

溝にはSD4431・4495・4530・4538・4539・4543がある。これらの溝は、SD4530を除いてこれまでの古里地区での数次の調査でも検出されている同時期の一連の溝と同様のもので、おそらく建物群を区画する溝、あるいは幹線排水路と考えられる。いずれも底部は、東あるいは北にむかって低くなっている、それらの方向への流路が考えられる。ただ、必ずしもすべてが、平行あるいは直交する訳ではなく、やや斜めになるものが多く、より広範囲な調査の上、対応関係を考えるべきであろう。

このうちSD4495は、西北西から南東にほぼ直線的に延びる溝で、調査区北壁と接する部分から13世紀初頭の山茶碗、土師器などが整理箱3箱分出土している。

SD4538・4539は幅0.8m、深さ0.4~0.5mとほぼ同様の形状を呈する溝である。両溝は、心々で約3.5mの距離をおいて平行に延び、その間には小石混じりのよく締った部分が認められた。これらの状況からSD4538とSD4539の間を道路SF4544と考え、両溝をその側溝と把握したい。道路幅は約2.5mである。両溝は、13世紀中頃から後半にかけて埋没している。

(VI) 鎌倉時代後期の遺構

この時期になると遺構数は、減少傾向にある。主なものとして塙1、溝4、墳墓1などがある。

塙SA4554は、調査区東半で検出した3間分の塙である。周辺で多数の小穴を検出したが、建物などにはまとまらなかったため塙と考えた。

溝にはSD4526・4540~4542がある。SD4540~4542は、前述のSD4538・4539とはほぼ同じ場所にこれらが埋没してから掘削されている。おそらく前時期に引き続きこの部分が何らかの境界として意識され続けたものと思われる。

SX4527は、調査区中央で検出した墓と考えられるものである。1.4m×0.9mの長方形で、深さ0.3mの墓塙底部の両側に転落しているものもあるが、両こぶし大の川原石が各々数個並べられ、墓塙内のやや東寄りに常滑窯産の小型の壺、その周辺に土師器小皿2点、砥石2点、鉄釘などが点在していた。おそらくこの小型壺が疏骨器であり、土師器小皿などが副葬品であったものと考えられる。

壺内には、骨片などは遺存しなかったが、埋土の土壤分析の結果、付近の土壤と比較し、カ

ルシウム濃度が高く、しかも甕上部より底部の土の含有濃度がより高いことが判明し、骨が埋納されていた可能性を示唆している。

ただし蔵骨器が、墓壇の北東に寄っている点、何らかの台とも考えられる配石がある点などほかに主要な埋納物のあった可能性も残る。

このほかにもSX4511など包含層中のため、遺構は明確ではないが、白色の粗砂の上に完形の土師器小皿数点が配されるものも存在した。

(VII) その他の遺構

調査区東半で、浅い溝が環状にめぐるSX4558・4559を検出した。上面に現代の擾乱をうけているため明確ではないが、こぶし大から人頭大の石が集中していたことから、第67次調査のSX4441と同様のものである可能性がある。出土遺物が少なく時期不明。

SD4551・4552は、平行して南北に延びる溝である。埋土などの状況から新しい時期のものと考えられる。

(VIII) 遺物

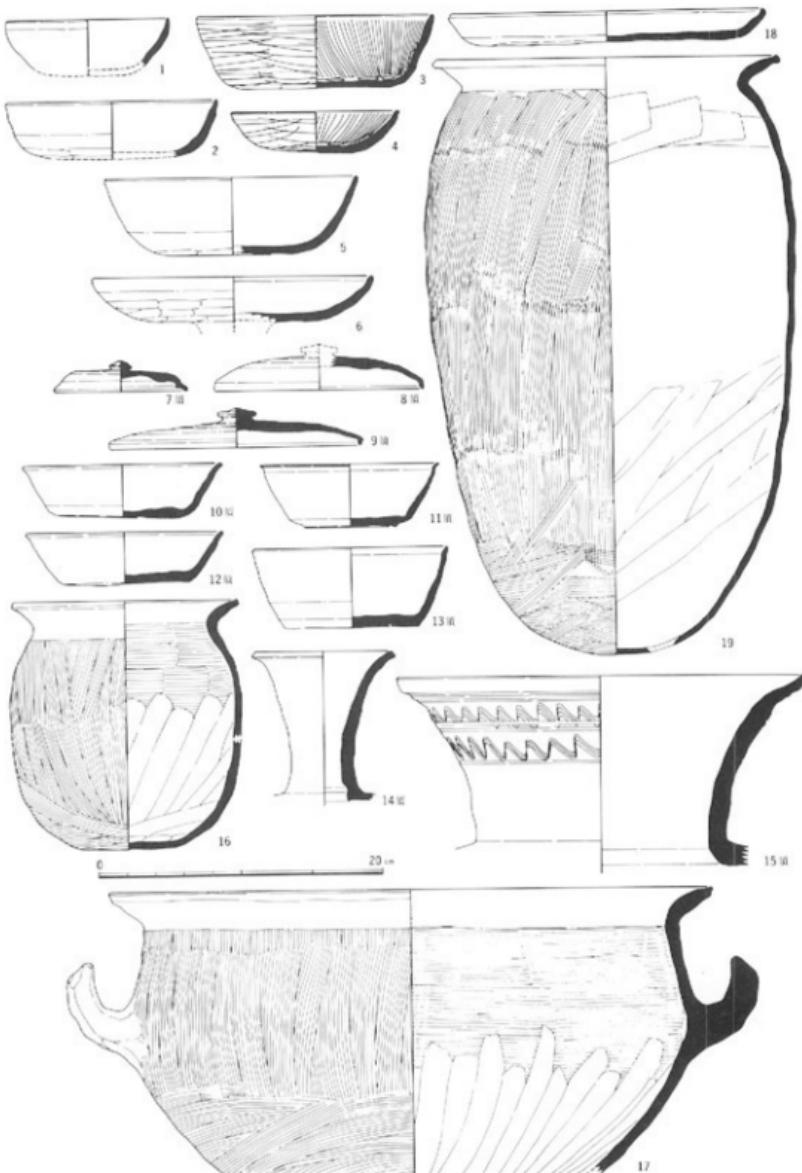
遺物は先述の第67次調査同様に奈良及び鎌倉時代の日用雑器類を中心で、整理箱に約80箱分出土している。これらは主に調査区西半の厚い包含層及び土壠、溝からの出土である。これに対し平安時代の遺物は少なく、包含層出土遺物中に若干みられる程度である。

SD4500からは、土師器杯・皿・碗・蓋・高杯・壺・甕、須恵器杯蓋・杯・長頸壺・甕、土錘などが出土している。これらは奈良時代前期から中期に及ぶもので、時期差が認められるが、埋土中での分層はできなかった。

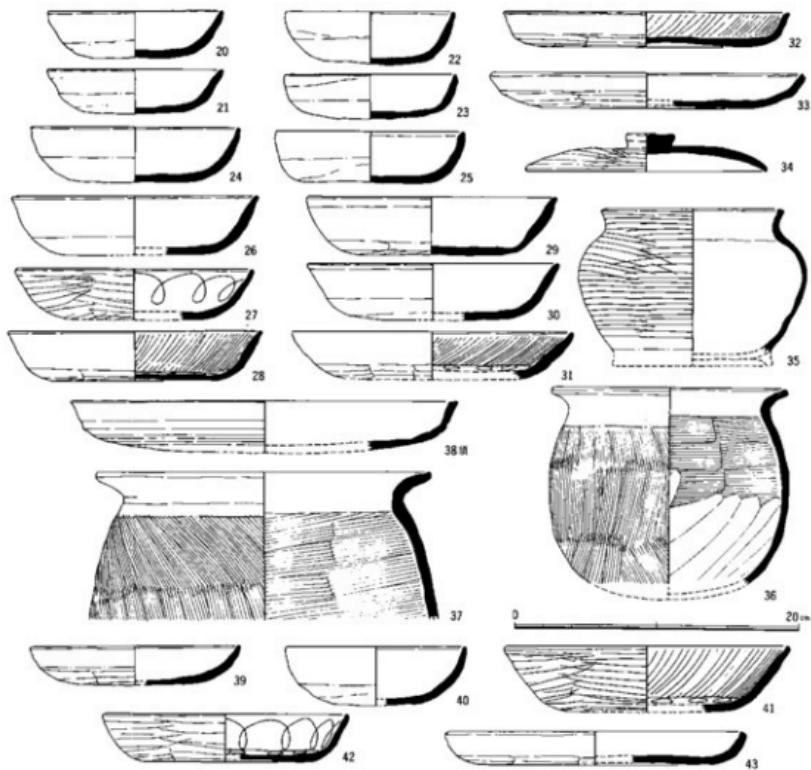
土師器杯にはやや深い器形で内外面にミガキや螺旋状暗文が施されるもの（3）と口縁部がやや外傾しミガキなどのみられないもの（5）がある。須恵器蓋にも口縁部内側にかえりの痕跡が残るもの（7）と器高が減じかなり扁平なもの（9）がみられる。須恵器杯は、口縁部が外傾し、やや浅く、底部が不調整なもの（10・11・12）が多く、稀に深く丁寧なつくりで底部が回転ヘラケズリされるもの（13）がある。

SD4500の埋土に掘り込まれたSX4550では、土師器皿（18）と長胴甕（19）が蔵骨器として転用されていた。18は口径21.6cmの大型品であるが、口縁部は外傾し端部が内側につまみ出され、底部はナデつけられるなど、新しい様相を示す。19は口径24cm、器高42cmの甕である。口縁部はくの字型に外反し、端部は肥厚して外傾する面をもつ。肩はあまり張らず、底部に近づくに従い徐々に細くなる。体部外面は、縦方向の、底部外面は不定方向のハケメ調整、内面上半は横方向のハケメ調整、下半はヘラケズリが施される。底部に焼成後の穿孔がある。いずれも奈良時代中期の所産と考えられる。

SX4498出土土器は、奈良時代中期に位置付けられる一群で土師器杯・皿・碗・高杯・蓋・



第16図 第68次出土遺物 S D 4500 ; 1~17、S X 4550 ; 18・19



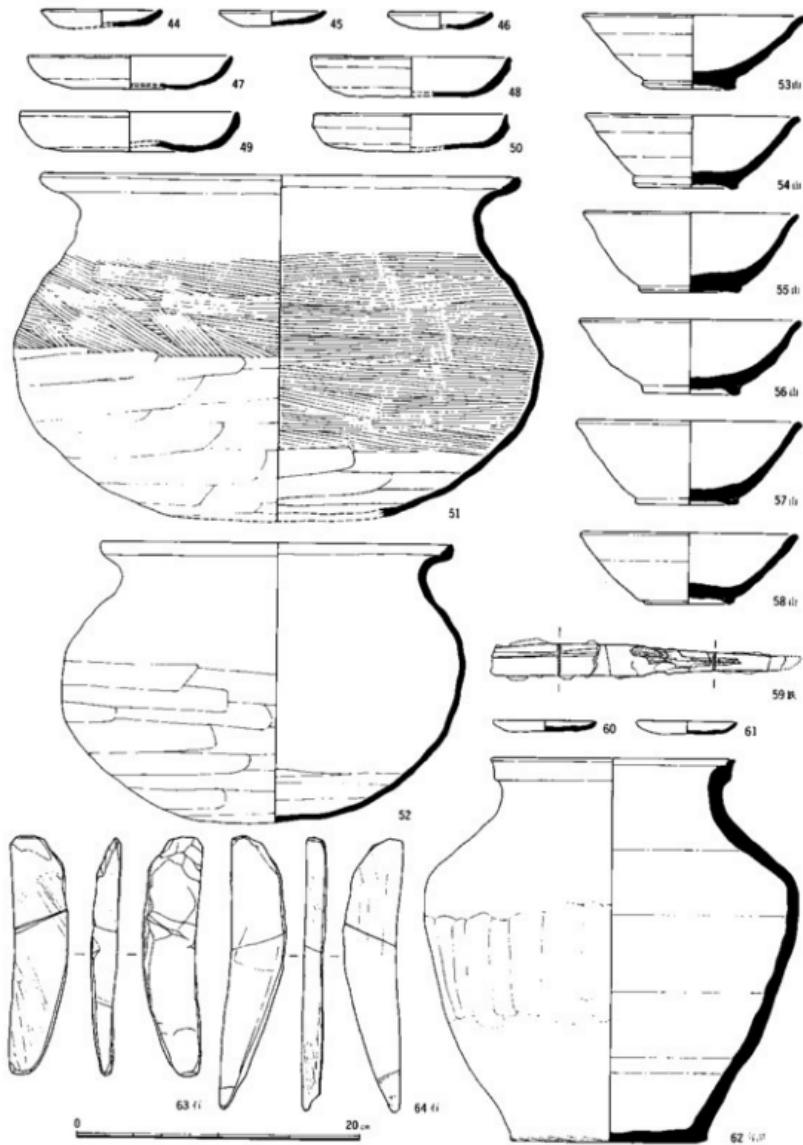
第17図 第68次出土遺物 S K 4498 ;20~38、S K 4499 ;39~43

壺・壺、須恵器杯蓋・杯などが出土している。土師器に対し須恵器は極めて少量である。

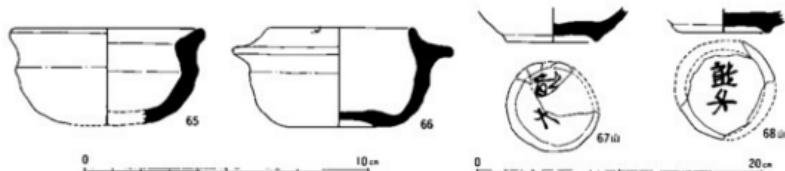
粗製の土師器椀は、口径12cm前後のもの(20~23)とそれよりひとまわり大きなもの(24~25)があるが、いずれも口径に対し器高が減じ、底部は平坦に近く口縁部も外傾するものが多い。杯は口径17~18cm、器高3.5~4.2cmで、口縁は外傾し全体的に扁平な印象を与えるものが多い。b手法による調整が主流で口縁部下半までハラケズリが及ぶものが少量ある。

またミガキや暗文の残るもの(27~28・31)も少なからずみられる。皿は口径20cmを越える大型品が目立ち、ミガキの残るもの(32)が若干みられる。35は底部に高台のつく薬壺型の壺であろう。外面にはミガキが施される。壺には小型でんぐりとした球型の体部のもの(36)といわゆる長胴壺(37)がある。

SD4495は調査区北部を斜行する溝で、調査区北壁に接する部分から山茶椀・山皿、土師器



第18図 第68次出土遺物 S D 4495 ;44~58、S X 4527 ;59~64



第19図 第68次出土遺物 ミニチュア土器 (S K 4522 ;65、S D 4540 ;66) (1 : 2)
墨書き土器 (包含層 ;67・68)

皿・小皿・鍋などが、一括投棄された状態で出土した。

山茶椀は、口径15.0~15.5cm、器高5~6cmで体部がやや丸味を残し、口縁部が外傾するものが主流で藤沢編年Ⅲ-5・6の段階に相当するものと思われる。

土師器皿(50)は、平安時代末期の皿の調整法を踏襲し口縁部のみを強くヨコナデするため底部との境に突出する段を有するものである。これに加えて土師器皿(47~49)は、平坦な底部から口縁部が内寄しながら立ち上がり、端部のみヨコナデされるもので、全体に薄い作りである。胎土にはやや細砂を含み褐色を呈するものであるが、おそらく鎌倉時代後半に盛行するいわゆるペラと呼称される白色系の皿・小皿の祖型と考えられる。

土師器鍋(51・52)は、いわゆる伊勢型鍋と総称されるもので、球形の体部に外半する口縁部がつき、その端部が内側に折り返され内側に面をつくるものである。新田編年VI-5類に分類されるもので、山茶椀の編年観とほぼ一致する。

これら的一群の土器は、斎宮跡の平安時代末期の示標遺構SD3052出土土器に統く鎌倉時代初めに位置付けられる。なお、この一群にはいわゆるロクロ土師器がみられないところから、從来斎宮跡で藤沢編年Ⅲ-6段階の山茶椀を伴出すSX2990段階に求めていたロクロ土師器の消滅時期を若干遡らせて考える可能性を示すものと思われる。

59-64は、SX4527に埋納されたもので鎌倉時代後期の所産と考えている。常滑窯産の壺62は、いわゆるN字口縁の小型の壺で、藏骨器として利用されたものと考えられる。

土師器小皿(60-61)は、径7cm前後の粘土板の縁をナデた程度の粗雑なつくりのものである。59は刀子、63と64は砥石である。63と64は互いに接合するが、2点に分かれて埋納され接合面にも若干使用痕が残るところから、本来1個体であったものが、2個に分けて使用されたものと考えられる。

その他にミニチュア土器堆(65)がSK4522から、同じくミニチュア土器土釜(66)がSD4540から出土している。また墨書きの残る山茶椀が数点出土しており、その多くは仮名あるいは記号であるが、67・68は「熊女」と読めそうで鎌倉期の女性名を残すものとして興味深い。

(X)まとめ

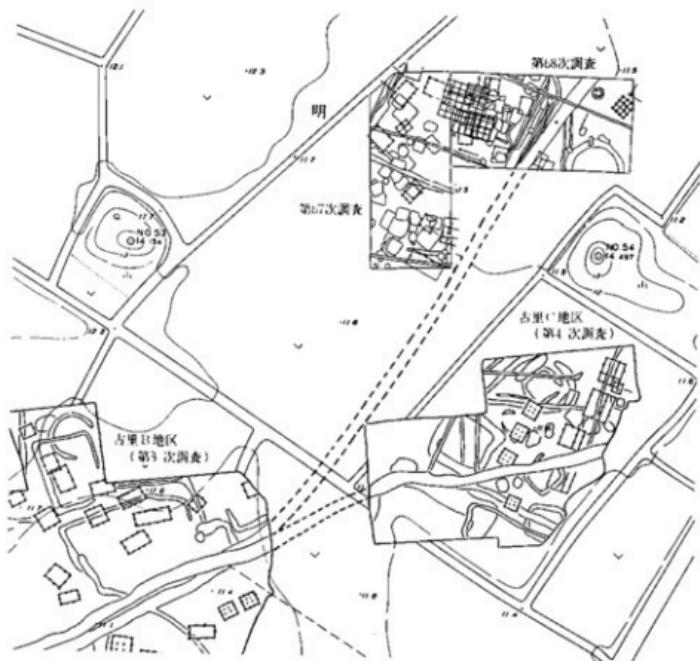
今回の調査は、先述の第67次調査に東接する調査区を設定したため、遺構の状況は第67次と

同様、奈良及び鎌倉時代のものが主体的であった。

従来、奈良時代中・後期の掘立柱建物が目立つ古里地区にあって、今回の調査区では、奈良時代前期にすでに竪穴住居と掘立柱建物が併存していることが確認された。

これら掘立柱建物のうち、溝SD4500の東側で検出した3間×3間の倉庫SB4560は、いわゆる溝ものの掘立柱建物である。このスタイルの建物は、これまで関東地方での報告例が目立ち、建物の壁構造に起因する工法との指摘がある。三重県下では、今回が初例であるが管見に属するものでも、中部地方以西で長野県佐久市小田井前田遺跡（平安時代）、大阪府松原市觀音寺遺跡（奈良時代以前）、やや構造は異なるが奈良県明日香村稻瀬川西遺跡SB001（7世紀）において報告例が見られ、関東地方に限られた工法でない事が知られる。

斎宮では先述のごとく、今回のSB4560・4561及び後述の第64～3次調査の1棟と3例が本年度初めて検出された。いずれも奈良時代前期の建物であり、これまで数百棟に及ぶ平安時代の建物にこのような工法がみられないところから、奈良時代に限定される工法と考えられる。



第20図 古里地区の遺構の状況 (1 : 1500)

また壁構造との関連については、斎宮の場合正方形の建物であるにもかかわらず、各辺で溝も
ちの位置が異なり、浅いものであるが床柱にも溝もちらが見られるところから、蓋然性に欠ける
ように思われる。

あるいは単純にやや小ぶりで深い柱穴を掘る際の作業上の手順として、一段掘削しそこから
より深い柱穴を掘ったと考えられなくもないと思う。いずれにせよ、今後、検出例の少ない西
日本を含めて類例の増加が期待される。

さて、これら奈良時代前半の遺構を分断するように、直線的に延びる斜行溝SD4500は先述
のごとく、第3次（古里B地区）調査区北東隅から第4次（古里C地区）調査区と第67次調査
区の間を通り、まっすぐに北東に延びるものである。

いまのところ、この溝がどこまで延びるものであるかは不明であるが、相当の距離にわたっ
ているところから先述の自然地形に起因する方向性を踏襲しながらも意図的あるいは計画的に
掘削され、該期の土地利用を規制するものであったことは想像に難くない。溝の西側では、豊
穴住居や規模・方向の不揃いな掘立柱建物が多く、これに対し東側の第4次調査では棟方向の
揃った倉庫群が検出され、溝の両側で性格の異なる空間が展開していたものと考えられる。ま
た、西側では地山が深いのに対し東側では浅く地盤が安定しており、本来周辺に比べやや微高
地的に高い地形であった点も單なる偶然とも言い切れないであろう。

両者が各々どのような性格の空間であったかは、速断できないが先述のごとく西側の空間
は、官衙的色彩が希薄な点は否定できない。

これに対し比較的整然とした建物配置がみられる東側は、建物の規模がやや小さいという指
摘があるものの、官衙的色彩を帯びた一画と考えてさしつかえないだろう。そしてその西端を
限り両者を区画する施設の1つとしてSD4500があったものと考えられる。さて、周辺での調
査例が少なく建物群の広がりなども未だ確認されていないため、この一画が奈良時代の斎宮寮
あるいは「大神宮諸雜事記」に記される竹村の屯倉の一部にあたるか否かは、今後の調査をまた
ねばならない。ことにこの地区的東側に位置し方位にのる奈良時代の遺構が目立つ塚山地区と
のかかわり、さらに死の穢を忌む斎宮にあってこの地区に塚山古墳群が遺存して来た事実が何
を意味するのかなど、今後慎重な検討を要する課題であろう。

一方、従来区画施設と考えられる溝や井戸の存在から推定されてきた鎌倉時代の建物群につ
いて、今回は明確に掘立柱建物を検出した。とりわけ鎌倉時代前期のSB4430は、6間×6間
の総柱建物で、当時の建物としてはおそらく最大級の建物であろう。

SB4450などの掘立柱建物の周囲に延びる溝は道路側溝あるいは区画施設として、先述のご
とく今後より広範囲な観点からの検討が必要であるが、全体として広汎な建物群と区画された
屋敷地の広がりを示唆するものである。

斎宮跡におけるこの時期の建物遺構は、主に史跡の西半及び北部に多くみられる。いまのところ衰退期にあたる当時の斎宮宮域は確定できないでいるが、その中心としては後世にまで伝承の残った斎王の森近辺を考えるのが妥当であろう。そうした場合、古里地区の建物群は中心部から偏在し、なお想像をたくましくすれば衰退期に入り土着化する斎宮官人層の居住域として、斎宮における中世的村落の萌芽を見い出し得るとするには過言であろうか。

以上、第67・68次の2回の調査により古里地区は、成立期と衰退期の斎宮にかかわりの深い地区であることが改めて確認された。各時期の詳細な様相については、まだ不明な点ばかりで若干の予見を述べるにとどまらざるを得ない。今後の周辺の調査により詳細な様相の解明と、また遺構・遺物のはほとんどみられない平安時代を含めて、斎宮の中における古里地区の時間的、空間的な位置付けが期待されるところである。

VI 第69次調査

6 A G M-E~H (東加座地区)

本年度第5回目の計画調査（第69次調査）は、通称中町裏の東加座地区で、東寄りの史跡東端部に近い位置で実施した。宮城中・東部では基盤目状に走る区画溝による方形地割の存在が想定されており、今回の調査地はこの方形地割の東端で北から2条目の東南部に位置する。調査面積は1,400m²で、現況は畠地である。

これまで、当区画内の北東部では昭和60年度に第62次の計画調査が行われ、奈良時代後期の掘立柱建物が検出されている。今まで、奈良時代後期の掘立柱建物は宮城中・東部ではあまり検出されてなかったが、今年度の北の方形区画の計画調査（第66次調査）や、58年度に南の方形区画内で実施した小規模調査（第48-11次調査）でも検出されており、宮城東端部でも奈良時代後半の掘立柱建物が相当の広がりを持って存在することが明らかとなってきた。

今回の調査はこのように明らかになってきた宮城東端で、北から2条目の区画内東南部の状況を明らかにすることを主な目的とした。なお、当調査地内では第9-6次東西トレンチ・第14-4次南北トレンチ調査が行われている。第9-6次調査では平安時代前期の掘立柱建物3棟が、第14-4次調査では平安時代末期の幅4m以上、深さ1mの南北溝が検出されており、この南北溝は位置的に見て区画東端を画す区画溝と思われる。

調査は土置きの制約などから正月をはさみ、調査区を東半部と西半部に分けて実施した。遺構面までの深さは浅く、北で耕土0.2m、南で耕土0.4mのすぐ下は遺構面である。また、調査区北西部には近代の耕作に伴う幅・深さ0.3mの東西小溝が幾条も認められた。

検出した主な遺構は奈良時代後期～平安時代前期の掘立柱建物、土塙などを中心で、他の時期の遺構は少ない。

(I) 奈良時代後期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物5、土塙5、東西溝2、井戸1がある。掘立柱建物については柱掘形から出土する遺物が少なく、すべてが当該期のものかは断定できない。

掘立柱建物は、調査区西部でも中央から北に集中する。調査区北側にある建物は、SB4570・4573の2棟である。SB4570は、調査区外に延びる3間×2間の東西棟、SB4573は、北側柱列の一部が東西溝SD4613に壊されているが、南北2間、東西3間以上の規模を有する。柱掘形から出土する遺物はほとんどないが、平安時代初期の土塙SK4572より古く、また、建物の周辺にある遺構は奈良時代後期と平安時代初期の土塙に限られているため、SB4570・4573は奈良時代後期まで遡るものと考えられる。

調査区中央西側に位置する建物には、SB4590～4592の3棟がある。SB4590は、西側は調査区外に延びる3間×2間以上の東西棟で、南側に廊を持つ。SB4591は、2間×2間の東西棟、SB4592は、北側柱列が畦の下にあるが、3間×3間の南北棟になる。柱間は、桁行1.6m、梁行1.2mと小さい。重複関係からSB4590→4591→4592であることが判明している。柱掘形からは、奈良時代後期の遺物しか出土していないが、3棟がすべて奈良時代後期のものかは問題が残る。

土塁SK4576は、調査区西北に位置し、平安時代初期の掘立柱建物SB4574・4575より古い。南北4.5m、東西2.5m、深さ0.5m、出土した遺物は整理箱で3箱ある。他の土塁SK4579・4583・4585・4603は、径1～2mの円形を呈し、調査区北側に集中しているが、SK4603は調査区南西部で検出した。出土した遺物は少ないが、SK4585からは土師器を主として比較的まとまった遺物が出土した。

東西溝SD4581は、幅0.7m、深さ0.15mの比較的浅い溝で、調査区中央で18mにわたり検出した。また、この溝の南2mでも幅0.6m、深さ0.2mの浅い東西溝SD4582を部分的に検出している。いずれも奈良時代後期の遺物が、少量出土している。また、溝の振れは東で北に5°と同時期の掘立柱建物の振れとほぼ同じである。

井戸SE4580は、東西溝SD4681の西に位置し、径1mの円形の素掘り井戸である。この井戸の上面は径2.5mの深い土塁状の不整円形を呈す。さいわい完掘することができ、深さ3.3mを測る。出土した遺物は整理箱で6箱あり、このうち井戸下層からは「酒」の墨書のある土師器甕なども出土している。

(Ⅱ) 平安時代初期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物4、土塁7がある。

掘立柱建物は、調査区の北西、南西、南東の3ヶ所で検出した。

調査区北西にある建物には、SB4574、4575の2棟がある。SB4574は、3間×2間の東西棟で北側に廊を伴う。SB4575は、ほぼ同じ位置にある3間×2間の東西棟で、重複関係からSB4575のほうが新しい。柱掘形はSB4574が、一辺0.6mの方形であるのに対し、SB4575は、一辺0.5mの方形とやや小型である。この2棟は、奈良時代後期の土塁SK4576が埋没した後に建てられている。

調査区南西部には、SB4600が位置する。3間×2間の東西棟で、柱間は桁行2m、梁行1.8m、柱掘形は比較的大きく、一辺0.7m、深さ0.5mの方形を呈する。柱掘形から出土した遺物から、平安時代初期と考えられる。

調査区南東部には、SB4611がある。3間×2間の東西棟で、柱間1.9m、柱掘形から出土した遺物から平安時代初期と考えられる。



第21図 第69次造構実測図 (1 : 200)

土塙は、調査区北と南にあるものに分かれる。

調査区北には、SK4572・4577・4578・4584がある。SK4578は、径0.4mの小さな円形を呈し、土師器杯7・皿2個体がまとまって出土した。他は2~3mの不整形を呈する。出土した遺物は、いずれも整理箱で1箱程である。

調査区南にはSK4602・4604・4605がある。SK4602は、径2m、深さ0.3mの隅丸方形を、SK4604は、東西3m、南北2.5m、深さ0.2mの不整形を呈する。出土した遺物は、SK4604から整理箱で1箱程度、SK4602から3箱出土した。SK4605は、東西3.2m、南北4.5m、深さ0.2~0.6mの不整形で、同時期のいくつかの土塙が重複していると思われる。遺物は整理箱で3箱と比較的多く出土した。

(Ⅲ) 平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物10、土塙1がある。

掘立柱建物は、大きく調査区西南部、東南部と東北部に建てられた一群に分かれる。

西南部にある建物は、SB366・4593・4598・4599がある。SB366とSB4599は、ほぼ同じ位置にあり、重複関係からSB4599のほうが新しい。SB366は、3間×2間の東西棟で、柱掘形は一辺0.7m、深さ0.5mの方形を呈する。SB4599も3間×2間の東西棟であるが、柱掘形はSB366と比べ径0.5mの円形と小型である。SB4598は、SB366の西にある東西棟建物である。南北2間分の柱掘形を検出したが、他は調査区外に延びるため規模は不明である。柱掘形は一辺0.6mの方形で、深さは0.2m。柱掘形から出土した遺物はほとんどないが、棟方向が東2mにある平安時代初期のSB4600とほぼ同じであるため、時期的に遡る可能性もある。

東南部にある一群にはSB367・4609・4610の3棟がある。SB367・4609は3間×2間の東西棟で重複する位置にある。柱掘形はいずれも一辺0.5m、深さ0.4mの方形で、柱掘形の切り合ひ関係はないため新旧関係は不明である。SB4610は3間×2間の南北棟で、柱掘形は一辺1m、深さ0.6mと比較的大きなものである。西南隅の柱掘形は同時期の土塙SK4606が埋没したあと掘られており、平安時代前Ⅰ期の中でも新しい建物であり、これら3棟の中でも一番後出のものである。

調査区東北部には、西妻柱部分のみを検出したSB4586・4587と、その南で3間×2間の東西棟SB4589、南北棟SB4588の計4棟を検出した。これらの掘立柱建物の柱掘形は一辺0.6mの方形で、深さは0.5mほどである。柱掘形から出土した遺物は少なく、全ての建物が平安時代前Ⅰ期のものとは断定し難い。

土塙SK4606は、調査区東南部にある。南北3.8m、東西3m、深さ0.4mの不整円形を呈する。出土した遺物は土師器を中心に整理箱で7箱ある。特殊な遺物には、墨書き3点、製塙土器が出土している。

(IV) 平安時代前Ⅱ期の遺構

この時期の遺構は、調査区西南部の土塙2のみである。掘立柱建物は、この時期のものと考えられるものはない。しかし、平安時代前Ⅰ期に建てられたものがこの時期まで存在していた可能性がある。

土塙SK4594は、東西2.6m、南北2.0m、深さ0.2mの楕円形を呈する。SK4595は、SK4594の南にあり、径1.5m、深さ0.2mの円形を呈する。出土した遺物は、いずれも整理箱で3箱程度である。SK4594から製塙土器が、SK4595から縁軸陶器1点が出土している。

(V) 平安時代中期の遺構

この時期の遺構としては、掘立柱建物SB4601だけである。

掘立柱建物SB4601は、調査区西南にある3間×3間の南北棟建物で、東に廂を伴う。柱掘形は一辺0.7m、深さ0.5mの方形で、柱間は1.9m等間、廂間1.7mである。建物の方位は北で東に1°と他の時期のものとは異なる。

(VI) 平安時代後期の遺構

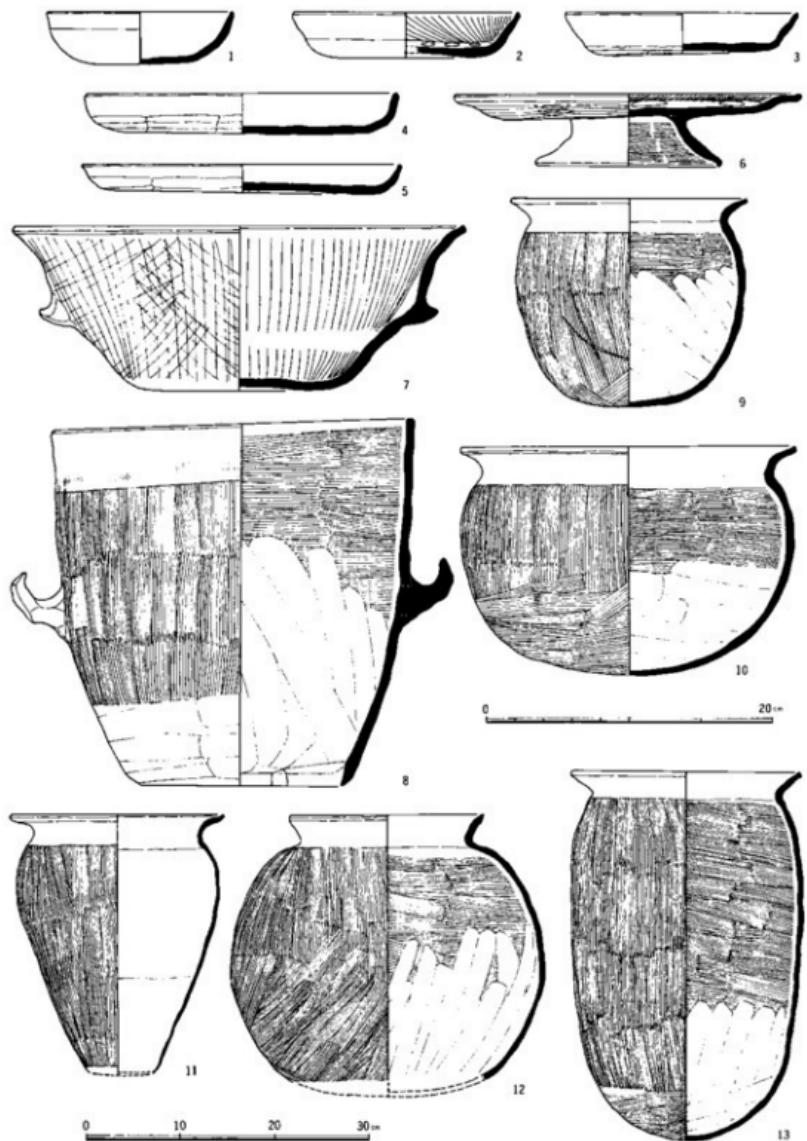
掘立柱建物2、井戸2、南北溝1がある。

掘立柱建物S B4596・4597は調査区西南にある。南北2間分を検出したが、調査区西方に延びるため規模は不明である。柱間2.2m等間、柱掘形は径0.4mの円形で、他の時期のものと比べ小さい。柱掘形から当時期の遺物が出土している。

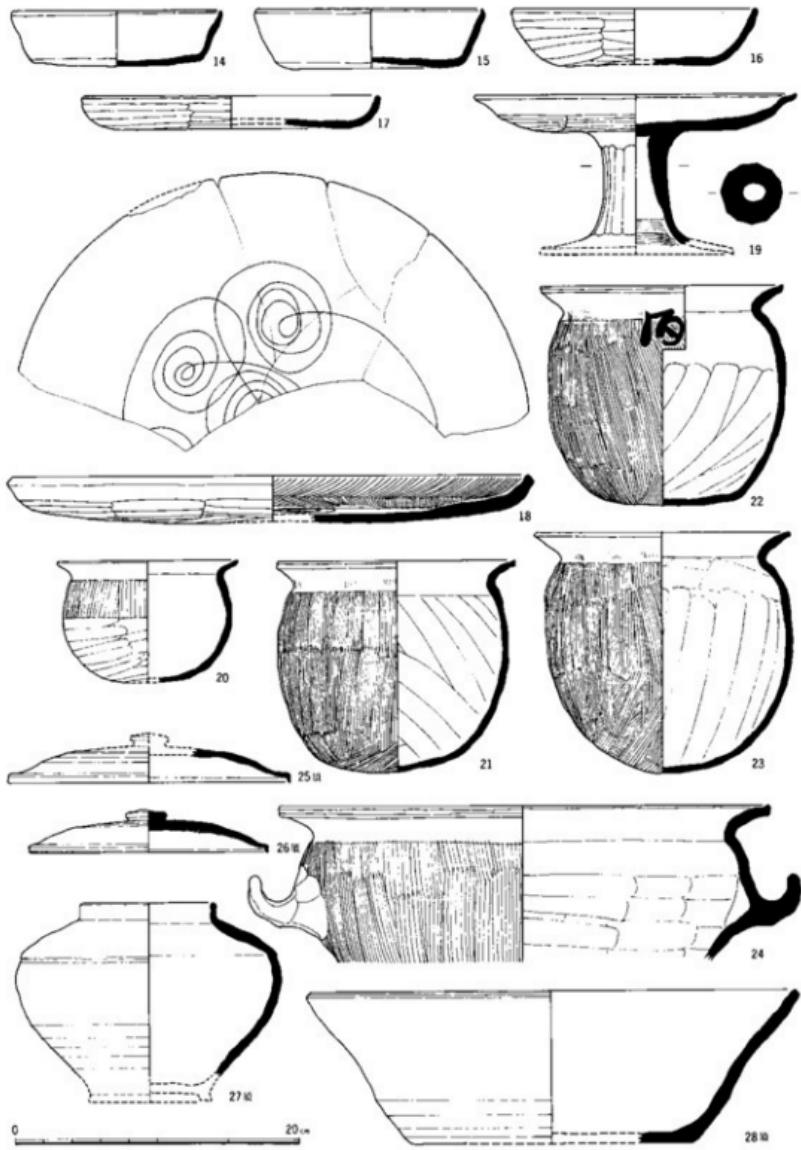
井戸SE4571は、調査区中央北端にある。周辺に近現代の瓦を廃棄したゴミ穴が広がっているが、遺構面上で井戸の一部を検出したため、ゴミ穴の一部を0.7mまで掘下げて井戸であることを確認した。南北2.5m、深さ1.5m以上、遺物はほとんど出土していない。井戸SE4607は調査区中央南にあり、径4mの楕円形を呈する。深さは2.3mまで下げたが、完掘はしていない。遺物は整理箱で2箱あり、土師器杯・皿・壺とともに藤沢編年の第Ⅱ-4段階の山茶椀などが出土地してある。

南北溝SD368は、第14-4次調査で南北30mにわたり検出したもので、今回更に南10m部分を新たに検出した。幅4m以上、深さ1m、出土した遺物は少ない。溝の方位は北で西に5°振れている。しかし、今回新たに検出した南北溝西肩部の南端部分は、西側に徐々に曲がってきており、これは当区画の南を画する区画溝の推定位置が、調査区南をはしる現道路部分の南端に想定され、南端部分はこれらの溝の合流する位置に近いため、えぐられているのではないかと考えられる。

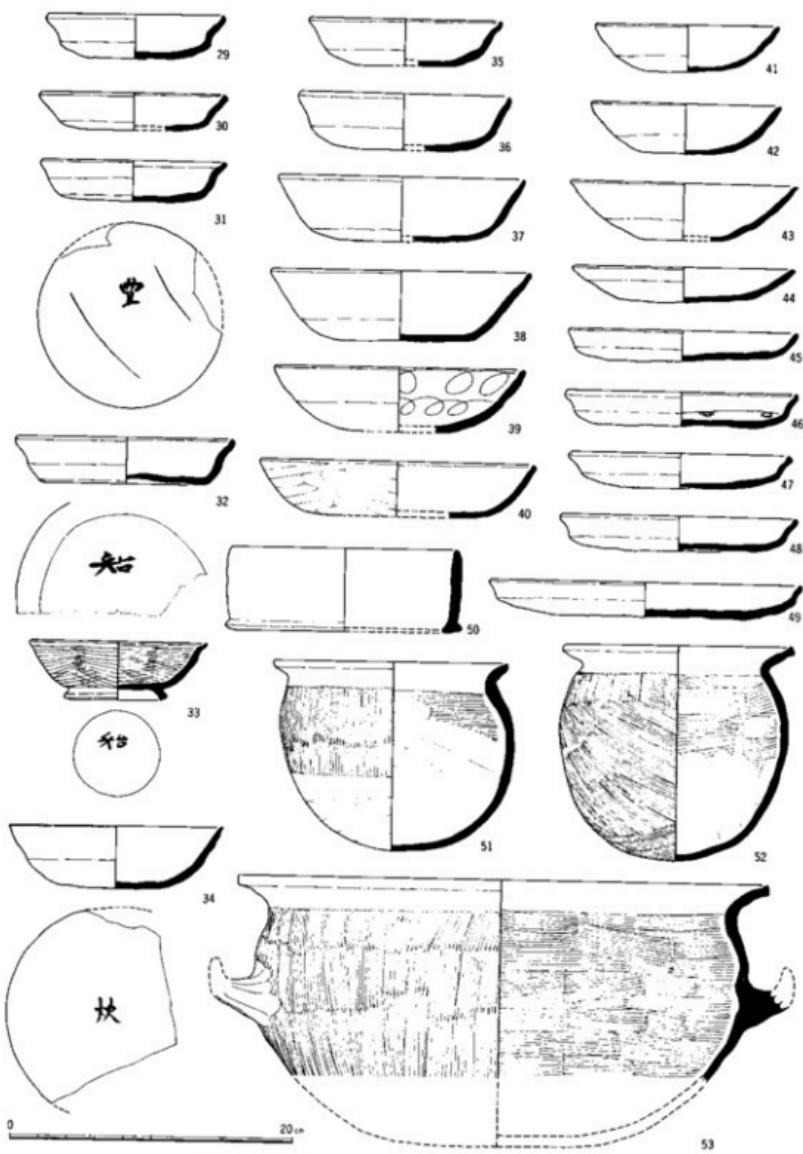
SX4612は、南北溝SD368の南端部分の溝底で検出した。東西3.5m以上、南北1m以上、深さ1mの方形を呈する。埋土は粘土質で、南北溝SD368にともなう遺構と思われるが、性格は不明である。



第22図 第69次出土遺物 S K 4585 ; 1～13 (11～13は1:6)



第23図 第69次出土遺物 S E 4580 ;14~28



第24図 第69次出土遺物 S K 4606 ;29~53

(VI) その他の遺構

調査区北側で幅1m、深さ0.4mの東西溝SD4613を検出した。出土した遺物が少ないと時期は不明であるが、平安時代後期の井戸SE4571より新しい。

(VII) 遺 物

調査面積の割には遺物は少なく整理箱で約80箱しかない。これらは奈良時代後期～平安時代前期にかけての遺構から出土したものが大半で、他の時期の遺構から出土したものは少ない。また、出土した遺物は土師器を中心で、須恵器はない。特殊な遺物としては円面鏡1点、風字鏡1点、綠釉陶器8点、墨書き土器6点の他ミニチュア土器1点がある。また、包含層から鎌倉時代の瓦器椀が数点出土している。

奈良時代後期の比較的まとまった資料にはSE4580、SK4585のものがある。SE4580出土の遺物はSK4585のものと比較して、土師器杯などに新しい要素がみられ、奈良時代後期でも後出のものである。

土壙SK4585から出土した遺物は量的に少ないが、土師器椀・杯・皿・高杯・鉢・瓶・甕などの各器種が揃っている。須恵器は甕の破片が少量出土しただけである。

土師器椀1は口縁部のみをヨコナデする、成形のやや粗雑なものである。杯(2・3)は、口径約16cm、器高3cm前後で、底部はヘラケズリを行う。このうち2は、口縁部内面に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文を3条施す。皿は、口径22～23cm、器高3cm前後のもの(4)が多いが、なかには器高2cmと、やや浅いもの(5)もある。高杯6は、口径24.2cm、器高5.1cmの杯部が浅いもので、杯部内面に放射状暗文と螺旋状暗文が施される。また、鉢7は、口径31.8cm、器高11.8cmの比較的大きなもので、体部外表面を粗雑にヘラミガキし、内面は放射状暗文を施す。甕(9～13)は、様々な形態をもつものが出土した。奈良時代を通じてある長胴甕(13)、中型で体部の丸いもの(9)、体部のやや扁平なもの(10)、胴部が口縁部より広い壺のようなもの(12)がある。また、図示してはいないが、口径12.8cm、器高10.3cmの小型の甕もある。これらの甕の胎土は砂粒をほとんど含まない精良なもので焼成もよく、他の土師器同様に斎宮及び周辺の土器焼成場の製品と思われるが、甕11は底部がやや尖るもので、胎土も砂粒を多く含む粗悪なもので、他の甕とは異なり斎宮での出土例も少ないと他地域からの搬入品の可能性もある。なお、甕9の体部外表面には「×」のヘラ書きが施される。

井戸SE4580から出土した遺物には、土師器杯・皿・鉢・甕、須恵器杯蓋・鉢・壺がある。SK4585と比較してやや新しい様相を持つものが多く、奈良時代後期でも比較的新しい段階で埋没した井戸と考えられる。

土師器杯には、底部をヘラケズリしない口縁部のみヨコナデする奈良時代後期でも新しい様相をもつもの(14・15)もあるが、口縁部近くまでヘラケズリするもの(16)も出土している。

杯15の底部外面には、判読不明の墨書が一文字残る。皿には、口径20cmほどのもの（17）もあるが、18のように口径36.2cm、器高3.2cmの比較的大型のものもある。この大型の皿は井戸最下層の砂礫層から出土しており、口縁部内面には方向を変えた放射状暗文が2段、底部内面には一重に巡らす通常の螺旋状暗文とは異なり幾重にも螺旋状暗文が施される。壺には小型（20）、中型のもの（21～23）があるが、いわゆる長壺はほとんど出土していない。特に井戸の下層からは中型の壺が多く出土しており、その数も10個体以上ある。これらの壺の中には、22のように頸部外面に「酒」の墨書の施されるものもある。須恵器は土師器と比べてその出土数は少ない。杯蓋25・26、壺27、鉢28の他、図示はしていないが天井部中央が穿孔され、リング状に立上がる杯蓋の破片もある。

平安時代前Ⅰ期の土塙SK4606から出土した遺物には土師器杯・皿・壺、製塙土器と須恵器は杯蓋や壺の破片がわずかに出土しているだけである。

土師器杯には、口縁部が外反するものと底径が小さく長めの口縁部が外方へほぼまっすぐ開く椀に近いものがある。前者には、口径13cm前後のもの（29～31）と、15cm以上のもの（32）に分かれ、後者も口径13cm前後のもの（41・42）、15～16cm（34・43）、18cm前後のもの（38・39）に分かれる。奈良時代の特色を若干残すもの（35～37）も出土している。これらは、いずれも口縁部はヨコナデで底部は指先でなでつけるe手法であるが、口縁部外面と底部外面にヘラケズリが施される40がある。口径19.4cmの比較的大きなもので、口縁部内面に沈線が巡る。墨書の残るものも4点ある。31は「豊」とヘラ書きが2条、32は「始」、34は「炊？」が底部外面に残る。また33は口径12.4cm、器高4.2cm、胎土は精良で口縁部内外面はきれいにヘラミガキが施される作りの丁寧なものである。底部外面に32と同じ字体で「始」が書かれている。暗文の施されるものは少なく、39には口縁部内面に螺旋状暗文が2条施される。

土師器皿は、杯同様に口縁部が外反するものと、底径が小さく長めの口縁部が外方へほぼまっすぐ開くものがある。前者は16cm前後のもの（45～48）と、22cm前後のもの（49）に分かれる。後者のもの（44）は1点しかなく、口径は15.4cmである。底部内面に暗文が施されるものは少なく、46には螺旋状暗文が1条巡る。

壺は丸い体部を持つ中型のものがあり、底部内外面ヘラケズリを施す51と、内面だけヘラケズリを施す52がある。

（四）まとめ

今回の調査の結果、宮城東端の区画内の建物配置がより明らかとなってきた。掘立柱建物は平安時代中期1棟、後期2棟が存在するが、他は奈良時代後期～平安時代前期のものであり、建物の建て替えられる場所も限られ、時期的、区域的に限定されているさまが窺える。以下奈良時代後期～平安時代前期について、時期別に記述する。

奈良時代後期のものは、宮城東端でも奈良時代後期まで遡るものが周辺の調査から確認されはじめているが、今回の調査のものもどこまで遡るのか問題は残るもの、5棟検出されている。今回の調査地の北60mの第64-2・7次調査で、北の方形地割の南を画する区画溝が検出されている。この区画溝は、埋土より出土した土器から奈良時代末期～平安時代初期に埋没したと考えられ、少なくとも東端の区画及び建物の造営され始めたのは、奈良時代後半のある時点と考えられる。当初造営された奈良時代後半の建物には、当調査地内でいえば調査区西北部に集中し、その規則性はあまり認められない。

平安時代初期になると西北部でSB4575、西南部でSB4600、東南部でSB4611が同時に存在したことが考えられ、建物配置は計画的なものであったと思われる。また同一区画内の西北部にあたる第62次調査でも、奈良時代の建物が検出されているがその計画性はあまり認められないのに対して、平安時代初期～前期にかけて規則的な配置をもつ建物が造営されてくる。第62・69次調査にみるように当区画内では奈良時代後半に規則性をもたずに出でてきた建物が、平安時代初期に規則的な配置をもって造営されるようになったことが窺える。

また、第62次調査では、奈良時代後期の建物に伴う井戸が平安時代初期に埋没している。今次調査の奈良時代後期の井戸や、第64-7次調査の東西溝も平安時代初期に廃棄されていることから、平安時代初期にかなり大規模な計画的造営が開始されたことが推定できる。

次の平安時代前期の古い段階でもこの配置は受け継がれているが、建物配置は徐々に崩れていくようである。しかし、調査区南西部と南東部では、当地域の中心となると思われる建物が2～3度ほぼ同じ位置で建て替えが行われている。以降の平安時代前期でも新しい段階には建物配置が完全に崩れ、中期以降になるとほとんど建物の建てられない地域であると考えられる。

宮城中・東部の方形区画のうち、その内容が判明しているものは少ない。今回宮城東端の北から2番目の区画について考えてみたわけであるが、調査面積が少ないので、断定することはできない。方形区画でも場所により、その利用方法は異なっていたはずであり、今後、他の方形区画との比較検討を待ちたい。

VII 第64次調査

(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)

A. 第64-2・7次調査

この二つの調査は史跡東端の東加世地区にあり、宮城中・東部に想定されている方形地割の北東端の区画内の南東部に位置する。通称役場道を挟んだ東側が第64-2次で約200m²、西側が第64-7次で約820m²の調査を実施した。これまでの調査から方形地割の東を限る南北方向の区画溝が第64-2次の東を流れる現在のエンマ川沿いに、さらにその東に古里地区から宮城の北を通り東を巡る大溝が、存在することが確認されている。また第64-7次調査の西側の第35次トレンチ調査では当区画の南を限る東西方向の区画溝が検出されており、今回の調査区の南部でもその検出が予想される地域である。

1. 第64-2次 6AGL-F (大和谷 盛土及び事務所・駐車場の新設)

検出した主な遺構のうち、調査区南側では室町時代以降の大規模な土塙SK4630が広がっている。東西18m以上、南北9m以上、深さ0.8mで、その下で東西12m、深さ0.8mの奈良時代後期の土塙SK4631と、南に延びたトレンチ部分で奈良時代後期の東西溝SD1940を検出した。調査区北側のトレンチ部分では、奈良時代後期の掘立柱建物SB4625、平安時代初期の掘立柱建物SB4620、前期の掘立柱建物SB4623・4624・4626、中期の掘立柱建物SB4621、後期の掘立柱建物SB4622、及び鎌倉時代前半の土塙SK4627~4629などがあるが、建物の規模の明らかなものは少ない。出土遺物は整理箱で20箱あり、特殊なものとしては、綠釉陶器が12点、また室町時代の大規模な土塙SK4630から石製の硯(22)が出土している。

2. 第64-7次 6AGI-G (大和谷 テニスコート・管理棟・フェンスの新設)

検出した主な遺構には、奈良時代後期の堅穴住居SB4632、掘立柱建物としては奈良時代後期から平安時代前期のもの12棟(後述)、中期のもの2棟(SB4634・4646)、後期のもの2棟(SB4653・4658)と平安時代中期の土塙1基(SK4656)、後期の土塙2基(SK4643・4654)、平安時代中期に埋没した井戸1基(SE4665)である。また調査区南側で奈良時代後期の東西溝SD1940が検出されており、この東西溝は当区画の南を区画する溝と考えられる。出土した遺物は整理箱で50箱あり、特殊なものとしては綠釉陶器5点、鉄製鎌1点、瓦片2点、製塙土器などがある。

以下、奈良時代後期から平安時代前期の掘立柱建物を中心に述べることにする。

1. 奈良時代後期の遺構

堅穴住居1、掘立柱建物1、土塙9がある。掘立柱建物SB4650は調査区中央西にある4間

× 2間の東西棟である。柱間は2.1m等間で、柱掘形は一辺0.8m、深さ0.5mの方形を呈するもので、これまで斎宮で検出されている掘立柱建物の中でも比較的規模の大きな掘形である。棟方向は後述する東西溝SD1940とはほぼ同じで、東で北に4°振れる。また、第64-2次調査のSB4625と柱筋を揃えている。

土塙はSK4635・4642・4644・4648・4654・4659～4661・4664がある。同時期の堅穴住居、掘立柱建物の周辺を囲むように検出された。径2～4mの不整形なものが多く、遺物も比較的多く出土している。このうち掘立柱建物SB4650の南にはSK4659～4661が重複して検出され、SK4660からは土師器杯の底部外面にヘラ書きの残るもの(23)も出土している。

東西溝SD1940は、調査区南に位置する。西に隣接する畠で実施された第35次トレンチ調査で検出された東西溝の続きで、道路を挟んだ東の第64-2次調査でも一部検出されている。上面での幅1.2m、途中から幅0.4mとなり上面からの深さは0.5mである。出土した遺物は土師器を中心第64-2次が整理箱で1箱、第64-7次では3箱出土しており、この遺物から平安時代初期には埋没したと考えられる。

2. 平安時代初期の遺構

掘立柱建物SB4640、土塙SK4662がある。掘立柱建物SB4640は奈良時代後期の掘立柱建物SB4650の東北で一部重複する位置にある。4間×2間の東西棟と、また、柱間・柱掘形の規模が奈良時代後期のSB4650と比較的に似通っていることから建て替えと考えられる。また第64-2次調査のSB4620と柱筋を揃えている。

3. 平安時代前期の遺構

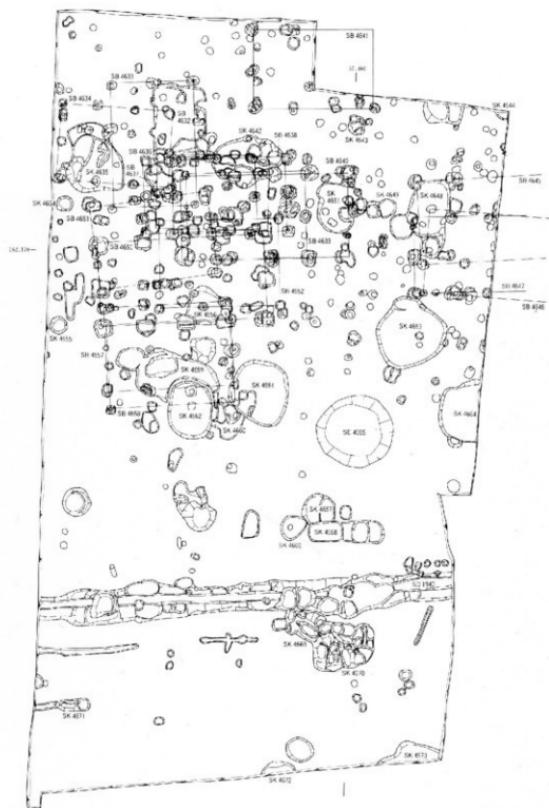
掘立柱建物10棟、土塙11基がある。掘立柱建物は、規模の判明するものはすべて3間×2間で、南北棟が1棟あるが他は東西棟である。調査区西側にあるものは、ほぼ同じ位置に重複して検出され何度も建て替えが行われたことが窺える。このうち平安時代前Ⅰ期のものはSB4637・4639・4645・4647・4657で、平安時代前Ⅱ期のものはSB4636・4638、他のSB4633・4641・4652はどちらになるか不明である。

土塙は出土した遺物からSK4649・4663・4666～4668・4671・4673は平安時代前Ⅰ期、SK4651・4669・4670・4672は平安時代前Ⅱ期に分かれる。このうちSK4663からは土師器、須恵器、灰釉陶器、製塙土器、黒色土器が整理箱で6箱出土している。

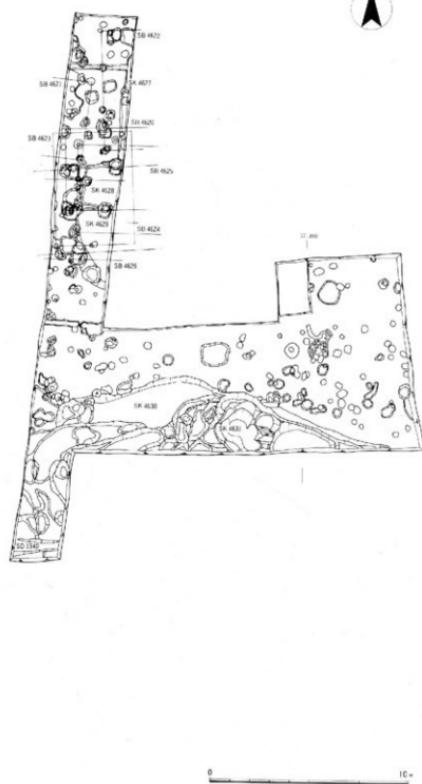
4. まとめ

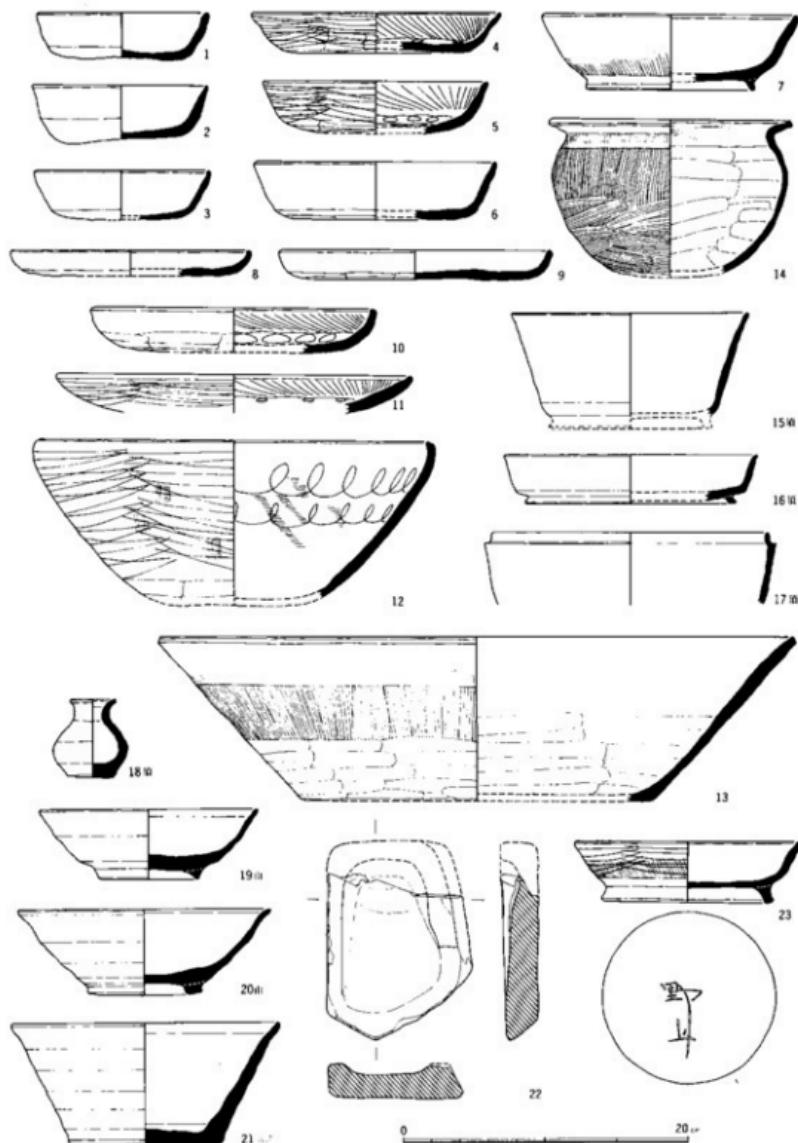
第64-2・7次調査の結果から当区画内の南東隅の状況がかなり判明した。掘立柱建物は区画溝SD1940から10m以上離れて建てられており、これは他の区画溝周辺のものと同様の状況を示している。また、南の方形区画で実施した先の第69次調査では、計画的な造営は奈良時代後期に開始されたことが判明しているが、当調査でもそれを裏付ける結果となった。

64-7次



64-2次





第26図 第64-2・7次出土遺物 S D 1930 ; 1~17、S K 4630 : 18~22、S K 4660 ; 23

B その他の調査

第64-1次調査 6 A C O - H (株式会社トーカイ個人住宅の新築)

斎宮小学校の南東に位置し、参宮街道に面する東西約12m、南北約70mの南北に細長い宅地で、幅2mのトレンチを南北に入れ、そこから東西方向に3ヶ所トレンチを延ばした。調査面積は143m²である。検出された遺構は大半が現代の搅乱、井戸、便所によって破壊されていて、鎌倉時代の東西溝SD4674を検出しただけである。

第64-3次調査 6 A D D - A (山路 農業用倉庫新築)

宮城北部の坂本集落南部の畠地で、東西16.5m、南北8.5mの調査区を設定し、約140m²の調査を実施した。検出した主な遺構としては、奈良時代の3間×3間の総柱建物3棟(SB4675～4677)、調査区南端で北側柱列を検出したSB4679、東西溝SD4678を検出した。SB4675はSB4676より新しいもので、SB4676の柱間はいずれも1.3～1.4mで、SB4677のはうは東西の柱間が1.8mとやや長い。柱通りの方向はSB4675がN 4°E、SB4676がN 2°E、SB4677はE 4°Sと多少の振れはあるものの大略南北軸にのる格好になっている。注目されるのはSB4675の柱掘形で2柱穴分を細長くいったん掘り下げた後、それぞれの柱穴を更に深く掘り下げるという珍しいものである。斎宮跡では勿論初例で、古里地区の今年度の第68次調査でも同じ掘形を持つ総柱建物が検出されている。

第64-4次調査 6 A G R - N (丸山 個人住宅の改築)

史跡指定範囲の東南端、中町地区内の旧参宮街道北側の町並みの中に位置し、6.4m×2.5mのトレンチを設定し、約16m²の調査を実施した。検出した主な遺構には平安時代後期の東西溝SD4680、平安時代末期の土塙2(SK4681・4682)、室町時代以降の東西溝SD4683がある。東西溝SD4680は、調査区北端で検出した東西溝で、北側は調査区外となるため幅は不明だが、深さが1m前後のしっかりしたものである。埋土からは一部平安時代前期のものも含むが、主に平安時代中期～後一期の遺物と共にミニチュアの土師器甕1点が出土している。

第64-5次調査 6 A C M - O (斎宮小学校校地整備)

申請地は斎宮小学校敷地の北西部に位置する。幅2.5m、長さ60mのトレンチを設定し、約150m²にわたり調査を実施した。検出した主な遺構には、奈良時代の竪穴住居SB4688、土塙SK4687、斜行溝SD3802、L字状に折れ曲る溝SD4684・4685、平安時代末期の南北溝4(SD3382・3386・3389・4690)、斜行溝SD4686がある。奈良時代の遺構のうちSD3802は第53～14次調査で検出した斜行溝に続く溝と考えられ埋土から奈良時代中期の土師器甕を多量に出土した。またL字状に曲る溝SD4684・4685はSD3802より新しい。調査区東部で検出されたSK4689・4691は遺物がほとんど出土せず時期をきめることはできなかったが、SK4689から綠釉陶器が1点出土している。

第64—6次調査 6ACK (竹川自治会 自治会広場の新設)

申請地は竹川墓地と近鉄線の間に位置し、幅2m、長さ20m前後のトレンチを2本南北にいれ、約76m²にわたり調査を実施した。検出した遺構はほとんどなく、擾乱や近現代の溝だけである。出土した遺物は灰釉陶器数点が出土したのみである。

第64—8次調査 6AGR-J (山下 個人住宅の増改築)

史跡指定範囲の東南端、中町地区内の旧参宮街道北側の町並みの中で、23m×2.5mのトレンチを設定し、約57m²にわたり調査を実施した。検出した主な遺構には、調査区中央の室町時代のSD4692がある。幅1.6mの断面V字形を呈する、深い東西溝で、何らかの区画のための溝であるかも知れない。出土遺物は、遺構の状況に対応して、近世～近代のものがほとんどで、平安時代の土師器が若干混じるのみである。

第64—9次調査 6ADQ-M (町道側溝新設)

近鉄斎宮駅と旧参宮街道とを結ぶ町道の斎宮駅側に位置し、南北45m、幅0.7mの調査区を設定し、約45m²の調査を実施した。検出した遺構は、調査区南で土塁2基 (SK4693・4694) を検出した。南北2～3m、深さ0.6～0.8mで遺物は出土していないが、西側の駐車場にともなう調査（第12—4次）でもこの土塁の近辺に室町時代の大土塁があることから、同時期のものと考えられる。

第64—10次調査 6ACF-A (樋口 農業用倉庫の新築)

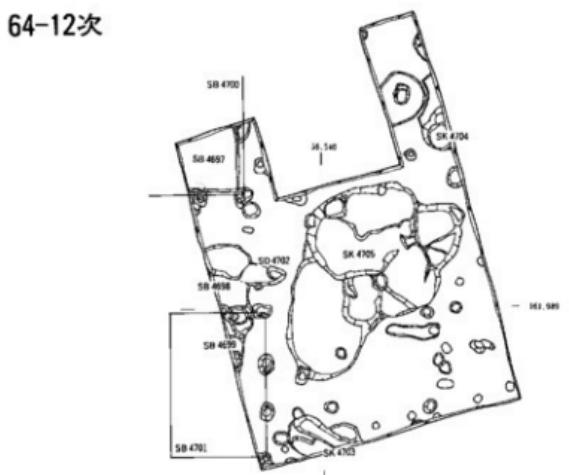
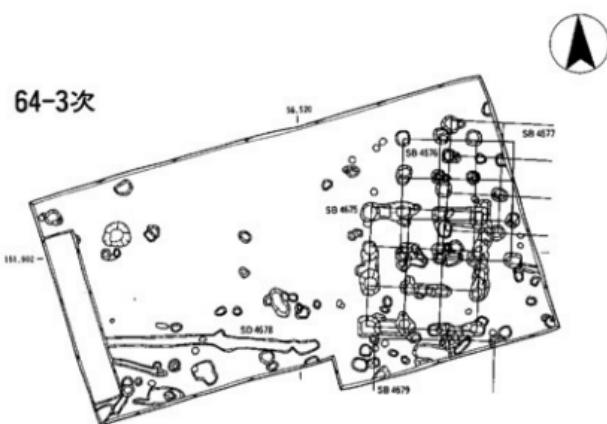
当該申請地は東裏地区的県道南藤原・竹川線の東に位置する。4m×10mの東西トレンチを設定し、約40m²にわたり調査を実施した。検出した遺構には、堀立柱建物SB4695がある。SB4695の規模は東西が2間、南北は調査面積が狭く不明である。柱穴内より土師器の壺の小片1片しか出土してなく建物の時期は断定できないが、周辺の調査から考えておそらく、奈良時代のものと考えられる。

第64—11次調査 6ACM-O (斎宮小学校建設委員会 飼育舎、観察池の設置)

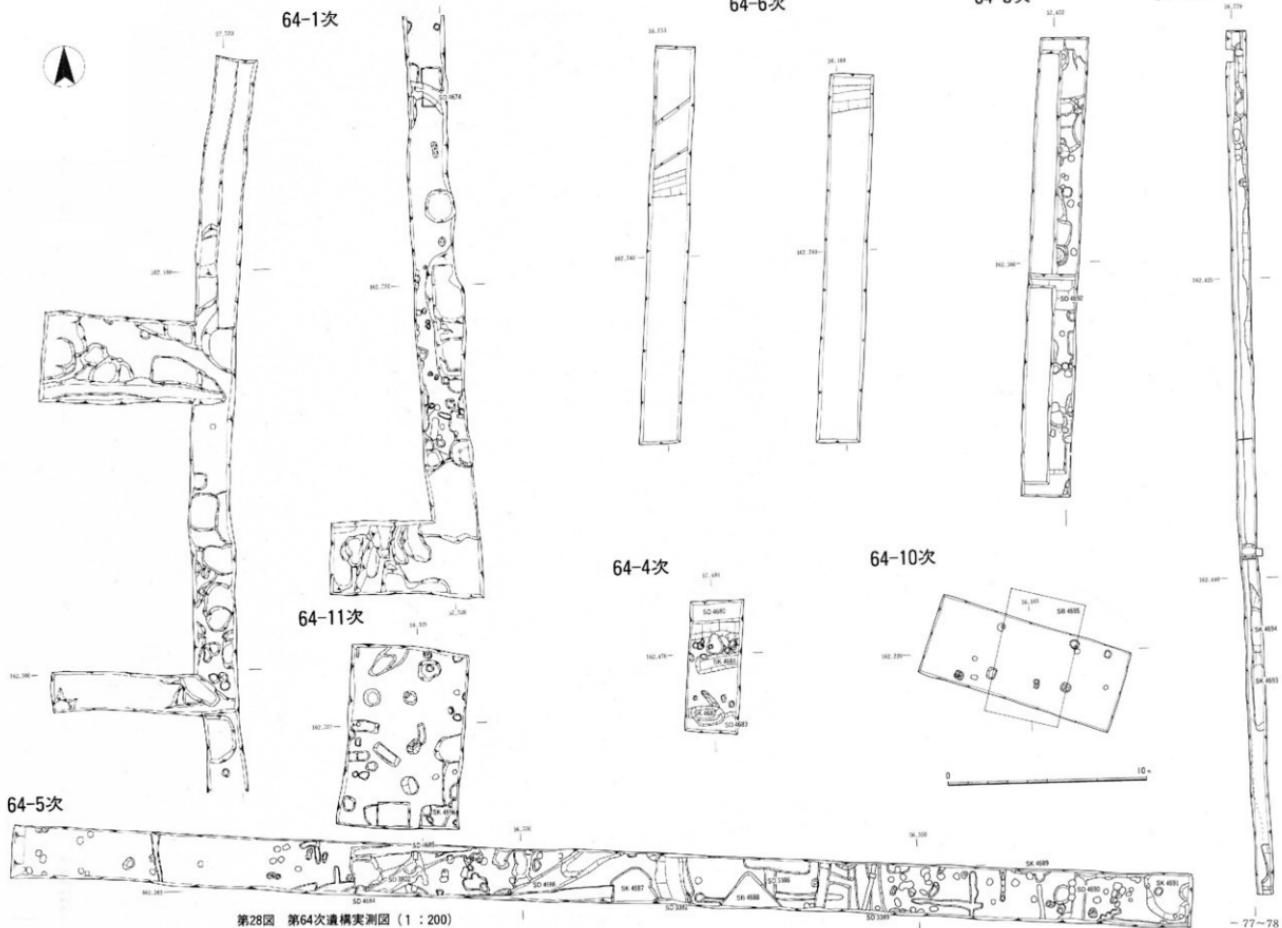
斎宮小学校敷地の北西部に位置し、6m×9mの調査区を設定し約54m²にわたり調査を実施した。検出した遺構としては奈良時代の土塁SK4696を調査区南東隅で検出しただけで、ほかは近現代の擾乱である。また遺物はこの土塁に伴うもの以外はほとんど出土しなかった。

第64—12次調査 6ADE-B (江崎 個人住宅の新築)

当該申請地は宮域中央の篠林地区と西部の塚山地区とを分ける字界にあたる南北道に面しており、104m²にわたり調査を実施した。検出した主な遺構には奈良時代の竪穴住居SB4697～4699、堀立柱建物SB4700・4701、土塁SK4705がある。平安時代のものは前期、中期の遺構ではなく、第33次調査で検出した末期の溝SX1819や土塁SK4702～4704を検出しただけである。特殊な遺物として綠釉陶器1点、円面鏡1点が出土している。



第27図 第64次遺構実測図（1：200）



第28図 第64次造構実測図 (1 : 200)

VIII 第2次環境整備事業

史跡斎宮跡の初めての環境整備事業は、史跡指定4年目に当る昭和57年度において、伝承地『斎王の森』を囲む地域で実施した。

この整備事業は史跡を訪れる見学者が年間一万人近くを数えるようになるなかで、不定期にみられる発掘現場と、常設の展示室に限られていた見学場所の現状から、地元の人々に古くから斎宮の伝承地として親しまれてきた『斎王の森』を取り囲みながら、内外の見学者と、地元の人々の憩いの場として、活用しようと実施されたものであった。

第1次整備事業の基本的な考え方には、発掘調査に基づき重要な遺構を復元的に表示しながら、芝生広場、砂利広場、遊歩道などを設け、同時に『斎王の森』のイメージアップを図ることにあった。

遺構の復元的表示については、平安時代の掘立柱建物2、井戸1、道路および側溝2を部分的に復元した。

第2次環境整備事業

この史跡公園は、史跡全体からみれば『斎王の森』を囲む約5,000m²の小さな範囲ではあったが、斎宮跡における唯一の史跡公園として、地元の人々の散策に、また見学者の学習と休息の場として活用され、昭和58年度からスタートした『斎王まつり』のメイン会場としても使われ、大方の好評を得てきたところである。今回の整備に当っては、北や東に公有地が広がったことをうけて、手狭な芝生広場を東に拡張すると共に、大型車の駐車に対応できるように町道の北へも砂利広場を新設することにした。

遺構復元については、事前に発掘調査は実施したが（第65次調査）、今回は東西方向の道路跡と溝を東に延長するに留めた。

1. 遺構復元

発掘調査で検出した溝は、道路跡の北側側溝で、第1次整備のそれの東への延長であるため、整備技法上は前回のものを踏襲した。

道路面は現町道に揃え、現道との境には花崗岩平石を並べサツキを植栽し、道路跡の部分に細砂を敷きつめた。溝との境にはレンガ縁石を施設した。

側溝については、幅3m、深さ平均40cmとし法面勾配を1割5分としたので、底幅は1.8mとなる。溝法面は、芝生を張り、底面は碎石を敷きつめた。

尚、散策道と道路側溝との接点には、回遊性を考慮して遺構とは無関係に木製橋を渡した。

2. その他の施設

(1) 芝生広場

既存の芝生広場に東接しておよそ1,360m²拡張し、見学者および地元の人々の利用に供した。

北及び東には幅1.5mの玉石を縁に回した砂利敷歩道をめぐらし、東側で一部幅を広げ、擬木ベンチを2ヶ所設置した。

樹木の植栽については、既設の整備との調和を考えながら、広場としての利用も考慮して最小限に留めた。このうち列植したのはサツキとアラカシで、前者は、水田及び菖蒲園と接する東側の肩部と町道に接する南側に植えた。後者は、北側民地との境に隠しの意図もあって、比較的密に並べて植えた。

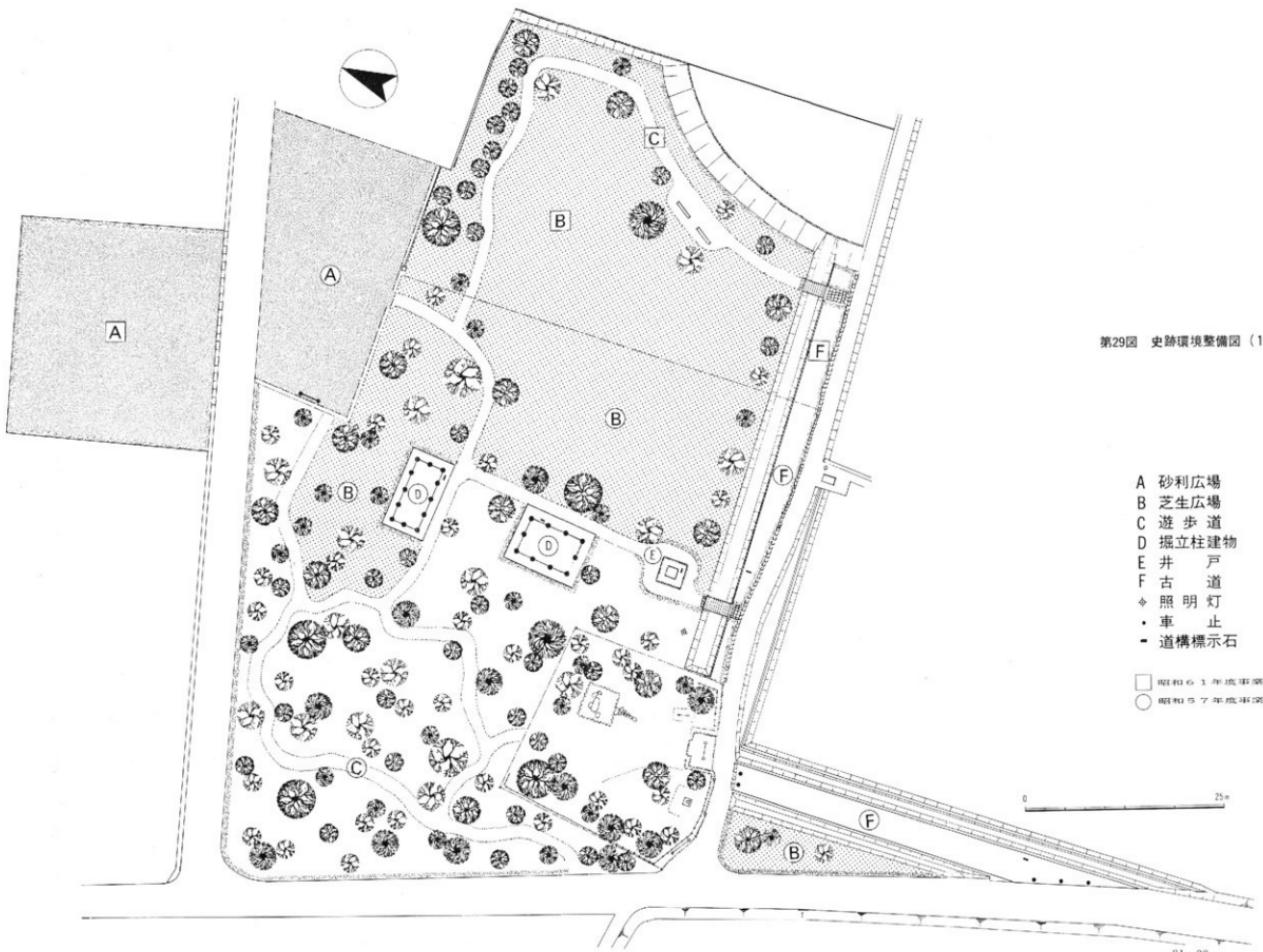
東側の未買収水田及び菖蒲園とはおよそ0.6mの段差があるが、斜面も張芝とし、境には低い擬木で土がかえをした。

その他、シイ、サクラ、ウメ、ヤマモモ、クスを周辺部に配した。

(2) 砂利広場

道路をはさんで、既設の砂利広場の北側に700m²の砂利広場を新設した。山土でレベルをそろえた後、上面には切込み碎石を敷き、縁辺部にはサツキを列植した。

第29図 史跡環境整備図 (1 : 500)



IX 調査事務所要覧

I 調査概要

(1) 調査事業 5 地区 7,317m²

ア 計画発掘調査 7 地区

第65次調査 塚山、楽殿地区 1,334m²

第66次調査 東加座地区 1,748m²

第67次調査 古里地区 1,350m²

第68次調査 古里地区 1,485m²

第69次調査 東加座地区 1,400m²

イ 緊急発掘調査 (個人住宅新築等)

第64-1~12次調査 1,845m²

(2) 環境整備事業

ア 第2次史跡環境整備事業

施工内容 (ア) 遺構復元 (古道路)

(イ) その他 芝生広場

砂利広場

遊歩道

施工期間 昭和62年2月14日

~昭和62年3月31日

施工場所 斎王の森周辺地区

施工面積 2,614 m²

(3) 普及事業

ア 現地説明会の開催

(ア) 第65次発掘調査現地説明会

日 時 昭和61年6月8日(日)11時

場 所 明和町斎宮塚山・楽殿地内

報 告 田阪 仁、泉 雄二

参加人員 約 350名

(イ) 第66次発掘調査現地説明会

日 時 昭和61年9月7日(日)

10時30分

場 所 明和町斎宮東加座地内

報 告 田阪 仁

参加人員 約 230名

(ウ) 第67次発掘調査現地説明会

日 時 昭和61年11月2日(日)11時

場 所 明和町竹川古里地内

報 告 杉谷政樹

参加人員 約 180名

(エ) 第68次・69次発掘調査現地説明会

日 時 昭和62年2月1日(日)10時

場 所 明和町竹川古里地内

斎宮東加座地内

報 告 泉 雄二、杉谷政樹

参加人員 約 230名

イ 調査報告会

(ア) 6月4日 第241回建設技術講習会

山 沢 義 貴

(イ) 10月12日 近畿地方埋蔵文化財

担当者研究会

泉 雄二

(ウ) 2月21日 四日市歴史ゼミナール

山 沢 義 貴

ウ 調査報告等

「斎宮跡発掘レポート」

解説すすむ幻の宮」

『歴史読本62年3月号』新人物往来社

杉 谷 政 樹

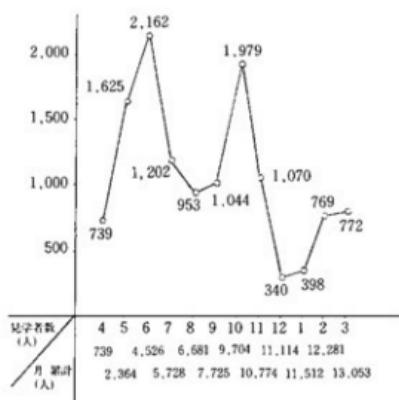
「斎宮案内記(その一)、(その二)」

『あすの三重 No.63・65』

三重社会経済研究センター

田 阪 仁

エ 資料展示室見学者数



オ その他

斎宮跡講演会

日 時 昭和61年11月2日

午後1時30分

場 所 明和町中央公民館

演 題 「伊勢神宮の祭祀と斎宮」

講 師 学習院女子短期大学講師

吉野 裕子氏

Ⅱ 予 算

斎宮跡保存対策費 83,298千円

(単位:千円)

区分 事業名	歳 出	財 源 内 訳 點 費 国 費	備 考
発掘調査費	37,622	19,622 18,000	内 666は町への補助金
史跡公有化補助金	36,000	36,000	公有化面積約1.16ha
保存啓発事業	500	500	-
維持管理	2,176	2,176	-
環境整備	7,000	3,500 3,500	扇王の森
計	83,298	61,798 21,500	

Ⅲ 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

(昭和43年4月1日)
(教育委員会規則 第6号)

最終改正 昭和54年3月31日

教育委員会規則第6号

第三章 出先機関の組織

(教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等)

第12条 事務局の事務 (県立学校関係事務を除く。) を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3. 斎宮跡調査事務所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

(分掌事務)

第14条 3. 斎宮跡調査事務所においては

次に掲げる事務をつかさどる。

一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。

二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。

三、その他斎宮跡に関すること。

附則 (昭和54年3月21日、教育委員会規則第6号抄)

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

Ⅳ 職 員

職	氏 名
所 長	横山洋平
主 幹	山沢義貴
主 事	田阪仁
主 事	杉谷政樹
技 師	杉谷雄二
調査補助員	泉服芳人
事務補助員	刀根やよい
タ	坂真弓美
タ	松田早苗
タ	若林真登

Ⅴ そ の 他

(1) 斎宮跡調査指導委員

○ 設置要綱

1. 設 置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期すため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員(以下「委員」という。)を置く。

2. 所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

(1) 当史跡の遺構の調査、検討に関すること。

(2) 当史跡の遺物の調査、検討に関する

こと。

- (3) 当史跡の文献の調査、検討に関すること。
- (4) 当史跡の環境整備の計画、検討に関すること。
- (5) その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に関すること。

3. 定 数 等

- (1) 委員の定数は、10人以内とする。
- (2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学などに関し専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱する。

4. 任 期

任務が完了するまでの間とする。

5. 会 議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が召集する。

6. 庶 務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務局文化課において処理する。

7. そ の 他

この要綱に定めるものほか、委員に関し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

附 則

この事項は、昭和54年10月19日から施行する

○ 調査指導委員

氏 名	専 攻	現 職
福山敏男	建築史	元京都大学教授
服部貞藏	考古学	三重大学名誉教授
久徳高文	国文学	椎山女学園大学名誉教授
坪井清足	考古学	(国)文化財保護審議会専門委員
門脇祐二	古代史	京都府立大学学長
樋崎彰一	考古学	名古屋大学教授
早川庄八	古代史	名古屋大学教授
渡辺 寛	古代史	県立学館大学助教授
北原理雄	都市工学	三重大学助教授

○ 委員会の開催

1. 第1回斎宮跡調査指導委員会

日時 昭和61年5月23日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

吉田山会館(津市)

指導内容

第64・65次調査現地指導

昭和60年度事業結果について

昭和61年度事業計画について

斎宮歴史博物館(仮称)について

2. 第2回斎宮跡調査指導委員会

日時 昭和61年7月31日

場所 吉田山会館(津市)

指導内容

斎宮歴史博物館(仮称)について

3. 第3回斎宮跡調査指導委員会

日時 昭和62年1月22日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

明和町役場農構センター会議室

指導内容

昭和61年度発掘調査等について

昭和62年度発掘調査について

斎宮歴史博物館(仮称)について

昭和61年度所内日誌

自 昭和61年4月1日
至 昭和62年3月31日

月 日	内 容
4月1日	県人事異動により新所長就任
✿	三重県教育委員会文化課に博物館建設班を設置
25日	斎宮歴史博物館（仮称）に関する協議（三重県教育委員会・明和町）……明和町役場
28日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場農構センター
5月7日	斎宮歴史博物館（仮称）に関する協議（三重県教育委員会・明和町）……三重県合同ビル
✿	第64-1次発掘調査開始（住宅開発）
✿	第65次発掘調査開始（塚山・楽殿地区）
13日	松阪地方県民局地方連絡会議で報告（所長）
15日	文化振興・斎宮跡保存促進三重県議員連盟視察（葵祭）
19日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町中央公民館
20日	第64-1次発掘調査完了
23日	斎宮跡調査指導委員会……調査事務所・吉田山会館
✿	第64-2次発掘調査開始（盛土及び事務所駐車場）
6月8日	第65次発掘調査 現地説明会（田坂仁・泉雄二報告）
✿	斎王まつり
13日	第64-2次発掘調査完了
16日	三重県文化審議会……吉田山会館
✿	第64-3次発掘調査開始（農業用倉庫）
✿	昭和61年度埋蔵文化財発掘技術者研修 調査指導（寺垣内遺跡、7月～9月）
19日	三重県教育長に陳情（明和町及び町議会、斎宮跡に県立博物館の設置を要望）
7月1日	斎宮歴史博物館（仮称）に関する協議（三重県教育委員会・明和町）……明和町役場
4日	第64-3次発掘調査完了
8日	第64-4次発掘調査開始（個人住宅）
11日	第65次発掘調査完了
✿	文化振興・斎宮跡保存促進三重県議員連盟総会……県議会
✿	第64-5次発掘調査開始（斎宮小学校校庭整備）
12日	第64-4次発掘調査完了
15日	第64-5次発掘調査完了
✿	第66次発掘調査開始（東加座地区）
21日	資料展示室見学者総数70,000人となる
30日	斎宮跡体験発掘（保存啓発事業、大淀小学校6年、30～31日）

月 日	内 容
7月31日	斎宮跡調査指導委員会……吉田山会館
9月3日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場農構センター
7日	第66次発掘調査 現地説明会(田阪仁報告)
10日	斎宮歴史博物館（仮称）に関する協議（三重県教育委員会・明和町）……県庁
19日	三重県議会（第3回定例会）で斎宮歴史博物館（仮称）について一般質問
29日	第67次発掘調査開始（古里地区）
30日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場農構センター
10月3日	斎宮歴史博物館（仮称）に関する協議（三重県教育委員会・明和町）……調査事務所
4日	「古代文化・馬形の謎」特別展に斎宮跡出土品展示……根岸競馬記念公園（馬の博物館）
タ	「よみがえる古代の文字」特別展に斎宮跡出土品展示……向日市文化資料館
13日	三重県議会教育警察常任委員会視察
15日	第66次発掘調査完了
16日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場農構センター
17日	明和町議会斎宮跡特別委員会視察
18日	斎宮歴史博物館（仮称）展示設計プロポーザル審査委員会……県庁
20日	第64-6次発掘調査開始（竹川地区広場）
22日	第64-6次発掘調査完了
30日	大規模遺跡五県会議……福井県朝倉氏遺跡資料館
11月1日	「土師器とその窯」倉陵祭展に斎宮跡出土品展示……皇學館大学
2日	第67次発掘調査 現地説明会（杉谷政樹報告）
タ	斎宮跡講演会「伊勢神宮の祭祀と斎宮」學習院女子短期大学講師 吉野裕子氏……明和町中央公民館
7日	斎宮歴史博物館（仮称）建設にかかる関係課長会議……勤労者福祉会館
9日	斎宮跡保存啓発事業 史跡先進地視察（明和町・町議会・地権者代表）……滋賀県希望ヶ丘公園・金剛輪寺
タ	第67次発掘調査完了
13日	第64-7次発掘調査開始（テニスコート等）
18日	第68次発掘調査開始（古里地区）
26日	史跡環境整備担当者会議……宮城県多賀城跡調査研究所
タ	第64-8次発掘調査開始（個人住宅）
27日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町中央公民館
28日	斎宮歴史博物館（仮称）建築設計プロポーザル審査委員会……県庁
12月1日	第64-8次調査完了
2日	斎宮歴史博物館（仮称）建設指導委員会……勤労者福祉会館

月 日	内 容
12月11日	第69次発掘調査開始（東加平地区）
17日	斎宮歴史博物館（仮称）建設に関する協議（三重県教育委員会・明和町）……県庁
タ	第64-7次発掘調査完了
1月 9日	斎宮歴史博物館（仮称）建設指導委員会……勤労者福祉会館
13日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場農構センター
20日	斎宮歴史博物館（仮称）に関する協議（三重県教育委員会・明和町）……明和町役場
22日	斎宮跡調査指導委員会……明和町農構センター
26日	第64-9次発掘調査開始（町道側溝）
29日	三重県埋蔵文化財展に斎宮跡出土品展示……津南郊ショッピングセンター、サンバレー
タ	第64-9次発掘調査完了
30日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
2月 1日	第68次・第69次発掘調査 現地説明会（杉谷政樹・泉雄二報告）
14日	昭和61年度史跡環境整備事業（斎王の森地区）開始
タ	斎宮歴史博物館（仮称）に関する協議（三重県教育委員会・明和町）……明和町役場
16日	第64-10次発掘調査開始（農業用倉庫）
17日	第64-10次発掘調査完了
20日	斎宮跡地権者の会（環境整備小委員会）……明和町中央公民館
23日	第64-11次発掘調査開始（斎宮小学校、飼育舎・観察池）
27日	第68次発掘調査完了
28日	第64-11次発掘調査完了
3月 4日	調査作業員見学旅行（大阪）
8日	第69次発掘調査完了
9日	第64-12次発掘調査開始（個人住宅）
24日	斎宮歴史博物館（仮称）建設指導委員会……吉田山会館
28日	第64-12次発掘調査完了
31日	昭和61年度史跡環境整備事業（斎王の森地区）完了

掘立柱建物・塀一覧表

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		

第65-1次調査 (6 A C C - M)

4318	3×3	N 13° E	4.5	4.2	1.5	1.4	奈良前	
4319	3×3	N 4° E	4.8	4.2	1.6	1.4	夕	
4320	(3)×-	E 13° S	-	-	1.9	-	夕	

第65-2次調査 (6 A E G - S)

4336	(2)×2	N 0°	-	4.2	-	2.1	奈良後	
4333	3×2	E 13° S	6.3	4.2	2.1	2.1	平安後	
4344	3×2	E 8° S	6.9	4.6	2.3	2.3	夕	

第66次調査 (6 A G G - C)

4370	3×2	N 3° W	5.7	3.8	1.9	1.9	奈良後	
4388	3×2	E 17° N	6.0	4.0	2.0	2.0	夕	
4390	3×2	N 16° W	5.4	3.9	1.8	1.95	夕	
4399	3×3	E 7° N	6.3	6.6	2.1	2.3	夕	北面廻、廂柱間2.0m拡張して2.6m
4400	3×2	E 8° N	5.4	3.6	1.8	1.8	夕	
4410	4×2	E 5° N	8.2	4.0	2.05	2.0	夕	溝状掘形
4371	2×2	N 5° E	4.7	3.8	不揃	不揃	平安初	総柱建物 桁行柱間北から 2.3m、2.4m 梁行柱間西から 2.1m、1.7m
4386	3×2	E 10° N	6.5	4.2	不揃	2.1	夕	桁行柱間西から2.2m、2.1m、2.2m
4389	3×3	N 9° W	6.0	6.4	不揃	2.0	夕	東面廻、廂柱間 2.4 m 桁行柱間北から2.1m、1.7m、2.2m
4402	3×2	E 5° N	5.7	4.0	不揃	2.0	夕	桁行柱間西から2.0m、2.0m、1.7m
4406	3×2	N 4° W	3.6	3.2	不揃	不揃	夕	総柱建物 桁行柱間北から1.1m、1.3m、1.2m 梁行柱間西から 1.5m、1.7m
4408	3×2	N 1° W	5.5	4.0	2.0	2.0	夕	北面廻、廂柱間 1.5 m
4409	3×2	N 3° E	5.7	3.6	1.9	1.8	夕	
4374	3×2	E 8° N	5.7	3.5	不揃	不揃	平安前 I	桁行柱間西から2.2m、1.8m、1.7m 梁行柱間北から 1.9m、1.6m
4377	3×2	N 3° E	6.2	4.2	不揃	2.1	夕	桁行柱間北から2.2m、1.8m、2.2m SB4377より古い
4378	3×2	N 1° E	5.3	3.7	不揃	不揃	夕	桁行柱間北から 1.9m、1.9m、1.5m 梁行柱間西から 1.9m、1.8m SB4381より古い
4380	3×2	E 4° N	5.5	4.0	不揃	2.0	夕	桁行柱間西から1.8m、1.8m、1.9m

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		
4381	3×2	E 3°N	5.4	3.7	1.8	不揃	平安前 I	梁行柱間北から 1.9m、1.8m
4373	3×2	E 1°N	5.5	3.4	不揃	不揃	平安前 II	桁行柱間西から 2.1m、1.8m、1.6m 梁行柱間北から 1.8m、1.6m
4384	4×2	E 7°N	7.5	3.9	1.9	1.95	♦	東面廻、廻柱間 1.8m
4404	3×2	E 0°	5.7	4.0	不揃	2.0	♦	桁行柱間西から 1.7m、1.9m、2.1m
4405	3×2	E 1°N	5.1	3.7	不揃	1.85	♦	桁行柱間西から 1.6m、1.7m、1.8m
4379	3×2	E 7°N	5.4	3.6	不揃	1.8	平安後 I	桁行柱間西から 1.7m、1.8m、1.9m
4357	4×(2)	N 3°E	7.2	—	1.8	2.0	不 明	南面廻、廻柱間 1.8m
4375	7	E 0°	12.5	—	不揃	—	♦	廻、柱間 1.5~2.0m

第67次調査 (6 A B F)

4421	(5)×(2)	N 40°E	—	—	2.1	2.1	奈良後	
4422	4×2	N 42°E	6.8	4.4	1.7	2.2	♦	
4423	4×3	E 22°S	8.4	4.7	2.1	1.9	♦	
4429	2×2	N 38°E	3.8	3.0	1.9	1.5	♦	第68次調査で検出 総柱建物
4434	3×2	E 45°S	6.6	4.4	2.2	2.2	♦	
4453	2×2	N 46°E	4.6	3.6	2.3	1.8	♦	
4454	3×2	N 43°E	4.8	3.4	1.6	1.7	♦	
4467	2×2	E 23°S	3.8	3.8	1.9	1.9	♦	
4476	(5)×2	E 30°S	—	4.8	2.1	2.4	♦	
4420	3×(2)	E 30°S	5.4	—	1.8	1.9	鎌倉前半	
4430	(4)×(2)	E 16°S	—	—	2.1	1.85	♦	第68次調査で検出 総柱建物、柱穴内に川原石
4473	(2)×3	E 15°S	—	5.1	1.8	1.8	♦	
4474	(3)×—	N 15°E	—	—	1.7	—	♦	
4475	3×(2)	N 6°E	6.0	—	2.0	2.2	♦	
4455	5	E 15°S	10.5	—	2.1	—	♦	

第68次調査 (6 A B F)

4517	3×2	N 12°E	4.8	3.4	1.6	1.7	奈良前	
4560	3×3	N 41°E	4.6	4.3	1.53	1.43	♦	総柱建物、溝もち
4561	—×—	—	—	—	—	—	♦	溝もち
4496	(3)×—	E 21°S	—	—	2.1	—	奈良中	
4512	3×2	N 7°E	5.7	4.0	1.9	2.0	♦	
4423	4×3	E 22°S	8.4	4.7	2.1	1.9	奈良後	第67次調査で検出
4532	(2)×2	N 12°E	—	4.0	2.5	2.0	♦	
4430	6×6	E 16°S	12.6	10.7	2.1	1.85	鎌倉前半	第67次調査で検出 総柱建物、柱穴内に川原石
4513	(2)×2	N 4°E	—	3.3	2.2	1.65	♦	柱穴内に川原石
4514	3×2	E 15°S	6.6	3.2	2.2	1.6	♦	総柱建物、柱穴内に川原石
4520	4×3	N 15°E	6.4	5.7	1.6	1.9	♦	総柱建物、柱穴内に川原石

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		
4521	4 × 4	E 16° S	7.6	6.8	1.9	1.7	鎌倉前半	總柱建物、柱穴内に川原石 南東隅に SK 4522 を伴う
4529	3 × 2	N 3° E	5.0	4.0	1.66	2.0	タ	
4547	3 × 2	N 17° E	4.0	3.0	1.33	1.5	タ	
4548	(2) × 3	N 16° E	—	4.0	2.0	2.0	タ	
4515	4	E 13° S	7.7		1.92		タ	屏
4533	3	E 17° S	5.4		1.8		タ	屏
4554	3	N 66° E	4.8		1.6		鎌倉後半	屏

第69次調査 (6 A G M - E - H)

4570	(3) × (2)	E 6° N	—	—	2.0	2.0	奈良後	
4573	(3) × 2	E 3° N	—	4.0	2.0	2.0	タ	
4590	(3) × 3	E 4° N	—	3.4	2.0	1.7	タ	南面廂、廂柱間 2.0m
4591	2 × 2	E 6° N	3.6	3.2	1.8	1.6	タ	
4592	(3) × 3	N 4° W	—	3.6	1.6	1.2	タ	
4574	3 × 3	E 4° N	6.0	6.0	2.0	2.0	平安初	北面廂、廂柱間 2.0m
4575	3 × 2	E 6° N	6.0	4.2	2.0	2.1	タ	
4600	3 × 2	E 3° N	6.0	3.6	2.0	1.8	タ	
4611	3 × 2	E 4° N	5.7	3.8	1.9	1.9	タ	
4586	— × 2	E 5° N	—	4.0	—	2.0	平安前 I	
4587	— × 2	E 6° N	—	4.4	—	2.2	タ	
4588	3 × 2	N 5° W	6.0	4.0	2.0	2.0	タ	
4589	3 × 2	E 6° N	5.7	3.8	1.9	1.9	タ	
4593	3 × 2	E 5° N	5.1	3.6	1.7	1.8	タ	
4598	— × 2	E 4° N	—	4.0	—	2.0	タ	
4599	3 × 2	E 5° N	5.7	4.0	1.9	2.0	タ	
4610	3 × 2	N 3° W	6.0	2.0	2.0	2.0	タ	
4609	3 × 2	E 1° N	5.4	3.6	1.8	1.8	タ	
366	3 × 2	E 5° N	5.7	4.0	1.9	2.0	タ	第 9 - 6 次調査で検出
367	3 × 2	E 2° N	4.8	3.2	1.6	1.6	タ	第 9 - 6 次調査で検出
4601	3 × 3	N 1° E	5.7	5.5	1.9	1.9	平安中	東面廂、廂柱間 1.7m
4596	(2) × 2	E 0°	—	4.4	2.2	2.2	平安後	
4597	(2) × 2	E 3° N	—	4.4	2.2	2.2	タ	

第64-2次調査 (6 A G L - F)

4625	(3) × 2	E 4° N	—	4.2	2.2	2.1	奈良後	S B 4650 と柱通りを揃える
4620	(2) × 2	E 2° N	—	4.2	2.1	2.1	平安初	S B 4640 と柱通りを揃える
4623	3 × 2	N 3° W	5.7	4.0	1.9	2.0	平安前	
4624	(2) × 2	E 0°	—	4.4	2.2	2.2	タ	
4626	(2) × 2	E 0°	—	4.0	—	2.0	タ	
4621	— × 2	E 6° S	—	4.0	—	2.0	平安中	
4622	— × 3	N 3° W	—	6.0	—	2.0	平安後	

第64-3次調査 (6 ADD - A)

4675	3 × 3	N 4° E	4.2	3.9	1.4	1.3	奈良前	總柱建物
4676	3 × 3	N 2° E	4.2	3.9	1.4	1.3	タ	總柱建物

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		
4677	(2)×3	E 4° S	—	3.9	1.8	1.3	奈良前	純柱建物
4679	3×—	E 2° S	4.2	—	1.4	—	々	

第64-7次調査 (6 A G 1-G)

4650	4×2	E 4° N	8.4	4.2	2.1	2.1	奈良後	SB4653・4658より古い
4640	4×2	E 2° N	8.4	4.2	2.1	2.1	平安初	SB4639より古い
4637	3×2	E 0°	5.7	3.8	1.9	1.9	平安前Ⅰ	
4639	3×2	E 2° N	6.0	4.4	2.0	2.2	々	SB4640より新しい
4645	(3)×2	E 4° N	—	4.2	2.1	2.0	々	SB4647より新しい
4647	(3)×2	E 2° N	—	3.8	1.9	1.9	々	
4657	3×2	E 4° N	6.3	4.2	2.1	2.1	々	
4636	3×2	E 3° N	5.7	3.8	1.9	1.9	平安前Ⅱ	SB4637・4638・4650より新しい
4638	3×2	E 3° N	5.7	3.8	1.9	1.9	々	
4633	3×2	N 2° W	6.3	4.2	2.1	2.1	平安前	
4641	3×2	E 1° N	6.0	4.0	2.0	2.0	々	
4652	3×2	E 2° N	6.0	4.4	2.0	2.2	々	SB4637より新しい
4634	3×2	E 3° S	5.7	3.8	1.9	1.9	平安中	
4646	(2)×2	E 3° S	—	4.2	2.1	2.1	々	SB4647より新しい
4653	3×2	E 9° N	6.0	4.2	2.0	2.1	平安後	SB4638・4650より新しい
4658	3×2	E 4° N	6.3	4.2	2.1	2.1	々	SB4650より新しい

第64-10次調査 (6 A C F - A)

4695	(3)×2	N 4° E	—	3.8	2.1	1.9	奈 良	
------	-------	--------	---	-----	-----	-----	-----	--

第64-12次調査 (6 A D E - B)

4700	(2)×(2)	N 0°	—	—	2.1	1.7	奈 良	
4701	3×(2)	N 0°	5.1	—	1.7	1.7	々	

豎穴住居一覧表

36

S B	規模 (m)	長軸方向	深さ cm	柱穴	カマド	時 期	備 考
第65-1次調査 (6 A C C - M)							
4312	2.0×2.0	E 18° S	15		東 壁	奈良後	SX4310より新しい
第65-2次調査 (6 A E G - S)							
4341	2.4× -	E 0° S	30		東 壁	奈良後	
4342	4.2×3.3	E 4° S	30		東 壁	*	
第66次調査 (6 A G G - C)							
4391	3.1× -	N 5° W	30		東 壁	奈良後	
4392	3.2×3.0	E 12° N	33		東 壁	*	
4393	3.1× -	4°	18			*	
4394	3.0×2.9	N 9° E	28		東 壁	*	SB4393より新しい
4395	3.5×2.8	N 0° E	31		東北隅	*	
4396	3.8×3.0	E 6° S	25		北 壁	*	
第67次調査 (6 A B F)							
4432	4.8×3.3	E 45° S	20		北 壁	飛鳥後	周溝あり
4466	5.7×5.5	N 38° E	10	○		*	
4426	3.6×3.6	E 37° S	20		東 壁	奈良前	煙道あり、SB4427より新しい
4427	5.6×5.3	N 44° E	15		北 壁	*	
4433	4.1×3.6	N 22° E	20		東 壁	*	
4435	3.6×2.9	N 34° E	40		北 壁	*	
4443	-×3.1	N 31° E	15			*	
4444	3.4×3.1	N 22° E	30			*	SB4443-4445-4448より新しい
4445	4.9×4.2	N 41° E	30		東 壁	*	
4447	3.3×2.5	N 35° E	20		*	*	
4448	3.2× -	N 45° E	30			*	
4451	-× -	—	20		北 壁	*	煙道あり
4458	3.8×3.4	E 12° S	20			*	SB4459より新しい
4459	5.5×5.3	E 25° S	20		西 壁	*	SB4460より新しい
4460	5.3× -	N 32° E	30			*	
4462	3.7× -	—	30			*	
4463	4.3×4.2	N 32° E	30			*	
4452	3.6×3.5	N 29° W	25		北 壁	奈良中	
4461	4.0×3.8	N 22° E	30		東 壁	*	
第68次調査 (6 A B F)							
4501	4.0×2.7	E 29° N	15			奈良前	周溝あり
4502	3.0×2.8	E 26° S	10			*	
4503	3.6×2.6	N 6° E	20		東 壁	*	
4504	3.3× -	E 14° S	15			*	
4505	3.4×3.0	E 12° S	30			*	
4506	-×3.0	E 28° S	30		北 壁	*	
4507	-×3.3	E 25° S	20			*	

S B	規模 (m)	長軸方向	深さ	柱穴	カマド	時期	備考
4508	—	—	10 (cm)			奈良前	
4509	4.6×3.3	N 20° E	20		東 壁	タ	
4510	4.0×—	N 23° E	20		タ	タ	

第64-5次調査 (6 A C M - R · Q · O)

4688	- × -	E 44° S	17		奈良	
------	-------	---------	----	--	----	--

第64-7次調査 (6 A G I - G)

4632	3.3×2.6	N 2° W	12	東 壁	奈良後	
------	---------	--------	----	-----	-----	--

第64-12次調査 (6 A D E - B)

4797	- × -	N 0° E	24			奈良後	
4798	- × -	N 5° E	22			タ	SB4799と重複するが切り合 は不明
4799	- × -	N 5° E	30	東 壁	タ		

斎宮跡発掘次数一覧表

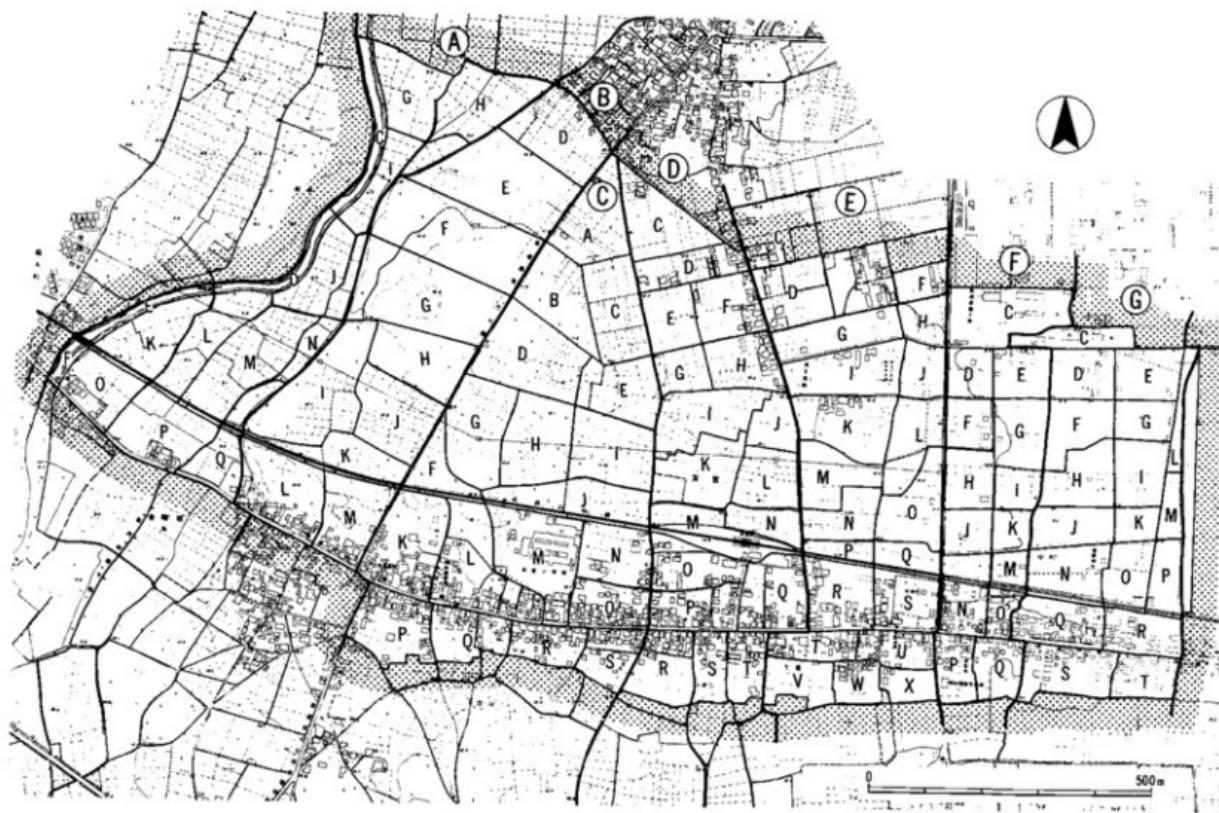
次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
1	45	試掘	13-3		古里3283(村上)
2	46	古里A地区	13-4		樂殿2916~2917(松井)
3		B地区	13-5		御船2974-1(川本)
4	47	C地区	13-6		中垣内375-1(南)
5	48	D地区	13-7		東裏328(小川)
6-1		Aトレンチ	13-8		西加座2771-1(細井繁久)
6-2		Bトレンチ	13-9		〃2773(細井国太郎)
6-3		Cトレンチ	13-10		東裏362-1(児島)
6-4		Dトレンチ	13-11		西加座2681-1(浮田)
6-5		Eトレンチ	13-12		〃2721-3、2724-2(森川)
7	49	古里E地区	13-13		東前沖2506-2(宮下)
8-1		Fトレンチ	14-1	52	2Eトレンチ
8-2		Gトレンチ	14-2		2Fトレンチ
8-3		Hトレンチ	14-3		2Gトレンチ
8-4		Iトレンチ	14-4		2Hトレンチ
8-5		Jトレンチ	14-5		2Iトレンチ
8-6		Kトレンチ	15		斎宮小学校
8-7		Lトレンチ	16-1		竹川町道A
8-8		Mトレンチ	16-2		〃B
8-9		Nトレンチ	16-3		〃C
8-10		Oトレンチ	16-4		〃D
8-11		Pトレンチ	16-5		〃E
9-1	50	Qトレンチ	16-6		〃F
9-2		Rトレンチ	17-1		竹神社社務所
9-3		Sトレンチ	17-2		竹神社防火用水
9-4		Tトレンチ	17-3		西加座2721-6(西沢)
9-5		Uトレンチ	17-4		樂殿2894-1(中川)
9-6		Vトレンチ	17-5		〃2895-1(西口)
9-7		Wトレンチ	17-6		出在家3237-3(吉川)
9-8		Xトレンチ	17-7		〃3237-1(里中)
9-9		Yトレンチ	17-8		樂殿2894-1(西村)
9-10		Zトレンチ	17-9		東海遊機
10		広域道路	18	53	6AEL-E・I(下闘)
11-1		西加座2661-1(山中)	19		6AEN-M・N・O(御船)
11-2		〃2681-1(山名)	20		6AEO-I・J(柳原)
11-3		東前沖2483-2(前田)	21-1		6AGN-B(鐵治山、中山)
11-4		下園2926-9(吉木)	21-2		6AFI-D(西加座2711-2、2717-4他、山路)
12-1	51	2Aトレンチ	21-3	53	6AFD-D(西前沖2649-1、大西)
12-2		2Bトレンチ	21-4		6AFH-F(西加座2678、2679-3、森下)
12-3		2Cトレンチ	21-5		6AGD-K(東前沖、渡部)
12-4	51	2Dトレンチ	21-6		6ACA-T(古里3269-2、中西)
13-1		東加座2436-7(浜口)	21-7		6AFE-F(東前沖2631-1、鈴木)
13-2		〃2436-4(中村)	21-8		6AEG-A(樂殿2909-3、大西)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
21-9		6AED-R (篠林3218-3、宇田)	37-3		6AFC-F (西前沖2604-6、押田)
22-1		6AGU	37-4		6AFC-M (西前沖2604、日本絆木)
22-2		6AGU	37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)
22-3		6AGW	37-6		6ABD-A (古里 588-2、北戸)
23	54	6AEL-B (下園)	37-7		6AEC-M (周子2861-2、斎王公民館)
24		6AGF-D (西加座)	37-8		6ADR-P (木葉山 128-8、13、14、富山)
25-1		6ADP-K (牛糞3029-1、三重土地ホーム)	37-9		6ACK-E (東加座2355-1、竹内)
25-2		6ACA-Y (古里3270、脇田)	37-10		6AED-O (東加座2317-1、波部)
25-3		6ADD-F (篠林3139-3、池田)	37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)
25-4		6AER-H (牛糞3014、牛糞公民館)	37-12		6AFH-J (西加座2681-1、3、4、渋谷)
25-5		6AGN-H (鐵治山2392、丸山)	37-13		6AGK-F (東加座2385-3、2386-3、竹内)
25-6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	38		6ACD-S (塚山)
25-7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	39		6ABD-R・S・T (古里)
25-8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	40		6AGH-L・M (東加座)
25-9		6ACN-C (法頭3387-1、北出)	41		6AGJ-J 他 (斎宮地内)
25-10		6AEV-A (鈴池 339-1、水島)	42-1	57	6AEI-D・F (柴殿)
25-11		6ACF-B (東裏 364-1、洪)	42-2		6AEK-A・B (柴殿)
25-12		6AEE-Y (柴殿2892-3、山本)	43-1		6ADC-C (出在家2325-2、永田)
25-13		6AFJ-E (西加座2766-1、山内)	43-2		6ADT-B (木葉山 308-1、山本)
26-1		6AFR (中西)	43-3		6ACP-T (南裏 241-1、辻)
26-2		6AEX~6ACQ (鈴池、木葉山、南裏)	43-4		6ADS-D (牛糞 123-3、西山)
26-3		6AEV-X・X (鈴池)	43-5		6ADE-D (篠林3220-3、澄野)
26-4		6ACR (木葉山、南裏)	43-6		6AGE (東前沖、町道側溝)
27		6AGC-S・T (東裏)	43-7		6ABD-F (古里 588-6、今西)
28		6AEO-D (梅原)	43-8		6ADQ-II (牛糞3025-2、大西)
29		6AFI・6AFL・6AFX・6AFM・6AGI	44		6AFL-A・B (鐵治山2759-1、他)
30	55	6ABJ-Y・X・W (中川内)	45		6AEG-P・Q (柴殿2904-2、他)
31-1		6ADO-M (内山3038-13、岩見)	46		6AGN-C・D (鐵治山2737-1、他)
31-2		6ACP-I (南裏 227-2・鈴木)	47		6ADJ-D・G 他 (西加座、鈴池、宮之前、上園)
31-3		6ABD-A (古里 588-4、北戸)	48-1	58	6ACM-M (法頭3385、斎宮小)
31-4		6ADQ-T (牛糞3018-2、百五銀行)	48-2		6ADP-Q (牛糞3033-1・2、吉田)
31-5		6ACC-G (塚山3338-3、水谷)	48-3		6ABL-M (中川内 434-6、西川)
31-6		6ABO-X (古里 576-1、池田)	48-4		6AGL-B (東前沖2480、倉田)
31-7		6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-5		6AGD-6AFE (東前沖、町道側溝)
31-8		6ACN-G (法頭3388-1、5、8、9、森)	48-6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31-9		6AGD-L (北野2487-1、中川)	48-7		6ADT-II (木葉山 307、森森)
31-10		6ADM-O (内山3043-3、斎宮駅)	48-8	58	6ACL-E・F・G (東裏 334-15、他)
31-11		6ADT-I (木葉山 304-2、澄野)	48-9		6AEV-J (鈴池 341-1、乾)
31-12	55	6ADT-J (木葉山 304-7、宇田)	48-10		6AGT (牛糞、町道側溝)
32		6ACE-D・E・F (塚山)	48-11		6ADP-E (鐵治山2351-1、2352-1、梅原)
33		6ADE-C・D 他 (篠林)	48-12		6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)
34		6AFX-F・G・H (西加座)	48-13		6ACM-O (東裏、斎宮小)
35		6APE 他 (西前沖)	48-14		6AET (牛糞、町道側溝)
36	56	6ABI-F (中川内)	49		6ADI-D・U・V・W・X (上園3083、他)
37-1		6AFC-M (西前沖2064、日本絆木)	50		6ACH-H (東裏 294、297、山本)
37-2		6ABQ-R (牛糞3021-2、野田)	51		6AFF-D (西加座2663-1・4、2664、森下)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
52		6AGF-D (西加座2703、他)	58-7		6AGS-G (中西 611、山路)
53-1	59	6ACM-P (東裏 284、体育館)	58-8		6ABM-A (中垣内 430-3 他、近鉄)
53-2		6ACA-M (古里3280-2、中西)	59		6ACJ-I (庄原3379-1、他)
53-3		6ABE (古里 573-2、永納)	60		6AGJ-B・D・G (東加座2450-1、他)
53-4		6ACL-S (東裏 271-1、田所)	61		6AFF-B・I・D (西加座2663-1、他)
53-5		6ACR (木葉山97-5、田中)	62		6AGI-J・K (東加座2425、他)
53-6		6AGO (鍛冶山、町道側溝)	63		6APG-H・N (西加座2659-1、他)
53-7		6ADD-U (蘿林3147-3、野口)	64-1	6ACO-II (牛桑3395-1、トーカイ)	
53-8		6AGE-O (東前沖2470-2、上田)	64-2	6AGL-F (東加座2435-1、大和谷)	
53-9		6ACS-O (木葉山95-2、浅尾)	64-3	6ADD-A (蘿林3136-1、山路)	
53-10		6ACA-R (古里3267-1、西川)	64-4	6AGR-N (苗田2340、丸山)	
53-11		6ADR-W (木葉山 131-7、西村)	64-5	6ACM-R・Q・O (東裏3385-2、斎宮小)	
53-12		6ABL-K (中垣内 464-2、沢)	64-6	6ACK- (東裏 361-2、竹川自治会)	
53-13		6ADQ-L (牛桑3022、辻)	64-7	6AGI-G (東加座2435-2、大和谷)	
53-14		6ACM-O (東裏 287-3、体育館)	64-8	6AGR-J (苗田2341-6、山下)	
53-15		6AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)	64-9	6ADQ-M (牛桑、町道側溝)	
54		6AFE-N (西前沖2630、他)	64-10	6ACF-A (東裏 365-1、橋口)	
55		6AEN-P (梅原、御船2785-1、他)	64-11	6ACM-O (東裏3385-2、斎宮小)	
56		6ACH-S (東裏 289-1、他)	64-12	6ADE-B (蘿林3162-3、江崎)	
57		6AGF-H・I (東加座2441、他)	65-1	6ACC-M (塩山1331-1)	
58-1	60	6AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)	65-2	6AEG-S (栗崎2908-2、他)	
58-2	60	6AFH-N (西加座2681-8、三村)	65-3	6AEI-L・M (栗崎2917-4、他)	
58-3		6ACM-N (東裏3385-2、斎宮小)	66	6AGG-C (東加座2437-1、他)	
58-4		6ABL-A (中垣内4731-1、小家)	67	6ABF- (古里 523、他)	
58-5		6ADQ-Q (牛桑、町道側溝)	68	6ABP- (古里 502、他)	
58-6		6ADR-V (木葉山 131-3、西山)	69	6AGM-E-H (東加座2373、他)	

三重県遺跡標示一覧表

時 代		種 別 と 地 区					
0		A 国 郡 術		K 北 勢	T 伊 勢	城	
1	先 繩 文	B 伊 勢		L 中 勢	U 志摩熊野	磐	
2	繩 文	C 志摩熊野		M 南 勢	V 伊 賀	館	
3	彌 生	D 伊 賀		N 志 摩	W 記念物		
4	古 墳	E 北 勢		O 熊 野	X 交 通		
5	飛 鳥	F 中 勢		P 伊 賀	Y		
6	奈 良	G 南 勢		Q 伊 勢	Z そ の 他		
7	平 安	H 志 摩		R 志摩熊野			
8	鎌 倉	I 熊 野		S 伊 賀			
9	室町以降	J 伊 賀					



三宮跡・地区表示

図 版



第66次調査 全景 (北から)



第67次調査 全景 (東から)



S X 4310 (南から)



S B 4318 · S B 4319 (北から)



第65次~2次調査 全景 (北から)



S X 4335 (東から)



S B 4342 (西から)



S D 2625 (東から)



全景（西から）



S B 4396・S B 4394（南から）



S B 4392 (西から)



S B 4402 · S B 4399 (西から)



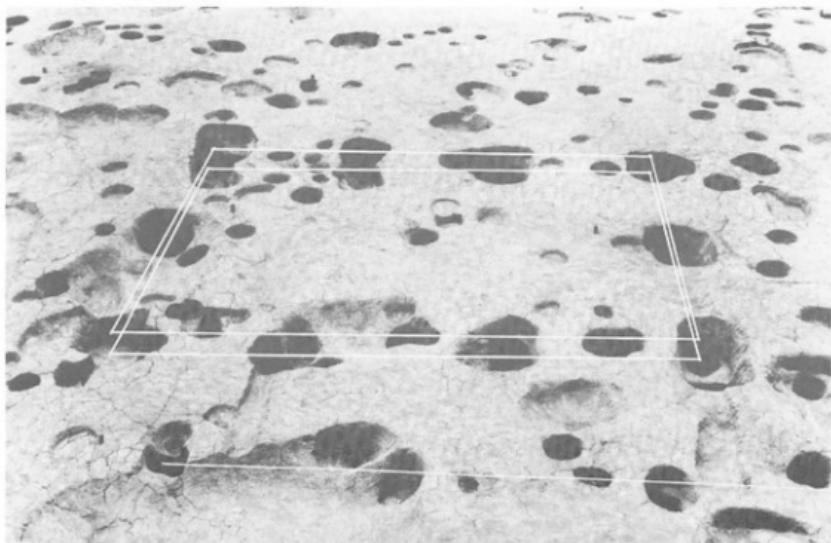
S B 4390 (西から)



S B 4410・S B 4410 (西から)



S B 4380 · S B 4381 (東から)



S B 4380 · S B 4381 (北から)



全景 (北から)



S B 4426・S B 4427 (北西から)



S B 4433 (北西から)



S B 4443 · S B 4445 (北から)



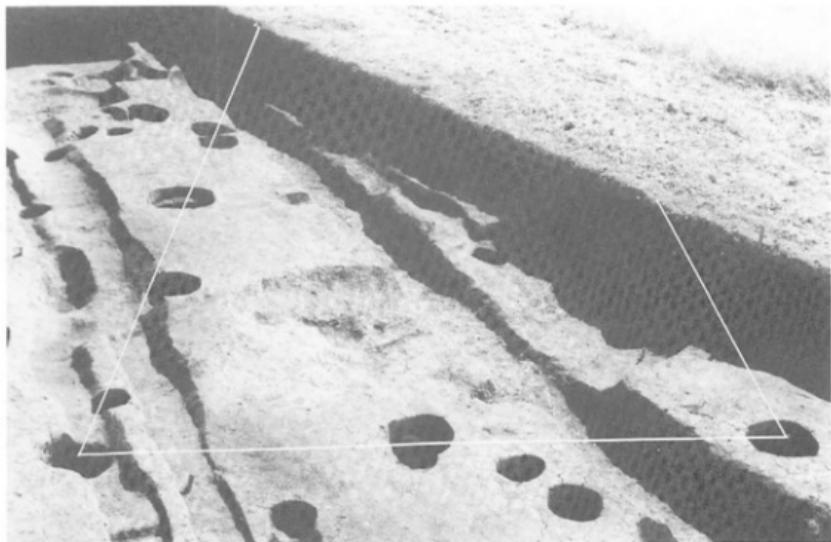
S B 4466・S X 4471 (東から)



S B 4466 (南西から)



S B 4429 (北西から)



S B 4476 (北西から)



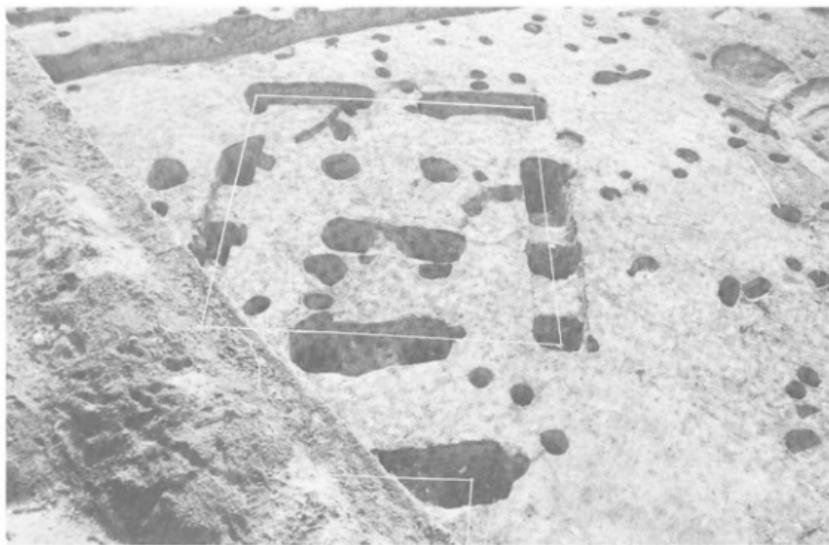
全景



全景 (西から)



S X 4562 (北から)



S B 4560 (北東から)



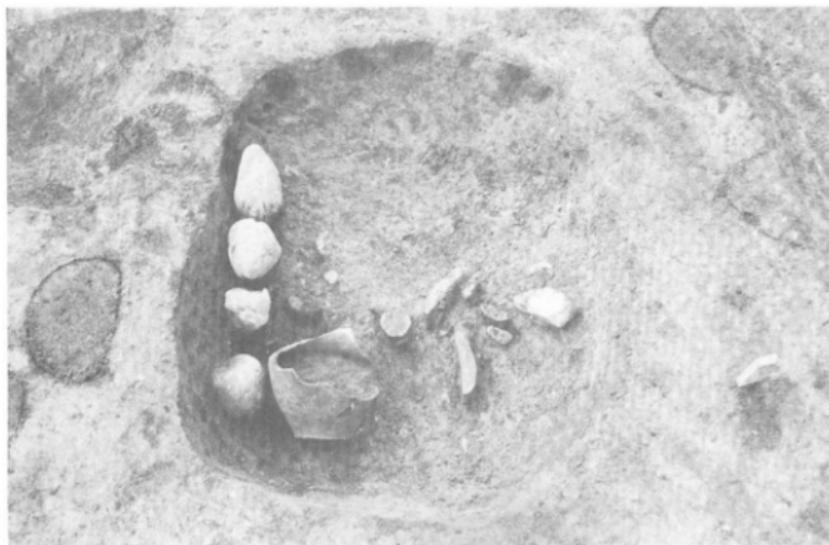
S X 4550 (東から)



S B 4430 (北東から)



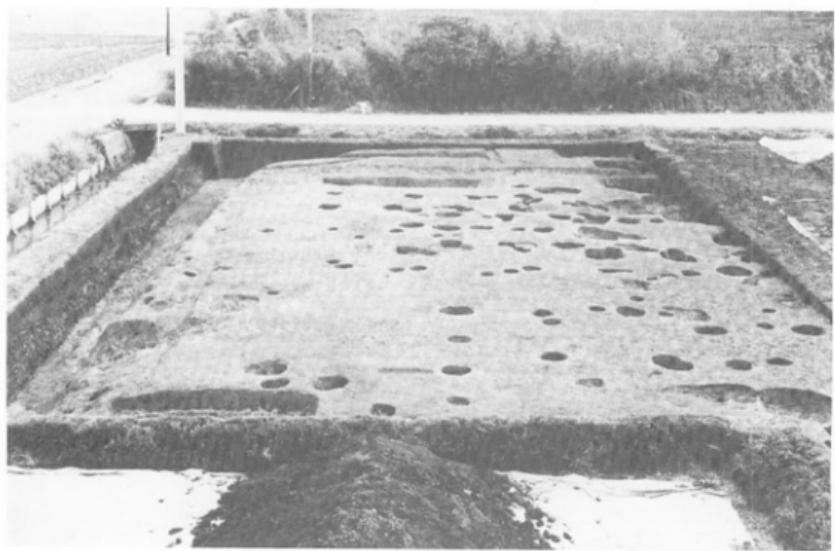
S B 4521 (北東から)



S X 4527 (南東から)



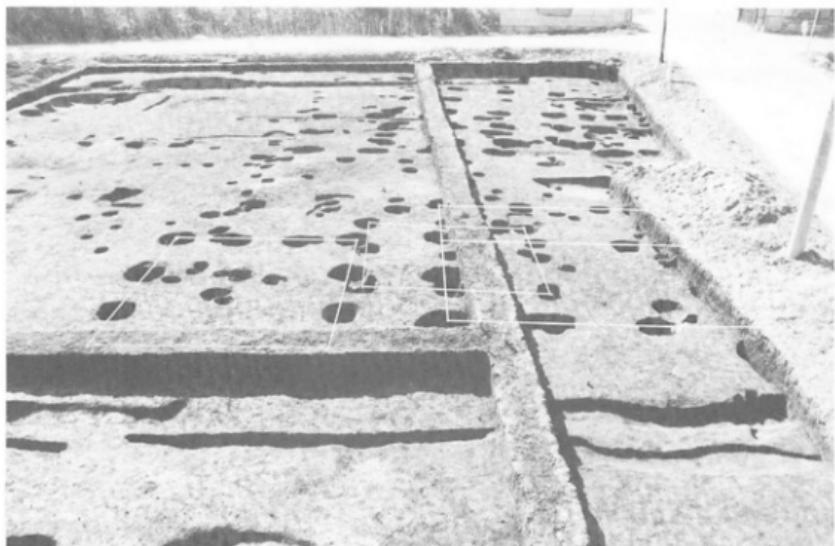
西部地区 全景



東部地区 全景 (北から)



S B 4610・S B 367 (西から)



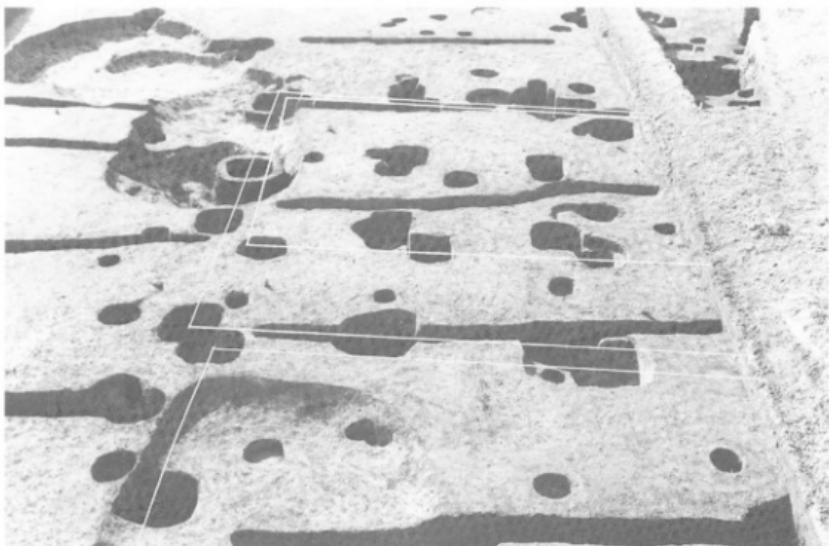
S B 4591・S B 4592 (北から)



S B 4588・S B 4589 (北から)



S B 4600 (北から)



S B 4547・S B 4575 (北から)



S B 4573・S B 4574 (東から)



第64-1次調査（南から）



第64-2次調査（西から）



第64-2次調査（南から）



第64-3次調査（北から）



第64-5次調査 (東から)



第64-7次調査 南部 (西から)



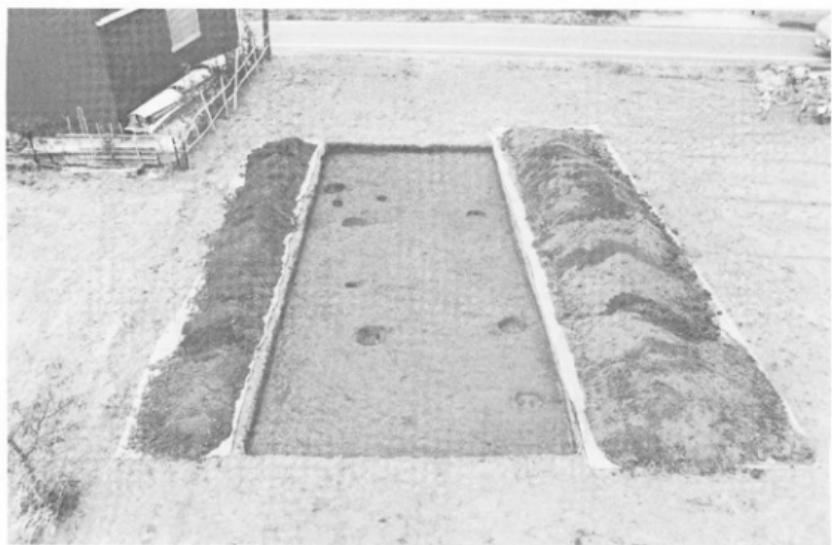
第64-7次調査 北部 (西から)



第64-7次調査 S B 4650 (東から)



第64-7次調査 S B 4650 (北から)



第64-10次調査 (東から)



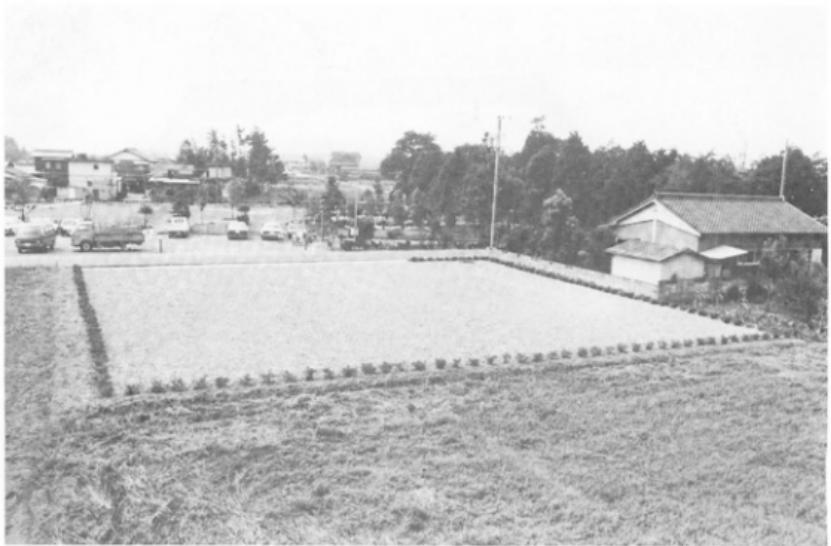
第64-11次調査 (北から)



第64-12次調査 (北から)



芝生広場（南西から）



砂利広場（北から）



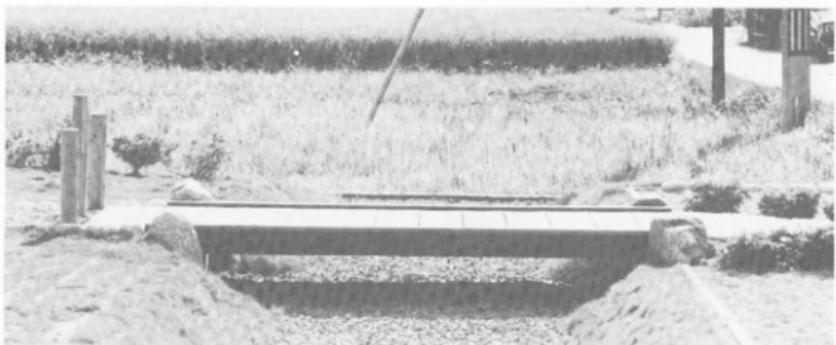
散策道路（南西から）



区画溝・道路（東から）



散策道路（西から）



区画溝と橋（西から）



ベンチ（南西から）

三重県斎宮跡調査事務所年報1986

史 跡 斎 宮 跡

——発掘調査概報——

昭和62年3月31日

編集発行 三重県斎宮跡調査事務所

印 刷 オリエンタル印刷(株)

本書は、三重県教育委員会の許可を得て斎宮研究会
が増刷したものである。

